（表紙）

吉貴公　自享保三年九月
繼豐公　至同　四年二月

追錄　舊記雜錄　巻五十四

950　繼豐公御譜中
正文在文庫

爲年頭之嘉儀被差渡使簡、殊別錄之通贈給之、入念ハヽ之段欣然之至ハヽ、猶期後喜之時ハヽ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）九月二日　侍從繼豐御判

謹上　中山王（尚敬）

951　仝上

芳札令披見ハヽ、弥安全之旨珎重存ハヽ、於我等無吳事ハヽ、入念示給殊紕縮緬五巻被相贈之、懇切至存ハヽ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）九月二日　侍從繼豐判

中山王　回章

952　仝上

松平越中守（定重）殿就卒去、爲悔示給入念儀ハヽ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）九月三日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

953　吉貴公御譜中
正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺ハヽ、委曲久世大和守（重之）可述ハヽ也、

享保三年（朱カキ）九月七日　○（印文「吉宗」）

（島津吉貴）薩摩

中將殿

954　吉貴公御譜中
正文在琉球國國司

芳翰令披見ハ、就　御代替以使者御祝儀申上ハ儀相伺ハ
處、先規之通被　仰付難有被存之段、紙面之趣江府ニ申
上ハ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）九月九日　中將吉貴御判

謹上　中山王

955

正文在琉球國國司

芳翰令披見ハ、從大清封王使之節、贈物之内武具相用ハ
儀付ゐ、江府段〻奉伺之ハ之處、先例之通首尾能被　仰
出、難有安堵之由尤之事ハ、依之以西平親方謝禮之趣入
念儀ハ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）九月九日　中將吉貴御判

謹上　中山王

956

仝御譜中

嚮レ是

大樹吉宗公嗣レ位、從二先躅一吉貴述職之日、率二琉使一當レ
來二于東都一、蒙二　台命一、是故同年九月十一日吉貴發二薩
城一、爲二述職一朝二東都一、時率二中山王尚敬慶賀正使越來
王子一（嚮レ是有二二年之例格一也、台命一、今般琉使見レ用二天和一、故減而從者都九十四員、）家老比志島隼人範
房、若年寄名越右膳恒渡、用人平岡八郎太夫之品等扈二
從之一、吉貴到二大磯假館一止宿、十月朔日發二假館一、歷二
蒲生路一到二和泉地一（或曰、出水）、自レ夫取二驛路九州一、琉使者、
家老北鄉作左衛門久嘉、用人谷山角太夫純房・宮之原甚
太夫重行、使番新納彌太夫時方等護二送之一、自二伊集院一
到二向田一、開帆歷二涉西海一、

957

仝上

正文在文庫

芳牒披閲、今度海陸平安歸國之由早速被示聞、欣幸之至
ハ、此地無事ハ、尚期後信ハ、謹言、

享保三年（朱カキ）季秋十二　（近衛家熙）（花押）No.3

薩摩中將殿

958

仝上

芳翰披覽、先〻海陸無難、去月十五日歸國之由被示聞、
目出度悦入ハ、漸涼氣弥可爲清福珎重、此邊無吴事ハ也、

秋末十五日　（近衛）基熙

薩摩中將殿

959

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳簡令披見ゟ、去歳

有章院様(徳川家継)薨御奉絶言語ゟ、依之爲見舞川平親方被差越、

目錄表被相贈之入念儀存ゟ、恐惶不宣、

享保三年(朱カキ) 九月十五日 中將吉貴御判

謹上 中山王

960

継豊公御譜中

正文在文庫

申せとの御事に御座ゟ、扨は只今きかせられゟ得者、松平因幡守殿(定逸)死去被成ゟよし、御しやうし御うとましく思しめしゟ、御手前さまこも嘸御殘多思召被成ゟハんと、一入御きのとくニ思しめしゟ、御くやミのため申せとてゟ、かしく、

享保三年(朱カキ)

松平 大隅守さま 人々御中 岩倉 梅園

961

仝上

なを〳〵御無事の御事ニおハしましゟや、數〳〵きかせられたき、何もよく申せとの御事ニ御さゟ、一位様より申せとの御事ニ御座ゟ、御もふけの内なから、御てまへさまいよ〳〵御替りなされゟ御事御座なく、御ふしの御事ニ御座なされゟ哉と、きかせられ度思しめしゟ、扨ハ此御もくろく(目録)の通あら〳〵しき御事なから、御朦氣御たつね遊ハしゟ御事まてニ參らせられゟ、かしく、

享保三年(朱カキ)

松平 大隅守さま 人々御中 岩倉 梅園

962

継豊公御譜中

正文在文庫

松平因幡守殿御病氣之處、御養生不被相叶御卒去之旨、絶言語可爲御殘念察入存候、此段爲可申述如斯御座ゟ、恐惶謹言、

享保三年 九月廿五日 松平陸奥守(伊達) 吉村判

松平大隅守様 人々御中

963

仝上

此由、何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、返〳〵かしく、

御文被下披露申まいらせゟ、此ほとは
一位様より御もふき御尋、御目錄の通參らせられゟへハ、
かたしけなく思しめし被成ゟよしにて、御忌明ニ付、御
禮仰上られゟ御事、何も御念入まいらせられゟ御事と御
滿そくニ思しめしゟ、めてかしく、

享保三年（朱カキ）　　ゟ

松平　　岩倉
大隅守さま　　梅園
人〻御返事

964

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又爲參勤國
元發足、從琉球中山王差上ゟ使者被連之由、紙面之趣各
一覽之事ゟ、恐〻謹言、

享保三年（朱カキ）十月九日　　戸田山城守忠眞判

松平薩摩守殿

965

吉貴公御譜中

同年十月十四日吉貴到二豐前大里一駕レ船、自レ是率二琉使一
共航二海程一、閏十月四日吉貴之乘船著二播州坂越港一、取二
陸路一到二攝州兵庫港一、再駕レ船與二琉使船一相會、同十日
著二大坂津一、兼日奉二 台命一、龜井隱岐守茲親・松平周（松井）
防守康豐・松浦肥前守英（篤信）、自二津口一出二河船三艘一、遡レ
流待二接琉使一、及賜二小艇三五艘一、運二輸琉使之旅具一、
琉使隨二吉貴乘船之後一、戲下諸有司掉二小船一、各出レ令
警二衞琉使船一、指二揮之一其法尤嚴也、且見レ除二涉レ河之
大小船一、總如二先規一矣、吉著（貴脫カ）二大坂一休止三日、

966

仝上

正文在琉球國國司

從　國王様被成下尊書拜見仕ゟ、封王使ゟ進物且亦唐ゟ
謝恩使被差越ゟ節、前代より武具被相用ゟ段
太守様達　貴聞、御賢慮之上江戸ゟ被相伺ゟ處、先格之
通被　仰出ゟ、御禮之趣遂披露ゟ、比旨可有洩達ゟ、恐
〻謹言、

朱カキ
享保三年十月十五日　　種子嶋彈正
久基判
嶋津將監
久當判
嶋津杢
久武判
豐見城王子
三司官

967

仝上

去ル四月廿三日之書付相達ゟ、浙江省寧波府之内、定海縣・鎮海縣之者共爲巡哨、去年十二月朔日定海山致出船、普陀山ニ相渡ゟ處、同廿日夜俄逢難風、當正月五日八重山嶋ニ漂着及破損ゟ、依之唐人四拾貳人不殘致介抱、當四月十九日本琉球之内、泊之津(神縄本島)迄送越ゟ處、右唐人之内壹人致病死土葬取置、殘四拾壹人其元より乘船申付、福州迄被送越筈之由、委曲被申越趣相達、江戸御老中樣并長崎御奉行御屆相濟ゟ、比段可有承達ゟ、恐〻謹言、

朱カキ
享保三年十月十五日　　嶋津將監
久當判
豐見城王子
三司官

968

繼豐公御譜中
正文在島津備中

芳札令披見ゟ、
太守樣御機嫌能去月十一日鹿兒島被遊御發駕ゟ、爲怡示給入念ゟ段欣然之至ゟ、於我等茂無恙ゟ條可易芳意ゟ、謹言、

朱カキ
享保三年十日十六日　　繼豐御判
島津玄蕃(貴儲)殿

969

繼豐公御譜中
正文在文庫

猶〳〵向冷寒ゟへ共、弥御無吴之御事珎重存ゟ、御同姓薩摩守殿爲御參勤、頃日領分御通船御堅固之由致承知ゟ、可御心安ゟ、將亦先頃於殿中、同氏佐渡(毛利宗元)守へ拙者御噂之由申越忝存ゟ、無別儀致在城ゟ、以上、

一筆致啓達ゟ、冷氣之節弥御堅固御座ゟ哉承度存ゟ、拙者儀無恙致在國ゟ、將又先月廿八日其御地拙宅ニ御見舞被下ゟ由忝存ゟ、爲御禮旁如是御座ゟ、恐惶謹言、

朱カキ
享保三年十月廿六日　　松平民部大輔(毛利)
吉元判

970

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將亦琉球中山王使者召連、長州赤間關迄着舩之由得其意ハ、紙面之趣各一覽之事ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保三年十月廿八日　水野和泉守忠之判

松平薩摩守殿

松平大隅守様

人〻御中

971

仝上

返〳〵よろしき様ニ申せとの御事ニ御さハ、かしく、ひとひは御國もとより文被下、則ひろういたしまいらせハ、まつ〳〵

一位様御機けんよくならせられ、めてたくおほしめし被成ハよし、さてハ御同氏大すみの守様并おくさまへ御もふき中、御もくろくのとをりまいらせられハへハ、御禮被仰上御念入らせられハ御事ニ思しめしハまゝ、かしく、

972

仝御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様御機嫌被相伺之ハ、益御勇健御儀ハ間可御心安ハ、隨而小熬海鼠一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保三年閏十月三日　久世大和守重之判

松平薩摩守殿（島津吉貴）

朱カキ享保三年

まつ平

さつまの守様

人〻御中

御返事

いわ倉

梅その

973

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、水戸中納言殿（綱條）逝去之段被承之被絶言語ハ、公方様御機嫌以使者被相伺之ハ、御安全之御儀ハ間可御心易ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

享保三年閏十月六日　　久世大和守重之判

松平薩摩守殿

974

継豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見ゟ、其表無別條貴殿御無吴之由珎重存ゟ、我等無吴事今日大坂到着令大慶ゟ、依之爲祝詞以使目錄之表饋給之、入念儀令祝着ゟ、恐〻謹言、

享保三年閏十月十日　　薩摩守吉貴御判

松平大隅守殿（島津継豊）　御報

975

吉貴公御譜中

正文在文庫

今度（徳川家宣）文昭院様七回御忌御法事御執行付ゐ、以使者御香奠被獻之ゟ、於増上寺奉納之事ゟ、右之趣及言上ゟ、恐〻謹言、

享保三年閏十月十一日　　水野和泉守忠之判

松平薩摩守殿

976

継豊公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ゟ間、不及登　城ゟ、以上、

享保三年閏十月十四日　　水野和泉守（忠之）
戸田山城守（忠真）
久世大和守（重之）
井上河内守（正岑）

松平大隅守殿

977

吉貴公御譜中

同年閏十月十四日、吉貴率二琉使一發二大坂一、其夜宿二枚方一、尋十五日著二城州伏見驛一、侯伯諸有司出二諸船一、遡レ流施レ令警二衛琉使船一同二于前一、吉貴休二止于伏見一二日、

978

仝上

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、今度

文昭院様七回御忌之御法事於増上寺御執行相濟、去月十

四日　御佛殿　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゝ、依之被差越使者ゝ紙面之趣、各申談及　上聞ゝ、恐〻謹言、

享保三年（朱カキ）閏十月十六日　　久世大和守重之判

松平薩摩守殿

979

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゝ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゝ、將又琉球中山王使者召連、去十日大坂着船之由得其意ゝ、紙面之趣各一覽之事ゝ、恐〻謹言、

享保三年（朱カキ）閏十月十八日　　久世大和守重之判

松平薩摩守殿

980

仝御譜中

同年閏十月十八日、吉貴率二琉使一發二伏見驛一、取二路於江州・濃州・東海一、是故賜二驛馬百匹・擔夫四百五十員於琉使一、

981

吉貴公御譜中

正文在文庫

就繼目之御禮相濟ゝ、使簡殊御太刀・馬代并目錄之通被懸芳意、御念入之段過當之至存ゝ、恐〻謹言、

享保三年（朱カキ）閏十月廿二日　　水戸少將宗堯判

松平薩摩守殿　御報

982

仝上

如御札水戸中納言（德川綱條）殿遺跡少將殿相續被仰出珎重之事ゝ、依之入御念ゝ段欣然之至存ゝ、恐〻謹言、

享保三年（朱カキ）閏十月廿二日　　尾張中納言繼友判

薩摩中將殿　御報

983

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

新金銀を以當戌十一月より通用可仕覺

一金吹直被　仰付、段〻出來によって、最前相觸ゝ通來亥年を限、乾字金通用停止ゝ、依之向後諸色相對を以

直段相究ル事ハ格別、獻上被下金又ハ給金・借金拂・殘金等、すへて前々ゟ定來ル員數にて通用ル儀、左之通被仰出ル事、

附 乾字金にて備兩と申、取やりヲ得共、當戌十一月ゟ新金にて何兩と申取やり可仕ル、尤乾之字金通用有之内ハ、新金之代乾字金引替之法を以遣ル儀ハ、勝手次第之事、

一金ハ正味之有目ニ吹直され、足金不及ル故、右之ことく出來ル得共、銀ハ正味不足多有之によって、灰吹銀にて足銀被　仰付ル處、近年山々より出ル銀之出方にてハ、貳拾ケ年餘にても成就計かたくル、依之金之通向後銀之有目にて吹直被仰付ル員數に隨ひ、通用ル儀是又左之通被仰出ル事、

附 通用銀にて何枚何貫目と申取やりヲ得共、當戌十一月より新銀ニゐ何枚何貫目と申取やり可仕ル、通用銀等通用有之内ハ、新銀之代りに通用銀引替之法を以遣ル儀ハ勝手次第之事、

一乾字金引替ハ、當戌年より來ル寅年迄五ケ年に限るへし、元禄金引替ハ來亥年可限事、

新金銀引替之法

乾字金・元禄(禄)金と新金引替之儀、只今迄之通相違無之、慶長之古銀并新銀拾貫目付元禄銀貳割半増、拾貳貫五百目を以代之、

但 元禄銀ハ、正味之割合無相違故只今迄之割合、寶永銀ハ六割増、拾六貫目を以代之、中銀ハ拾割増、貳拾貫目を以代之、三寶銀ハ拾五割増、貳拾五貫目を以代之、四寶銀ハ三拾割増、四拾貫目を以代之、右割合を以當戌十一月より來ル寅年迄五ケ年限り急度可引替事、

一年貢并小物成・諸運上之類、員數を定、元禄九子年以前より納來ル金銀ハ、新金(銀カ)錄にても只今迄之員數相納へし、子年より納來ル分ハ、新金銀にてハ半減たるへし、

但 子年より納來ル品ニゐも、古來之格を以納ル分、新金銀にても員數差別なく可相納事、

一元禄九子年より以來請負にて直段相極ル類、此以後も右員數を可用分ハ、當時之直段積を以極直可申事、

一年貢并小物成・諸運上・諸色共に、元禄九子年より當戌閏十月迄其時々之直段積を以相極ル、品々納殘り又

ハ諸色代物拂殘之類ハ、乾字金百兩之所ゟ新金五拾兩、通用銀拾貫目之所ハ新銀貳貫五百目可遣之事、

一獻上并被下金銀古來よりの格式有之ニ付、新金銀にても差別無之、世上祝儀取かわし、或ハ禮物等遣ハ儀可準之事、

一借金銀ハ、元禄九子年以前借用之返濟殘りハ、新金銀にても其員數可返之、子年已來之借用ゟ、金百兩之所ハ新金五拾兩、銀拾貫目之所ハ新銀貳貫五百目可相返事、

一給金銀ゟ元禄九子年前後共差別なく、新金銀にても只今迄之員數たるへし、然共相對を以召抱ハわたり奉公人之類ハ、近來之給金銀員數を不可用、猶又相對次第たるへき事、

附 元禄九子年以來、金銀位悪敷成、つゝきかねハ子細を以別段ニ金銀遣ハ類ハ、元高新金銀にて遣ハ上ハ増金銀ハ相止可申事、

一合力等入用之積りを以相極ハ類ハ、元禄九子年以前相極ハ分ハ新金銀にても其員數たるへし、尤子年以來相極候品ゟ半減たるへき事、

右之通堅可相守、此外之儀ゟ書面之趣ニ可準之、且又割合改りハゟ、寶永已來の銀計之事ニハ得ハ、新金銀錢兩替或ハ賣買之直段等ニ付、紛敷手たて仕におゐてハ、急度御僉儀之上ハ可被處嚴科者也、

「享保三年」戌閏十月

「御用番久世大和守様(朱)(重之)ゟ諸家御留守居被召呼ハ間、閏十月廿八日森川理右衛門(武宣)罷出ハ處、御用人加藤次郎ニ而右御書付御渡、御答之儀ゟ先格之通可被成由被申ハ由、理右衛門申出ハ」

984

継豊公御譜中
正文在文庫

よろしき様に心得ハて、申せとの御事ニ御さハ、返〳〵かしく、

御ふミ被下則ひろういたしまいらせハ、まつ〳〵

一位様(天英院、徳川家宣室)御機(近衛家久)けんよくならせられハ、被仰上ハことく右府様御道中御機けんよく御着あそハしハ、大方ならす御満足ニおほしめしハ、まことにいく萬〻年もさい〳〵御下向あそハしハ様にといわゐ入らせられハ、御文之様御まんそくに思しめしハ、めてかしく、

享保三年(朱カキ)

ゟ

985

いわ倉

まつ平

大すみの守様　御返事　人〻御中　梅園

全上

返〳〵御念いらせられ御悦おほせあけられ、萬〳〵年もと思しめしけ御事ニ御さけ、かしく、

御文くたされけ、まつ〳〵

一位様御機嫌よくならせられけ、御心易思しめし被成けへくけ、さてハ　右府様御道中御機けんよく、去ル十六日ニ御上京あそハしけ御事

一位様御満足の御事にけ、御めてたく思しめし被成けよし御悦仰上られ、御文のやう披露いたし参らせけへハ、御満足ニ思しめしけ、此よしよく申せとの御事ニ御さけ、めてかしく、

享保三年（朱カキ）

松平　大隅守さま　御返事　人〻御中　岩倉　梅その

986

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵御てまへさまニも御ふしの御事、めて度覺しめしけ、何もよく申せとてけ、かしく、

文くたされけ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられけ御事、御めてたく思しめしなされけよし、扨は去月十八日

一位様より奥かたへ御たつねまし遊ハしけ御事まてニ、両種参らせられけへハ、誠ニ御懇の御事、御てまへさまニおゐて かたしけなく思しめし被成けよし御禮仰上られ、御ふミのやう御念いらせられけ御事ニ思しめしけ、此よし何もよく心得けて申せとの御事ニ御座け、めてかしく、

享保三年（朱キキ）

松平　さつま守さま　御返事　人〻御中　岩倉　梅その

987

全上

なを〳〵久〳〵ニて緩〻と御對面あそハされ、御悦遊ハしけ御事御さけ、何もよく申せとてけ、かしく、

御ふミ下されけ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられゟ御事、御めてたくおほしめしなされゟよし、さては去の頃
右府様御下向遊ハし、久〳〵にて
一位様御對面遊されゟ御事、御満足ニ思しめさせられゟ半と目出度おほしめし被成ゟよし、御悦仰上られ文のやう披露いたし參らせゟ得ハ、御満足に思しめしゟ、此よし何もよく申せとの御事御座ゟ、めてかしく、

享保三年（朱カキ）

松平
さつま守さま　御返事　岩倉
人〻御中　梅園

988

仝上

此よし何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、返〳〵めてかしく、

閏十月十八日之御日付ニて文被下、披露いたしまいらせゟ、まつ〳〵
一位様弥御機嫌よく成らせられゟ御事めてたく思召被成ゟよし、偖は今月七日
一位様より奥かたへ冷氣御尋ましの御事迄（ニて）、御目錄の通參らせられゟ得ハ、數〳〵かたしけなく思召被成ゟよしニて、御禮仰上られゟ文のやう何も御念入まいらせゟ御事と御満そくニ思しめしゟ、めてたくかしく、

享保三年（朱カキ）

松平
薩摩守さま　御返事　岩倉
人〻御中　梅園

989

吉貴公御譜中

同年十一月八日、吉貴率二琉使一著二東都芝邸一、旦九日上使久世大和守重之來二賁櫻田第一勞二吉貴之遠來一矣、同十一日應レ教登レ營、於二黒書院一拜二謁吉宗公一、獻品如二先躅一（御太刀一腰・御馬代白銀五百枚・時服二十領）、此日家臣比志島範房・名越恒渡奉レ拜二謁台顔一、獻品如二恒例一（御太刀一腰・御馬代白銀一枚・時服三領）

990

仝上

正文在文庫

なを〳〵御念いらせられゟ御事、何もよく心得ゟて申せとの御事御座ゟ、めてかしく、

文くたされけ、まつ〳〵寒さ御座けへとも、
公方様（徳川吉宗）
一位様御機嫌よく御座あそハされ、めてたく思しめし被成けよし、然ゝ、御てまへさま昨日ハ参府被成けよしニて、御機嫌御伺御座けて、御ふミのやう披露いたし参らせけへハ、御満足ニ思しめしけ、永〳〵の御道中御ふしの御事に、御障なく昨日御参着の御事めてたく思しめしけ、御参府ニ付きのふも早速使者にて御機嫌御うかかい被成、今度琉球人召列御参着のよし、御用人まて仰上られ、則申あけまいらせけへハ、一入めてたく御満足ニ思しめしけ、めてかしく、

享保三年（朱カキ）

松平　岩倉
薩摩守さま　梅その
人〻御中

ゟ

991

仝上
なを〳〵宜しく申上まいらせけ、めてたくかしく、
御ふミ下されけ、
公方様

一位様ます〳〵御機嫌よく御座被成、御めて度思召けよし、御手前様御事昨日御参府被成けニ付、
上使久世大和守（重之）にて、御懇の上意有かたく覺し召けとの御事ニて、御禮仰上られけ文のやうよろしく申上まいらせけへくけ、めてたくかしく、

ゟ

ときはゐ
みむろ
たかせ
外やま
たさは

松たいら
薩摩守様
人〻御中
御返事

992

仝上
なを〳〵御手前さま弥御無事の御事ニて御さんふのよし、數〳〵目出度思召け、此よし何もよく心得けて申せとの御事に御座け、かしく、
文被下け、まつ〳〵
公方様
一位様御機嫌よく成らせられけ御事、目出度思召被成けよし、昨日御さんふ被成けニ付

上使久世大和守こて御懇の上意かたしけなく思召被成ゟ
よしこて、右之御れい仰上られゟ文のやう被露申まいら
せゟへハ、何も御念入ゟ御事と御満そくこ思しめしゟ、
かしく、

朱カキ
享保三年

松平　　岩倉
さつまの守さま　　梅園
人〻申給へ
御返事

993

吉貴公御譜中
正文在文庫

明十一日五半時登　城参勤之御禮可被申上ゟ、以上、

朱カキ
享保三年十一月十日

水野和泉守(忠之)
戸田山城守(忠眞)
久世大和守(重之)
井上河内守(正岑)

松平薩摩守(島津吉貴)殿

994

仝上

家來二人

御目見被仰付ゟ間、召連可被罷出ゟ、以上、

朱カキ
享保三年十一月十日

995

仝上

御めてたさ、このよしよく申せとの御事こ御さゟ、
かん氣もつよく御さゟ、いよ〳〵かわらせられゟ御
事もおはしましゟハすゟや、きかせられたくおほし
めしゟ、返〳〵かしく、

一位様より申せとの御事に御さゟ、まつ〳〵
公方様
一位様御機けんよくならせられゟ、御手まへ様御道中御
つゝかなく御着被成めてたく思しめしゟ、きのふハ御參
府之御禮も被仰上、萬〻年もとめてたくおほしめしゟ、
此御目錄之通めてたさまてに
一位様よりまいらせられゟ、まことに幾久しくと、めて
かしく、

朱カキ
享保三年

まつ平　　いわ倉
さつまの守様　　梅その
人〻御中

996

仝上

なを〳〵御しゆひもよく御禮濟せられゝ御事、めてたさよく御心得申せとてゝ、かしく、

文くたされゝ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられ、御めてたく思しめし被成ゝよし、

公方様御機嫌よく、今日御てまへさまにも參勤の御禮御しゆひよく仰上られ、　上意も御座ゝて有かたく思しめし被成ゝよし、御念いらせられゝ御ふミのやうひろういたしまいらせゝへハ、御滿足ニ思しめしゝ、めてかしく、

享保三年（朱カキ）　　b

松平　御返事
薩摩守さま　　岩倉
人〻御中　　梅その

997

何もよろしく御さた申上られゝ、なを〳〵めてたくかしく、

御ふミ下されゝ、まつ〳〵

公方様

一位様御機嫌よく御座被成ゝ御事、御めて度覺しめし被成ゝ由、扨は今日御手まへさま御事、御參勤の御禮御首ひよく仰上られゝ所に、御懇の　上意も御座ゝて數〻難有覺しめしゝ由、御ふミのやう、めてたくかしく、

b

松平　　常盤井
さつまの守様　　ミむろ
人〻御中御返事　　たかせ
　　とやま
　　た澤

998

仝御諧中

同年十一月十一日　上使横田備中守重松來ニ芝邸一、伸ニ台命一賜ニ稟米二千俵一、是依レ率ニ琉使於東都一也（橘是正德四年兩琉使到東都、時賜稟米三千俵、今般琉使一員也、是以被減乎、蓋見レ用ニ天和之例格一乎、難考正、）

正文在文庫

999

米　　貳千俵

1000

仝御諧中

正文在文庫

數〻御滿そくニ思しめしゝ、此よし何もよく心得

ゟて申せとの御事に御座ゟ、返〳〵かしく、
文被下ゟ、まつ〳〵
公方様御機嫌よく成らせられゟ、
一位様御機嫌よくならせられゟ御事、めてたく思召被成ゟよし、扨は此節りうきう人御召つれ被成ゟニ付、昨日上使よこ田備中守をもて御米二千俵御拜領被成、かたしけなく思召被成ゟよしニて、右之御禮仰上られゟ文のやう披露申まいらせゟ得ハ、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

ゟ

1001

松平　岩倉
さつまの守さま　梅園
人〻御中御返事

仝上
なを〳〵宜しく申上ゟへくゟ、めてたくかしく、
御文下されゟ、
公方様
一位様ます〳〵御機嫌よく御座被成ゟ、偖ハ此節琉球人召連られゟニ付、上使横田備中守にて昨日御米二千俵御拜領被成、忝思召ゟとの御事にて、御表かたよりも御禮被仰上られゟ(ママ)へ共、なを又御ふミの様よろしく申上まいらせゟへくゟ、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

ゟ

常盤井
みむろ
たか瀬
外やま
たさは

松平
薩摩守様
御返事人〻御中

1002

仝上
よろしく申せとの御事ニ御座ゟ、返〳〵かしく、
御國元よりひといは御ふミ被下、則ひろういたしまいらせゟ、まつ〳〵
一位様御機けんよくならせられ、めて度おほしめし被成ゟよし、さてハ九月廿七日おくさまへ御もくろくのとをりまいらせられゟへハ、御手まへ様かたしけなくおほしめし被成ゟよしにて、御禮被仰上御念入らせられゟ御事ニ御満そくニ思しめしゟ、めてかしく、

朱カキ
享保三年

ゟ

まつ平　いわ倉
さつまの守様　梅その
人〻御中御返事

1003

継豊公御譜中

嚮ゝ是

吉宗公嗣ゝ位、從二先規一吉貴述職之日、率二琉使一當ゝ來下于東都上蒙二台命一、是故今茲享保三年戊戌九月十一日發二薩城一、爲二述職一朝二東都一、時率二中山王尚慶(敬)慶賀正使越來王子一、同年十一月八日著二東都芝邸一、同月十一日吉貴登ゝ營、於二黒書院一拜二謁吉宗公一、家臣二人亦奉ゝ拜二謁台顔一、獻品如二恒例一、同月十三日受二執政之奉書一、吉貴・繼豊著二直垂一、先二琉使一而登ゝ營、越來王子亦從而登ゝ營、吉貴・繼豊拜二謁吉宗公一、時蒙二尊言一退席矣、同月十五日吉貴・繼豊應二執政之奉書一、著二直垂一、攜二琉使越來及樂童子數輩一、登ゝ營、吉宗公出二御大廣間一、樂童子奏二音樂一備二台覽一、事畢而戸田山城守忠眞徵二越來一、賜二歸國之告一、仍吉貴・繼豊憑二忠眞一、奉ゝ申二謝之一而退去、

1004

吉貴公御譜中

同年十一月十三日應二執政之奉書一、吉貴・繼豊著二直垂一、先二琉使一而登ゝ營、越來王子亦登ゝ營、比志島範房・名越恒渡、用人谷山純房、近習役宮之原重行、留守居森川理右衛門武宣供二奉于吉貴一矣、吉貴拜二謁吉宗公一、松平對馬守昭周(近祐)奏ゝ之、此時執政戸田山城守忠眞挨二拶之一、乃勞下率二琉使一來上、蒙二懇篤之尊言一、續而繼豊拜二謁台顔一、蒙二尊言一退席、終而越來捧二呈中山王(尚敬)之獻物多品一、勤二使職一奉ゝ禮二拜台顔一、時公向二吉貴一降二尊言一、越來亦自獻二數品一矣、家老北郷久嘉獻二進御太刀一腰・御馬代白銀一枚・時服三領一、奉ゝ拜二謁台顔一久嘉者監、琉使故也、

○同月十五日吉貴・繼豊應二執政之奉書一、著二直垂一、攜二琉使越來及樂童子數輩一登ゝ營、於二大廣間一樂童子奏二音樂一備二台覽一、事畢而戸田忠眞在二御前一、徴二越來一賜二歸國之告一、且到二中山王及越來副使・從者・樂童子一而各賜二數品一有ゝ差、仍吉貴・繼豊憑二忠眞一奉ゝ謝ゝ之退去此度琉使雖ゝ見ゝ用二天和二年之例格一、大抵同二宝永七年、正徳四年之先蹤一、雖ゝ然吉貴無二官位昇進一、琉使登ゝ營二也、然不ゝ賜二禮応一、奏ゝ楽之日琉使以下賜二茶飲一、蓋因二天和之例一歟、、

1005

全御譜中
正文在文庫
猶以同氏大隅守(島津継豊)同道可有之ゟ、且又直垂着用尤ゟ、
以上、
明十三日四時中山王使者召連可有登
城ゟ、以上、
享保三年十一月十二日　水野和泉守(忠之)
戸田山城守(忠眞)
久世大和守(重之)
井上河内守(正岑)
松平薩摩守殿(島津吉貴)

1006

全上
猶以同氏大隅守同道可有之ゟ、尤直垂可爲着用ゟ、
以上、
明十五日琉球人音樂被　仰付之、且又御暇可被下ゟ條、
四時召連可有登
城ゟ、以上、
享保三年(朱カキ)十一月十四日　水野和泉守
戸田山城守
久世大和守
井上河内守
松平薩摩守殿

1007

全上
右之御れい仰上られゟ文のやう披露いたしまいらせゟ得ハ、數〳〵御滿そくニ思しめしゟ、何も〳〵御念入まいらせられゟ御事ニ思召ゟ、此由何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、なをめてかしく、
文被下ゟ、まつ〳〵
公方樣御機嫌よく成らせられゟ御目出たさ、
一位樣弥御機嫌よくならせられゟまゝ、目出度思召被成られゟ、扨はきのふ琉球中山王使者御つれ登
城被成ゟ處ニ、　御目見へ仰付られゟ、御手前さまニも
御懇の御事共、御同氏大隅守殿ニも　上意を御蒙り、其うへ御家來迄
御目見へ仰付られゟ御事、冥加至極有かたくゟ仕合ニ思し召被成ゟよし、めてかしく、
享保三年(朱カキ)　岩倉

1008

まつ平
薩摩守さま　御返事
人〻御中　　梅園

仝上

なを〳〵何もよろしく御沙汰申へくゝ、めてたくかしく、

御文下されゝ、

公方様

一位様ます〳〵御機嫌よく御座被成、御めて度思召ゝよし、偖ハ琉球中山王使者召つれられゝ、御登城被成ゝ處ニ　御目見へ仰付られ、御手前さまへも御懇の御事とも、さて又御同氏大隅守殿ニも　上意御座ゝよし、其上御家來へも

御目見へ仰付られ、かす〳〵有かたくおほし召ゝとの御事ニて、御文のおもむきよろしく申上まいらせられゝ、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

ときわゐ
みむろ
たかせ
外やま
たさは

1009

松平
薩摩守様
御返事

仝上

なを〳〵萬事御しゆひよく難有思しめしゝ段、御尤にそんしまいらせゝ、めてたくかしく、

文下されゝ、

公方様益御機嫌よくならせられ、めて度思しめしゝよし、扨は今日琉球人召連御登　城被成ゝ處、音樂御機嫌よく上覽被遊、首尾能御暇被下、中山王又ハ使者其外之者共へ拜領物仰付られ、冥加の至りに思召ゝよし、御手前さま同氏大隅守殿へ御懇之御事共、かた〳〵難有思召ゝよし、御禮おほせ上られ、文のやうよろしく申上まいらせゝ、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

松平
薩摩守様
人〻御中　御返事

ときハゐ
ミむろ
たか瀬
外　山
た　澤

1010

全上

よろしき様に心得ゟて、申せとの御事ニ御座ゟ、返〳〵かしく、

御ふミ被下、則ひろういたしまいらせゟ、まつ〳〵一位様御機けんよくならせられ、御めて度思しめし被成ゟよし、さてハ昨日琉球人めしつれられ御登　城被成、をんかく上覽ニ入られ首尾よく御いとまこて、中山王并使者そのほかへもはいれうもの御座ゟて、有かたく思しめし被成ゟよし、御手まへ様大すみの守様ニもなにかと御懇の御事ともこて、かたしけなく思しめし被成ゟとの御事こて、一位様へ御禮被仰上、御念入まいらせられゟ御事ニ思召ゟ、かしく、

享保三年（朱カキ）

いわ倉

梅その

まつ平

さつまの守様

御返事　人〻御中

1011

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見ゟ、

公方様御代替爲御祝儀、越來王子被差上、江府首尾能相勤一段ゟ、且又太刀・馬代并別錄之通贈給之、欣然之至ゟ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）十二月朔日　中將吉貴御判

謹上　中山王

1012

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

芳札令披見ゟ、

公方様御代替之爲御祝儀、越來王子被差上ゟ付ゐ、太刀・馬代并別錄之通贈給之、入念ゟ段欣然之至ゟ、恐惶不宣、

享保三年（朱カキ）十二月朔日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1013

正文在文庫

御狀令披見ゟ、其元無別條貴殿弥御無吴珎重存ゟ、我等歸國之爲祝儀使被差越、殊目錄之通被相饋之忙然之至ゟ、恐〻謹言、

朱カキ享保三年十二月六日　　薩摩守吉貴御判

松平大隅守殿　回章

1014

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵此よし何もよく心得ゟて申せとの御事に御さゟ、かしく、

一位様より申せとの御事に御座ゟ、まつ〳〵寒中ことのほかひえまいらせゟ得共、

一位様弥御機嫌よく成らせられゟまゝ、めてたく思しめし被成られゟ、御手前さま寒中なから弥御替りなくゟ哉、

數〳〵きかせられたく思召ゟ、偖は此御目録のとをり文こて御尋ましの御事迄こつかハされゟ御事に御座ゟ、めてかしく、

朱カキ享保三年

まつ平

さつまの守さま　人〻御中

岩倉

梅園

1015

仝上

此よし何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、なをめてかしく、

文被下披露いたしまいらせゟ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられゟ御事、御めてたく思召被成ゟよし、偖は此度りう球中山王より御もらひ被成ゟよしこて、御もくろくのとをり

一位様へ御あけ被成、則披露いたしまいらせゟへハ、數〳〵御満そくこ思しめしゟ、めてかしく、

朱カキ享保三年

松平

さつまの守様　人〻御中　御返事

岩倉

梅園

1016

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝櫻嶋蜜柑二箱・炙鰌一箱被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

朱カキ享保三年十二月七日　　正岑判

1017

吉貴公御普中
正文在文庫

〆 右口裏 松平薩摩守殿　　井上河内守 正岑

めてたく御満そくにをほしめし、よろしく申せとの
御事ニ御さゞ、返〳〵めてかしく、
御ふミ被下、則ひろういたしまいらせゞ、まつ〳〵
一位様御機けんよくならせられ、めてたくおほしめし被
成ゞよし、さてハ御國のさくら嶋ミつかん并あふりあゆ
御もくろくのとをり御あけ被成、御満そくにおほしめし、
よろしく心得申せとの御事ニ御座ゞ、こん日御おもてへ
も御あけ被成ゞよしニて、
この御所様へ御あけ被成、誠萬〳〵年もと、かしく、

朱カキ 享保三年

まつ平
さつまの守様 御返事　　いわ倉
人〻御中　　梅その

1018

全上

返〳〵御手まへ様いよ〳〵かはりもおハしましゞハ
すゞよしきかせられ、[本マヽ]ほ思しめし進ゞ、御き
けん御うかゝひにとて御國の物御あけ被成、御まん
そくニ思しめしゞ、かしく、
御ふミ下されひろういたしゞ、まつ〳〵
公方様
一位様御機けんよくならせられ、御めて度おほしめし被
成ゞよし、さては御國のさくら嶋みつかん、御目錄のと
をり御あけ被成、御満足ニおほしめし、いく久しく萬〻
年も御國もとの物御あけ被成ゞ様と、めてたさよろしく
申せとの御事ニ御さゞ、めてかしく、

朱カキ 享保三年

まつ平
さつまの守様 御返事　　いわ倉
人〻御中　　梅園

1019

全上

なを〳〵何もよく申せとの御事御さゞ、かしく、
文くたされゞ、ことの外ひえ〳〵しく御座ゞへ共、まつ
〳〵
一位様御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめしなさ

れゝよし、御同姓大隅守殿へ御たつねましあそハしゝ御事まてこ、御目錄の通參らせられゝへハ、かたしけなく思しめし被成ゝよし、御禮と御座ゝて文のやう披露いたしまいらせゝへハ、御滿足こ思しめしゝ、かしく、

朱カキ
享保三年

松平　　御返事　　岩倉
さつま守さま　　梅その
人々御中

ゟ

1020

まことに萬〳〵年もと、めてたさよろしく申せとの御事御座ゝ、返〳〵かしく、

御ふミ被下、則ひろういたしまいらせゝ、まつ〳〵一位様御機けんよくならせられ、めてたくおほしめし被成ゝよし、さてハ今日

公方様より根岸又八郎(政勝)上使にて、おくさまへ御歳暮の御しうき、御もくろくのとをり御いたゝき被成、御手まへ様有かたく思しめし被成ゝよしこて、御禮被仰上御念入らせられゝ御事、御滿そくにおほしめしゝ、めてかしく、

朱カキ
享保三年

ゟ

いわくら

1021

仝上

返〳〵幾久しく相替す御拜領被成ゝやうにといわゐ入まいらせゝ、めてたくかしく、

文下されゝ、ことの外寒しまいらせゝへとも、

公方様御機嫌よくならせられ、御めてたく思しめしゝよし、さては

公方様より歳暮の御祝儀、奥方さまへ　上使根岸又八郎こて御目錄のとをり遣されゝ得ゟ、難有思しめしゝ由、御禮仰上られ文のやう、よろしく申あけゝへくゝ、めてたくかしく、

朱カキ
享保三年

松平　　御返事　　人々御中
薩摩守さま

ゟ

ときハゐ
みむろ
たかせ
外山
田澤

1022

吉貴公御譜中

寫正文在家老座

今度琉球之使者歸國ニ付、松平薩摩守家來召連、從大坂薩摩國迄渡海之事ニ付間、自然海上ニ而風波荒ケ敷、浦〻より船を出し挽入ケ様可致ケ、其外急用之儀有之節者、於其浦〻無滯様可致沙汰ケ、右之通船中ニ為別紙遣ケ、此觸狀浦次順〻遣、至薩摩國松平薩摩守家來ニ可相渡者也、

享保三戌

十二月

松平孫太夫印（大坂御船手）（勘敷）

鈴木飛驛守印（大坂町奉行）（利雄）

北條安房守印（大坂町奉行）（氏英）

從大坂薩摩國迄

御料・私領浦〻

庄屋

年寄

（朱）「右之通御觸狀壹通文箱ニ入、琉人より先達而浦次被相廻、浦〻庄屋受負書一卷相付、先達而鹿児嶋江相達ケ、右御觸狀文箱銘書寫」

1023

（朱）「仝上

寫正文在家老座」

今度琉球之使者歸國ニ付、松平薩摩守家來召連、從大坂薩摩國迄渡海之事ニ付間、自然海上ニ而風波荒ケ敷、浦〻ゟ船を出し挽入ケ様可致ケ、其外急用之儀有之節者、於其浦〻無滯様可致沙汰ケ、右之通浦次ニ為觸狀遣ケ也、

享保三戌

十二月

松平孫太夫印

鈴木飛驛守印

北條安房守印

（朱）「右御觸狀文箱銘書寫」

從大坂薩摩國迄

御料・私領浦〻

庄屋

年寄

從大坂薩摩國迄

浦觸狀

從大坂薩摩國迄

御料・私領浦〻

庄屋

年寄

御料・私領浦々

庄屋
年寄

(朱)「右御觸状拾通銘々文箱ニ入付、先規之通大坂御留守居より前以申受置、琉球人乗船之節御用人方江受取、それ〳〵之船江相渡ル、尤浦次ニ被相觸ル上なから、自然相滞儀も可有之哉と用心として申受事ル、右拾通之文箱御國着以後、最前相達ル御觸状も同前返上致ル樣と、大坂御留守居江差越ル、右御触状十通共同案之故、一通之分寫置者也」

1024

継豊公御譜中
正文在文庫

芳翰令披見ル、今度水戸中將(宗堯)官位昇進被　仰出ル付ゐ、入御念ル段欣然之至存ル、恐々謹言、

享保三年十二月十六日(朱カキ)　紀伊中納言　宗直判

松平大隅守殿　御返報

1025

吉貴公御譜中
正文在本地院

知行目録

高貳拾五石

郡山之内

名寄帳別冊有

右ハ薩州郡山(日置郡)厚地村花尾權現ハ、御高祖忠久公御志願ニゐ被崇置、三拾六坊御建立被成、御尊敬之靈地ニゐ候處、三拾六坊共漸々致頽轉候付、綱貴公御在世、右廢寺之内差立候寺號五箇寺御再興可被成旨被　仰出置、從吉貴公先年御造營、寺領貳拾石被附置之處、此節増高、都合右之通被寄附之訖、全可有所務候、仍如件、

享保三年戊十二月廿五日

種　彈正　久基判
嶋　將監　久當判
嶋　木工　久武判

本地院

1026

全上
正文在普賢院

知行目録

高貳拾五石

郡山之内
名寄帳別冊有

右者薩州郡山厚地村花尾權現者、
御高祖忠久公御志願ニ而被崇置、三拾六坊御建被成、御尊敬之靈地ニ而ハ處、三拾六坊共漸〻致頽轉ハ付、
綱貴公御在世、右廢寺之内差立ハ寺號五箇寺、御再興可被成旨被仰出置、從
吉貴公先年御造營、寺領貳拾石被附置之處、此節增高五石、都合右之通被寄附之訖、全可有所務ハ、仍如件、

享保三年戌十二月廿五日　　種　彈正　久基判
嶋　將監　久當判
嶋　木工　久武判

普賢院

1027

全上

正文在曼荼羅寺

知行目錄

高貳拾五石

薩州吉田之内

郡山之内
名寄帳別冊有

右者薩州郡山厚地村花尾權現者、
御高祖忠久公御志願ニ而被崇置、三拾六坊御建立被成、御尊敬之靈地ニ而ハ處、三拾六坊共漸〻致頽轉候付、
綱貴公御在世右廢寺之内差立候寺號五箇寺、御再興可被成旨被　仰出置、從
吉貴公先年御造營、寺領貳拾石被附置之處、此節增高五石、都合右之通被寄附之訖、全可有所務候、仍如件、

享保三年戌十二月廿五日　　種　彈正　久基判
嶋　將監　久當判
嶋　木工　久武判

曼荼羅寺

1028

全御諚中

吉貴參府、述職之禮畢而、同年十二月二十七日、奉レ獻二
龍蹄二匹於
大樹吉宗公一、是以レ從二先躅一也、

1029

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖五重到來歡覺ハ、委曲戸田山城守(忠眞)可述ハ也、

享保(朱カキ)三年十二月廿七　◯(印文「吉宗」)

薩摩

中將殿

1030

在包紙

薩摩

中將殿

吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保四年正月十一日　吉貴御判

1031

繼豐公御譜中

正文在文庫

如芳翰新春之嘉儀不可有盡期ハ、其許御無爲超歳之由珎重ハ、我等堅固令越年ハ、依之入御念ハ段欣然之至存ハ、恐ゝ謹言、

享保(朱カキ)四年正月十六日　紀伊中納言宗直判

松平大隅守(島津繼豐)殿　御返報

1032

仝上

新陽之賀章且如目錄送給懇切之至令悅納ハ、愈無恙越年之由珎重ハ、此地同前ハ、尚期永日ハ也、

享保(朱カキ)四年上春十八　(花押　No.4)

松平大隅守殿

1033

仝上

爲年始之賀儀、芳牒且目錄之通賜之目出令祝納ハ、滋無吳事超歳之由珎重思給ハ、此表同風ハ、尚期永日ハ也、

孟春十八　(花押　No.3)

松平大隅守殿

1034

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲新年之賀義、芳書殊目錄之通被贈之至祝〻〻、弥萬福不堪明愉、老拙無事、猶期永日之時ゟ也、

享保四年（朱カキ）孟春十八日　基熙

薩摩中將殿

1035

吉貴公御譜中

正文在文庫

申せとの事に御座ゟ、御手前さま御不仕合のよし聞かせられゟ、扨〳〵御きのとく御うとましく思しめし、御手前さま御替りなくゟ哉、御くやミのため申せとの御事に御座ゟ、かしく、

享保四年正月二十九日（朱カキ）　岩倉

松平　薩摩守さま　梅園

1036

吉貴公御譜中

去歳十二月二日琉使越來王子其外從者等發二東都一、歷二涉東海路西海一、今年二月六日到二著于薩府一、家老島津内記久貫、用人鎌田六郎太夫政直・谷山角太夫純房、近習平田孫太郎位充、使番税所彌五太夫篤正等護二送之一、久貫總監、同年三月三日越來及從者等開二帆于魔府之海濱一、同十九日還二琉球國一、

1037　(の1)

吉貴公御譜中

正文在家老座

一公方吉宗公就　御代替、享保三戊年琉球中山王尚敬より御祝儀之使者越來王子、同年九月十一日　吉貴樣被召列鹿兒嶋　御發駕、閏十月十日大坂ゟ　御着岸、中三日大坂御滯在、如先例海路筋御浦〻被仰渡ゟ、

一琉球使大坂川口より伏見迄乘船之川御座三艘、龜井隱岐守（茲親）樣・松平周防守（康豐）樣・松浦肥前守（鎮信）樣ゟ一艘宛被仰渡、橋船等數艘其外上荷船三拾五艘被仰付ゟ、右船〻前以大坂御船手ゟ御請取、與力被差添川口ゟ被出置ゟ、同十日右船〻ゟ正使、副使附〻以下至迄乘移、　太守樣御乘船之御跡ゟ相續ゟ致路樂大坂ゟ着、御船手與力小船〻乘、琉球使行列之前後を被致警固ゟ、川筋船行列別紙書付有之ゟ、

但十日之儀ゟ御精進日〻ゟ得共、道樂ハ不苦ゟ、

船哥之儀ハ、御召川御座船、且又御馳走ニ被出ル船々も、此御方ニ御渡爲被成事ル得ハ、無用ニ被仰付ル、

一川口より此御方御藏屋敷迄之間、先例之通川内之船共前以あらけ被置、御船手與力小船乘、先達テ往還之船不入交樣下知有之ル、

一着船之場所ニ見物人不立交ため、丁門を鎖、やらひを結、町御奉行・與力・同心被出置ル、

一閏十月十四日　太守樣琉球使被召列、如伏見御上被成ル、枚方ニ御一宿、翌十五日伏見ニ御着、大坂出船川筋之船あらけ、川岸之下知先日同前、伏見ニハ中兩日御滯在、

但十四日之儀ハ道樂・船哥共ニ先例之通可仕旨被仰付ル、

一琉球使乘船先日之通、其外之次第先日同前、川内船行列別紙有之ル、

一過書船貳拾五艘、川船綱引之人足貳百五拾人、川へり之在々ニハ被仰付ル、

一伏見船着之場所ニハ新敷波戸場を被構、越來旅宿迄之間、道筋ニハ伏見御奉行より與力・同心被出警固有之ル、

一閏十月十八日　太守樣越來被召列伏見御發駕、道筋之警固先日同斷、

一道中御傳馬百疋・同人足四百五拾人・此御方御家來傭人足八十人・駄賃傳馬八十疋被仰付ル、依御願美濃路東海道被差通ル、

一道中船越・川越之場所ハ、渡船并越人足被出之、御料ハ御代官手傳以下、給領ハ給人并足輕等被出、無滯下知有之ル、

一道中之宿々、御料ハ御代官手傳、給領ハ給人并足輕被出警固有之ル、

一道中琉人泊休之驛、宿致不足ル所ハ、太守樣ハ其前後之宿ニ御止宿被遊ル、

一十一月八日　太守樣琉球使越來被召列　御參府被成ル、尤今日　御參府被成ル段、御用番戸田山城守(忠眞)樣ニ御留守居を以御案内被　仰出ル、其時正使・副使・中官・樂童子迄之名書假名付ニテ被書出ル、

御參府當日　太守樣爲御名代　隅州(繼豐)樣御出座被遊、

越來其外琉球人ニ御目見被仰付ル次第左ニ記、

一越來王子表御書院二之間之上御庭之方御障子ニ相附着

座仕ル、

但 正使事、二之間之上ニ着座と相見得ル付、此節之儀始終共ニ二之間ニ而御禮相濟ル、然處古繪圖を見合ル得ハ、上之間御敷居之内ニ着座と有之ル、後年ハ繪圖之通可有之事ル、

一副使二之間下御庭之方御障子ニ相付着座、

一通詞、御勝手之方御家老相詰ル下御襖之方ニ罷居ル、

一御出座不被遊内、御菓子・御茶、王子・副使ニ被下ル、

但 先年茂御挨拶坊守被差出、御出座無之内致挨拶ル へとも、此節ハ夫ニ不及ル、

一作左衛門（北郷久嘉）・隼人（比志嶋竜房）御勝手御襖之方、王子と副使着座之中程ニ相詰ル、

一御出座被遊ル節、何れ茂手を突罷居ル、其時作左衛門差寄、三拜可仕旨申通、越來御座中ニ罷出三拜、其内ニ通詞差寄罷有、三拜相濟ル而、越來通詞ニ向、御機嫌能御着被遊、恐悦奉存ル、私共儀以御威光御取持ニ而首尾好着仕、難有次第奉存ル趣、琉球言葉ニ而申達、其旨を通詞より日本言葉ニ而作左衛門ニ申聞、則作左衛門より右之旨披露、其時越來御禮仕ル、

一右披露相濟ル節、首尾好着ル而と 御意有之、通詞ニ作左衛門より申聞、琉球言葉ニ而難有 御意之由通詞ニ申達、其旨通詞ゟ作左衛門ニ日本言葉ニ而申ル時右之御禮申上、其時越來御禮仕ル、

一右相濟越來最前之通御障子之方ニ片付着座仕ル、

一御出座被遊ル節、副使茂越來同前ニ手を突罷有、越來御座中ニ進三拜仕ル節、同前副使茂御座中ニ罷出三拜仕ル、

一通詞・副使脇ニ下りル時、副使より茂御參府之御祝儀、此程之御禮申上ル通、琉球言葉ニ而通詞ニ申達、其旨作左衛門ニ通詞より承、披露仕ル、其節副使御禮仕ル、

一右相濟、最前之通御障子之方ニ片付、副使着座、通詞茂御勝手之方御襖ニ相付罷居ル、

一三之間ニ中官・樂童子共伺公仕罷居、御襖を明ル節、御參府之御祝儀申上ル通作左衛門披露仕ル、其節何れ茂一同ニ平伏仕ル、

一右終而 御入被遊ル、琉球人皆〻退出、

一十一月九日 上使久世大和守（重之）様櫻田御屋鋪ニ御出、此節參府太儀思召ル、近日參府之御禮可被 仰付との、被蒙 上意候、

但去ル午年ハ琉球人召連參府太儀と有之ハ得共、此度ハ其　上意ハ無之、常式　御參府一通り之筋ニハ、

一同十日御老中御連名之以御奉書、明十一日五半時御登城、御參府之御禮可被仰上ハ、家來兩人　御目見可被仰付ハ間、可被召連旨被仰渡ハ、

一十一月十一日　大守様御登　城、於黒御書院早晩之通御目見、御老中様御取成有之ハ時、參府太儀と被蒙上意ハ、又御老中様御取合有之ハ時、節〻使者をと重ね　上意有之、　御退座、

但去ル午年ハ琉人召連遠路太儀と　上意有之ハ得共、此節ハ常式　御參府之節通ハ、比志嶋隼人(範房)・名越右膳(直度)　御目見被仰付ハ、

一今日戸田山城守様より、來ル十三日琉球中山王使者召列可有登　城旨、御書付於　御城　太守様ニ御直ニ御渡被成ハ、

一今日八時過、大御目付横田備中守(由松)様爲　上使芝御屋鋪ニ御出、今度琉球使被召連　御參府付、御米貳千俵拜領被仰付之旨、被蒙　上意、御目錄を以御拜領ハ、表御書院上之間ニ而　御頂戴相濟、御目錄ハ作左衞門御勝手ニ持下ハ、　上使御取持之次第、常式　上使御給之節之通ハ、

但去ル午年使者ハ兩王子被召連、御米三千俵御拜領ハ、此節ハ琉球使一頭ニ而、其上人數ハ減少ハ付、先年ハ千俵被減ハ哉、

一十一月十三日使者越來登　城之道筋、芝御屋敷より増上寺表門通、夫より通町ニ出、芝口御門前御堀端より幸橋此御方御屋敷ニ罷越居ハ而、仰渡之御刻限、櫻田御屋鋪より松平丹後守(重榮)様御屋敷前通、日比谷御門入、やよふす小笠原右近將監(忠惟)様・堀田伊豆守(正虎)様御屋敷前通、大手御門より登　城、退出之節ハ道筋右同斷、

一芝御屋鋪より大手先迄之間、中途所〻ニ御徒目附并御徒之衆、町中ニハ町與力・同心いつれハ慰斗目・麻上下着ニ而警固有之、御門〻ニハ張御番被仰付ハ、御徒衆ハ尤道筋被爲見廻ハ、且又御大名様方御屋鋪前ハ、士并足輕段〻被差出、麻上下着ニ而相勤居ハ、櫻田御屋敷ニ差越ハ節ハ未夜中故、小路之左右惣様掛挑灯出ハ、

一中山王并使者獻上物、登　城前日御家來被相添、　御城ニ被差出置ハ、

一太守様　隅州様御直垂御着用、十三日御差圖之御刻限、越來方先達ゐ御登　城、殿上之間下段越來方席上ニ御着座、

一越來王子御玄關階之上ニ到時、大御目附横田備中守様・松平石見守(乗邦)様御出迎御案内、殿上之間下段着座、副使ハ同所次之間座上大廣間之方ニ向着座、從者ハ同所下段之方ニ向順〻三行列居、下官之族ハ御玄關前庭上群居、

但越來ハ屋轎ニ乘、副使ハ乘物、從者ハ騎馬、大手橋之先ニゐ下馬越來ニ隨ふ、越來ハ下乘橋詰ニゐ屋轎方下乘、副使ハ下乘之橋少手前ニゐ致下乘、越來ニ相續ゐ罷昇ル、大手腰懸ニハ薄縁を被敷、此御方御家來同前ニ被差置ル、

一越來御玄關迄涼傘を指せ牌を持せ、跟伴等不殘御玄關前ニ罷通ル、腰掛ニ薄縁を敷被差置ル、越來衣類ハ前〻之通御玄關前迄持せル、

一轎ハ張御番所と橋との間ニ差置ル、副使乘物ハ張御番所東之脇ニ差置ル、

一作左衛門布衣着用先達ゐ　御城ニ罷昇、御奏者番衆・大御目付衆ニ諸事得御差圖置、琉球使者參懸ル節、御玄關ニ出迎使者致差引ル、御用人谷山角太夫(純房)・宮之原甚太夫(重行)、御留守居森川理右衛門(武宮)布衣着ニゐ被遣ル、

一中山王書翰ハ横田備中守様・松平石見守様殿上之間次之間ニ御出會、則掌翰史より備中守様御請取ル時、越來立ゐ揖ル、

一比志嶋隼人(範房)、若御年寄名越右膳(信度)、御用人、御近習役、御留守居ハ布衣着用、敷居涯御板縁ニ致圍居ル、

一太守様　隅州様、御太刀・御刀持布衣着用ニゐ、殿上之間御板縁ニ罷在ル、

一出御前備中守様・石見守様越來を御案内、御禮席御見せ被成御差圖ル、其時通詞貳人作左衛門相附罷出ル、左ルゐ松之間御板縁ニ越來并通詞貳人、作左衛門被差置ル、

一大御廣間ニ　出御、御上段ニ　御着座、

一太守様　隅州様御次御襖之外際、南之方ニ　御向　御着座、

一越來ハ殿上之間より大御廣間ニ備中守様・石見守様御案内、二之間諸太夫之御譜代御大名様御列座前、西之方ニ向着座、

一太守様御出席、御下段御敷居之内ニゐ　御目見、御奏

者番松平對馬守(近禎)様御披露、其時戸田山城守(忠寛)様より　御前近可被進旨御差圖有之、御中段迄御進ゟ時、琉球人召連太儀被　思召之旨、　御懇之　上意有之候時、山城守様御取成言上有之、最前之席ゟ御退去、

一右引次ニ　隅州様右同前之次第ニゟ　御目見、是ゟと上意有之、二尺計も御進ゟ時、山城守様ゟ難有と御取合有之、最前之席ゟ御退去、

一右終ゟ、越來王子　御前ゟ可差出旨、於御次　太守様ゟ山城守様より被仰達ゟ付、　御目見被仰付ゟ間、可罷出旨　太守様ゟ越來ゟ御直ニ被仰聞、罷出ゟ、

一越來御禮申上ゟ内、　太守様　隅州様御襖之外ゟ御扣被成御座ゟ、

一中山王より獻上物并越來より自分獻上物、　出御以前より南板縁ニ被並置ゟ、獻上之御馬ゟ御厩方諏方部文右衛門(定軌)様被請取之、越來御禮之時　御目通被率出ゟ、御支度素袍、御馬方口附ゟ白張着之、

但獻上之御馬ハ、國師と申馬役之者相附、琉球人ゟ率せ、此御方別當并御家來相添、越來ゟ少ゝ先達ゟ參、中腰懸前ニ御厩方之衆被出合被請取之ゟ、

一御代替御祝儀、中山王獻上之御太刀目錄箱ニ入、臺ニ載、御奏者番高木主水正(正陳)様御持出、御中段下二疊目ニ被置ゟ、中山王と御披露、越來出席御下段下より四疊目ニゟ奉九拜退去、御太刀目錄御奏者番被引之ゟ、

一戸田山城守様御次ゟ御越、遠路太儀ゟと越來ゟ　上意之旨、　太守様ゟ被仰達ゟ時、　太守様ゟ右之段　御直越來ゟ被仰聞ゟ、

一右過ゟ、使者越來自分之獻上物目錄箱ニ入、臺ニ載之、御進物番衆御持出御板縁ニ被置ゟ、御板縁中央ニゟ越來三拜、御奏者番土井伊豫守(利意)様御披露退座、大御目附備中守様・石見守様御差圖ニゟ、殿上之間下段ゟ同列ニ着座、　太守様ゟ殿上之間最前之席ゟ御退座、

一其後作左衛門御太刀・銀馬代・御時服三獻上、布衣着用於御板縁　御目見被仰付ゟ、御太刀目錄御奏者番松平伊豆守様御披露、

但時服ゟ　御前ゟ不被出ゟ、

一右過ゟ御老中井上河内守様・久世大和守様・戸田山城守様・水野和泉守様殿上之間ゟ御越、越來ゟ御向御會釋有之則御退座、其後備中守様・石見守様御兩人御出御差圖有之、越來退出、右御兩人様御玄關階之上迄先達ゟ御送、從者順ゝ退出、

一太守様（吉貴）　隅州様（綱豊）ハ越來より跡立ゐ御退出被遊ル、

一明十五日琉球人音樂被仰付之、且又御暇可被下ル條、四時召連可有登　城ル、大隅守同道可有之ル、尤直垂可爲着用ル旨、御老中御連名之御奉書を以、前同十四日被仰渡ル、

一十一月十五日音樂被仰付ル付、越來被召連御登　城道筋、又ハ殿中御座構等之次第、中途警衛、先日同斷、

一琉球人ハ芝御屋鋪、十五日之曉より櫻田御屋敷ニ被遣置、御差圖之御刻限登　城、退出之節ハ道筋同斷、

一太守様　隅州様御直垂御着用ニゐ、先達ゐ御登　城、先日之通殿上之間御下段御座上ニ　御着座、

一作左衛門并御用人・御留守居其外布衣着用、先達ゐ　御城ニ罷昇罷在、越來昇之節御玄關迄出迎、諸事致差引ル、

一其當日越來ニ被相附ル御家老以下布衣着用、先日之所ニ相詰ル、

一太守様御太刀・御刀持布衣着用、先日之通御板縁ニ罷在ル、

一樂器入ル櫃、中之口御玄關より坊主衆持之、柳之間ニ相通ル、

一越來御玄關迄參掛ル時、階之上御板縁ニ備中守様・石見守様御出向御案内、殿上之間下段着座、從者ハ同所次之間列居、下官之族ハ御玄關前庭上ニ群居、

但下乘・下馬先之儀、諸事如御禮日之時被仰付ル、

一柳之間御屏風構ニゐ上之間ニ副使・樂師・樂童子被相通、樂器を調ヘル付、手傳ル、此御方御家來ゑ被相通ル、火鉢又ハ手水之湯被仰付ル、樂器御中門之廊ニ寄置ル節、手傳ル御家來ゑ御廊下ニ罷通ル、

一大御廣間ニ出御、則　太守様　隅州様大御廣間下段上より五疊目東之方　御着座、越來ハ御向之御縁御敷居之際東之方祗候、副使・樂人ハ御板縁ニ列居、

但出御前ニ　御兩殿様御着座之筈ル得共、早ク　出御ル付、右之次第ニル、

一出御前大御目附衆御案内ニゐ、御中門之廊ニ越來并樂人等又ハ御家老・御用人・御近習役・御留守居・御納戸奉行被差置ル、左ルゐ王子・副使・通詞・樂人等大御廣間ニ備中守様・丹波守様御案内、御奏者番御出會、琉球人着座之席御見せ被成ル、　太守様ゑ被成御座、被遊御差圖、作左衛門ゑ相付參ル、

一越來事ハ御板縁東之方ニ着座、副使事ハ西之方王子と

筋向ゟ少下り着座、樂正ハ東之方樂師之脇ニ着座、

但 副使着座之儀ハ　公義御次第書ニ茂不相見得ル

付、前々より茂着座被　仰付ル間、　太守様より

御老中様方ハ其當日被仰達、副使茂右之通着座被

仰付ル、

一樂師樂器を持出御縁ハ双置退去、續ゐ樂童子樂器之前

ニ列居、其後樂師列居、樂正ハ王子之下ニ伺公、

一大御廣間御簾被巻置、越來其外一同ニ平伏、御奏者番

御板縁ニ御詰、樂正ニ被向、樂可初旨御差圖有之ル時、

樂童子樂器之近ニ進出、樂三成奏又曲二ツ奏ル、又樂

二成曲二并琉球曲一奏ル、早ゐ

太守様　隅州様御着座より直ニ御進被成、御禮被仰上

ル節、山城守様ゟ樂　上覽、難有奉存ルと御取合被仰

上ル時、天氣茂能ゐと　上意有之、　御兩殿様殿上之

間ハ御退出被遊ル、越來其外も殿上之間ハ退去ル、

一入御之後、大御廣間二之間ニ御中様(本マヽ)御列座、于時

太守様　隅州様御出席、二之間南之方ハ御着座、左ル

ゐ越來を大御目付備中守様・丹波守様御案内ニゐ、殿

上之間より中之間御敷居際ハ罷出、御老中様ハ對御禮、

何れ茂様より御會釋有之、越來事戸田山城守様御前近

御敷居之内ハ進ル時、越來ハ御暇被下、且又中山王ハ

拜領物之儀、山城守様ゟ被仰渡ル、其時

太守様御差寄被遊ル、右拜領物上之間御下段ニ被並置

ル付、越來乍居右之品を見ル様ニと、前以被仰聞置ル

付、其通仕、畢ゐ備中守様・丹波守様御案内ニゐ、松

之間次之間ハ越來退出、其後又越來ハ拜領物、松之間

三之間ハ被備置、右御兩人様御案内ニゐ、越來事中之

間中央ニ罷出、山城守様より被仰渡退ル時、直ニ右拜

領物之涯ニ差寄致頂戴、又右御兩人様御案内ニゐ、松

之間次之間ハ退座、副使并從者惣中ハ被下物并樂人ハ

御時服被下ル儀、松之間二之間之末ニ被備置、右御兩

人様御案内ニゐ、又越來被召出、山城守様ゟ被仰渡、

越來より御禮申上、早ゐ又右御兩人様御案内ニゐ、越

來ハ直ニ殿上之間ハ退出、　太守様　隅州様今日之御

禮山城守様迄被仰上、殿上之間ハ御退出、下段ニ御着

座、其下ハ王子着座、通詞并掌翰史御上段之方ニ向、

衝立涯ニ伺公、作左衛門・隼人茂通詞之脇ハ罷在ル時、

備中守様・丹波守様御返翰を御持、越來前ニ御越御渡

被成、王子被請取ル時、掌翰史持下ル、引次ニ中山王

ハ拜領之御目錄、右御兩人様より王子ハ御渡、掌翰史

罷出請取之、左りゐ次之間ニゐ不洗ニ包、肩ニ懸り、
一右相濟、越來事備中守様・丹波守様御案内ニゐ退出、
副使・從者退出之次第先日同斷、
一拜領物ハ御玄關迄御徒之衆被持運、此方御家來ニ被相
渡り付、御馬廻新御番・御留守居付御歩行罷出請取、
則是より爲持り長持ニ入付、右面〻宰領ニゐ持歸り、
一太守様　隅州様ゟ、越來退出之跡ゟ御退出、直ニ御老
中様御宅ニ　太守様御見廻被成、御禮被仰上り、
但一先年寅・午兩度之琉球使參府之節ゟ、音樂被聞
召り日御料理被下り得共、此節ゟ御料理ハ不被
下御茶被下り、御給仕越來ニハ御進物番衆、副
使以下ニハ小十人衆御勤り、
一寅・午年ゟ、樂　上覽以後、琉球人御暇可被下
り之間、何日何時　御城ニ着り様召列可有登
城旨、御書付を以被仰渡、三度之及登　城り得
共、此節ゟ樂奏り日御暇被下り故、二度之登
城ニゐ相濟り、
一寅・午年琉球使ゟ御暇被下り以後、上野　御宮
參詣被仰付り得共、此節ハ不被仰付り、使者越
來よりゟ申出趣り得共、上野參詣無之りゐも、
何そ琉球之瑕瑾ニ相成事ニゐ無之旨、　御意之
趣ゟ有之、御願不被成事り、此段委細越來并副
使西平親方・大親米次親雲上ニ申含、琉球ニ具
申越り、
一右之通　御城勤首尾好相濟り付、今日越來　御城退出
之後致支度替、越來并副使・通詞參上、　隅州様御出
座、今日ゟ樂備
上覽、且又首尾好御暇被下、品〻拜領物被仰付難有仕
合奉存之段、越來より通詞ニ申、通詞ゟ作左衛門ニ申
りゐ、其段作左衛門より申上り時、首尾好ゐと　御意
有之、作左衛門ゟ御挨拶申上、いつれゟ退出、
一十一月十八日御老中井上河内守様・久世大和守様・戸
田山城守様・水野和泉守様、若御年寄大久保長門守(教寛)様・
大久保佐渡守(常春)様・石川近江守(忠茂)様御宅ニ越來罷出り、道
筋芝御屋鋪より片門前町、増上寺表門前ゟ通町ニ出、
宇田川橋手前より中川内膳正(久忠)様中御屋敷前、有馬左衛(一準)
門佐様御屋敷前より幸橋御門入、青山備前守様・松平
丹後守(直樂)様御屋敷前ゟ日比谷御門入、八重洲筋小笠原右
近將監様御屋敷後通久世大和守様、夫より酒井修理大(忠音)
夫様御屋敷前通、戸田山城守様、夫より又酒井修理大

夫様御屋敷前通、小笠原右近將監様御屋敷後通、龍之口より和田倉御門入、松平下總守様御屋敷前ゟ水野和泉守様、夫より大久保長門守様・大久保佐渡守様、夫より井上河内守様、夫より外櫻田御門出、石川近江守様、夫より霞ケ關通虎御門出、相良遠江守様御屋敷より天德寺裏門前、西之窪八幡下より土器町新堀端筋芝御屋敷ニ歸、不及路樂、行列別錄ニ有之、

一中山王進覽物、先達而御留守居付御歩行并足輕宰領相附差越ル處、御座上ニ被備置ル、

一作左衛門（北郷久嘉）并御用人谷山角太夫（純房）・宮之原甚太夫（重行）・御留守居森川理右衛門（武宣）長袴着、先達而差越、作左衛門ハ御使者之間邊ニ扣居、御用人・御留守居ハ御玄關ニ扣居ル、

一越來ハ乘物ニ而罷越、御門外石壇ゟ下乘、轎ハ備之内ニ持せル、

一御玄關前薄縁を敷出シ、其薄縁ニ御取次番五・六人ツヽ、被罷出居ル、御玄關板之間より御庭迄案内之人兩人ツヽ、

一越來御玄關ニ參懸ル節、御取次番ニ揖、御書院ニ罷通ル、副使西平親方・通詞及御書院ニ罷通ル、作左衛門及越來ニ相添罷通ル、

一越來ハ御書院上座、副使ハ二之間ニ、通詞ハ其下ニ着座有之ル、

一作左衛門通詞より少前ニ差出、上座ニ向居ル時、御家老衆被出會ル、此時作左衛門差寄、御家老之由通詞ニ申聞、通詞より越來ニ申達ル節揖ル、

一御用人衆中座程ニ被罷出ル時、作左衛門右所ニ出會、中山王口上申達、早而王子之口上申達ル、此時王子揖ル、

一目錄之儀ハ、於別座角太夫・甚太夫ゟ相渡ル、

一火鉢并御茶出、

一何れ及様　御城ニ御詰被成ル間、御歸之節可申上旨、御家老衆ゟ挨拶、御用人衆より右之挨拶有之ル方及ル、其時通詞を以右之趣王子ニ申達、作左衛門より御退出之節宜被仰上旨申達ル時、何れ及揖ル而退出、御家老衆御玄關板之間迄被送出ル、其時いつれ及又揖、又薄縁ニ被罷出ル面々ニハ及揖ル、其跡ニ而御家老衆其外被送出ル面々ニ、作左衛門致式對ル、

(の2)

御老中様ニ中山王口上

就　御代替、琉球中山王より以使者御祝儀申上ル、依

之越來王子を以目錄之通進覽仕ハ、以御序宜樣被仰上可被下ハ、

(の3)

越來王子より口上

此節中山王使者申付差上ハ處、　御目見被　仰付、音樂被遊　上覽、樂師共ハ拜領物被　仰付、首尾好御暇被下、其上使者并從者迄品〻拜領被仰付、段〻難有次第奉存ハ、歸國仕委細中山王ハ可申聞ハ、使者申付差上ハ付ゐ、目錄之通進上仕ハ、此段宜樣御取成可被下ハ、

(の4)

若御年寄樣ハ中山王口上

就　御代替琉球中山王より以使者御祝儀申上ハ、使者越來王子と申者差上ハ由、中山王より申上ハ通申達ハ、

(の5)

越來より口上

此節中山王より爲使者差上ハ處、　御目見被　仰付、音樂被遊　上覽、樂師共ハ拜領物被仰付、首尾好御暇被成下、其上使者并從者迄品〻拜領被仰付、段〻難有次第奉存ハ、歸國仕委細中山王ハ可申聞ハ、使者申付差越ハ付、目錄之通進上仕ハ、此段使者越來王子ゟ申上ハ條、以御序宜御取成可被下ハ、

一右付、翌日御老中樣より中山王使者被差上ハ御禮、芝御屋敷ハ以御使者被仰遣、御返禮物有之、又ゟ使者ハゟ御口上、被下物有之候付、其段王子ハ申達、左ハゐ作左衞門御使者ハ出會ハ、若御年寄樣御使者ハゟ三雲(定旦)新兵衞出會ハ事、

一十一月廿一日尾張樣・紀伊樣・水戸樣御三家ハ越來參上、道筋芝御屋鋪より新堀端、土器町筋西之久保八幡前より天德寺裏門前松平大和守(典固)樣前、松平丹後守(重樂)樣中御屋敷前通、御堀端虎御門ハ入、松平肥前守(定房)樣御屋敷前より霞ケ關通、井伊掃部頭(直惟)樣御屋敷後中山出雲守(時春)樣御屋敷脇より、松平出羽守(清武)樣御屋敷脇前、赤坂御門之內より麹町五丁目紀伊中納言(宗直)樣ハ參上、夫より又赤崎(本ノマヽ、坂カ)御門之際井伊掃部頭樣中御屋敷脇前より清水谷喰違を出、御堀端通一ケ谷御門外尾張中納言(繼友)樣ハ參上、夫より御堀端牛込御門外通、小石川御門外水戸中將(宗堯)樣ハ參上、夫より御堀端通昌平橋ハ入、通町ハ出、芝口御門通增上寺表門前ゟ片門前町、將監橋より芝御屋敷ハ歸、不及路樂、行列別紙有之、

一中山王進覽物、先達ゐ御留守居付御歩行宰領、足輕相附差越候、左ゟゐ御對面所ゟ被出置ゟ、

一作左衛門并御用人谷山角太夫・宮之原甚太夫・御留守居川上五後右衛門(親房)布衣着用、先達ゐ差越、先作左衛門ハ御式臺御使者之間ゟ扣居、御用人・御留守居事ハ御玄關ゟ扣居ゟ、

一越來乘物こゐ御門外石壇涯こゐ下乘、轎ハ備之内こ持せゟ、

一越來事御玄關御式臺上板間迄入來之節、大番頭役之人被出向、一揖有ゐ案内、此時重役之人こ出向一揖有之ゟ、

一越來御玄關こ被參懸ゟ節、作左衛門ハ階之上迄出迎、直こ相添罷通ゟ、此時御家老衆御玄關取付之間廊下迄被出迎、互一揖有ゐ御對面所上之間こ着座、越來ハ向座ゟ着座、副使西平親方二之間中程こ着座、通詞ゑ右二之間御縁頰こ着座、

一作左衛門右御縁頰中程こ着座、甚太夫・角太夫事ハ中山王より之目錄持參、右御縁頰之末杉戸之内こ着座、

一作左衛門則上之間敷居之内ゟ罷出、中山王より之口上御家老衆ゟ申達、其時甚太夫より目錄二之間敷居際下こゐ御奏者番衆ゟ相渡、早ゐ御縁頰初之所ゟ歸座、

一王子・副使ゟ御菓子・御茶出、通詞并作左衛門・角太夫・甚太夫ゟ為御縁頰こゐ御菓子・御茶出、

一副使已下之面々并御留守居以下之面々ゟゑ、御使者之間こゐ御菓子・御茶出、

一王子自分之進覽物二之間中程こ出、右目錄角太夫二之間下之敷居之内ゟ持參、御奏者番衆被出向被請取ゟ、此時越來上之間より下り、作左衛門為件之席ゟ出向、越來自分之口上、作左衛門御奏者番衆ゟ相述、其時彼御方御家老衆ゟ會釋有之、終ゐ何れ為退出、御家老衆板之間迄送、一揖有ゐ入被申ゟ、其外出向ゟ重役之面々御式臺迄送、雙方こ居一揖有之ゟ、

但紀州様こゐゑ、退出之節御家老加納大隅守殿其外御家老之分、御式臺上之廊下迄被送出之ゟ、尾張様こゑ竹腰壹岐守殿其外兩人御玄關板之間迄被相送、水戸様こゐハ中山備前守殿其外兩人右同斷、

(の6)

中山王より口上覽

就　御代替、琉球中山王より以使者御祝儀申上ゟ、依之越來王子を以目錄之通進上仕ゟ、

(の6)

越來王子より口上

此節中山王より爲使者差上ケ付、乍恐目錄之通進上仕度奉存ケ、成合ケ樣御沙汰奉頼ケ、

一翌廿二日、御三家樣より中山王使者被差上ケ御禮、芝御屋敷ニ以御使者被仰遣、越來ニ茂蒙　御意、御返禮物又茂使者ニ被下物有之ケ付ヲ、王子ニ申達、御請之旨、作左衞門罷出御使者へ申達ケ、

一右付、王子より右之御禮ハ、此御方御馬廻新御番を以、御銘〻ニ申上ケ、

(の8)

琉球使、御城勤首尾能相濟ケ付、十一月廿三日越來并副使・中官・樂童子御目見被仰付、即日御膳進上之次第

一大御書院御簾掛御舞臺之方御縁頰御上段より二間下ニ茂、御簾屏風・御簾襖を以相圍ケ、

但　松平佐渡守樣御出被成、御内〻より琉球人御見物被成ケ故、右之通御座圍有之ケ、

一越來新座御玄關より罷昇、新座御取附之間ニ扣居ケ、副使茂右御座於末席、茶・たはこ・火鉢表御小姓ゟ出ス、中官・樂童子ハ右御座二之間ニ相扣ケ、給仕御廣間小姓相勤ケ、

一進上物茂御出座前、大御書院御縁頰ニ備置、御馬廻新御番直之、支度熨斗目半上下、

一掌翰史より以上唐支度、其以下中官・樂童子琉球支度、

一大御書院南之方ニ御家老相詰ケ、名越右膳茂同斷、支度熨斗目半上下、御給仕ハ長上下、御側廻ハ南之方御縁頰御上段之邊より御家老詰ケ後邊迄相詰ケ、御側御醫師ハ表御書院御床之後之御縁頰ニ相詰ケ、

一太守樣御上段ニ　御出座（御支度御熨斗目半御上下）、越來事御用人・奏者ニヲ御座ニ罷出、御家老詰ケ邊ニ御用人ハ差扣居、夫より上ハ作左衞門・奏者ニヲ御上段下一疊目之末ニヲ御禮九拜、御家老御挨拶申上ケ、御太刀披露御用人終ヲ、　御意茂有之候節又御挨拶申上、下りケ節作左衞門・奏者ニヲ、作左衞門ハ初着座之所ニ差扣、夫より下ハ御用人・奏者ニヲ下ル、

一副使茂二之間下より一疊目ニヲ御禮三拜、中官・樂童子ハ下より三間目ニヲ、壹人ツヽ罷出御禮三拜、披露御用人、

但　越來ハ表御書院上杉戸より罷出、副使・中官・樂童子ハ御勝手之方下段より罷出ケ、披露御用人、

支度熨斗目長上下、

一拜領之御目錄、初之所ハ越來罷出頂戴、御用人より相渡、

隅州様より拜領物、同所ニ而御近習役より相渡、右相濟、表御書院上之間ニ而　御前様より之拜領物野村源兵衛より相渡、作左衛門・隼人・右膳及相詰ル、

一太守様　隅州様　御前様より副使ハ拜領物御目錄、表御書院二之間上ニ而、御用人・御近習役又ハ野村源兵衛ゟ銘々相渡、頂戴仕ル、

一右御三人様より樂人相中ハ拜領物被仰付ル御目錄、表御書院二之間末ニ而、御用人・御近習役并源兵衛ゟ相渡、頂戴仕ル、

一太守様ゟ御休息所、　御前様ゟ御奥ニ而御膳被　召上ル、嶋臺も差上ル、　御前様御膳被　召上ル半、王子より御挨拶申上ル趣、作左衛門御奥ハ罷出御局迄申上ル先例ニ而候處、此日　御前様御精進日ニ而ル之故、表向ゟ　御前被　召上ル分ニ可仕旨、御納殿役人より致承知ル付、御挨拶ニ罷出ニ不及ル、

但太守様御膳ハ御休息所ニ而被召上ル得共、表向ハ大御書院ニ而被召　上ル筋可仕旨被　仰出、其通有之ル、御相伴隼人ハ被仰付置ル得共、御休息所ニ而被召上ル付、不及御相伴ル、

一隅州様御膳ゟ御部屋ニ而被　召上ル、

一御引物越來より差上、　御膳半越來ハ作左衛門相附罷出、御挨拶申上筈ル得共、御内々ニ而御膳被　召上ル付、越來不及罷出ル、

一大御書院ハ　御出座三篇目、御吸物上、越來ハ及御吸物被下、嶋臺上、御肴越來差上ル、御盃越來ハ被下、御肴被下、又　御前ハ差上ル御盃下ル、

但越來進退之節、作左衛門相添罷居致介抱ル、

一副使ゟ二之間下より貳疊目之末、中官・樂童子三之間上壹帖目末ニ而、御通二銚子肴二、抑御用人、

一御後段御湯・御菓子・御茶・御後菓子之儀ゟ、御内々ニ而差上ル、

一右早而　御入御休息、此間樂童子出ル、

一御出座、音樂初、

一右相濟、初罷出ル通、越來事御用人・奏者ニ而罷出、諸事初之通御家老差添、越來御禮申上ル、御挨拶申上、御意有之　御入、

一表御書院二之間ハ越來致着座、野村源兵衛罷出、　御

(の9)

前様より、今日御膳進上御滿悦被　思召之段申聞、越來より之御禮ハ、作左衛門ゟ源兵衛ニ申達ル、

一琉球人何れも新座御玄關外迄退出、直ニ御禮罷出、越來ハ御家老、其外ハ御用人迄御禮申上退出、

一右御膳進上一巻之儀ハ、作左衛門致首尾ル、

十一月廿五日正使・副使・中官・樂童子ニ御料理被下ル次第

一廿五日御料理被下ル付、　御目見ニ罷出ル、人數召連可罷出旨、前日御使番山澤十太夫(盛香)御使ニ而被仰聞、則越來并附ミ琉人、名代ニ来副使西平親方爲御禮罷出、越來ニハ作左衛門出會、副使ニ来谷山角太夫出、退去ル、

但　正使・副使琉球支度ニ而冠なし、

一大御書院・表御書院・新座御床飾先規之通、大御書院御簾掛巻置、

一越來其外御禮之節、唐支度之面ミ来唐支度、樂童子支度右ニ準、

一時分申越越來參上、御玄關板之間迄御取次番貳人出會、御使者之間縁之邊より相良源太夫(長以)案内、表御書院中之間ニ着座、御茶出、御側御醫師罷出挨拶、

一副使・中官・樂童子新座玄關より參上、御取次番貳人案内、新座ニ差置、御側御醫師罷出挨拶、

但　御出座前表御書院三之間ニ差置ル、右之次第中通御目附請込、

一隅州様御上段ニ　御出座、御側詰之面ミ早晩之通、御側御醫師ハ大御書院御舞臺之方御縁通、表御書院御床之後南ニ向列居、

一越來表御書院上杉戸之口より、大御書院御上段敷居涯より下貳枚目末ニ着座、隼人側ニ附居副使并中官・樂童子来、表御書院三之間より表御小姓番所を通、大御書院下段ゟ御用人貳人奏者ニ而、副使来二之間末之敷居より二枚目之頭ニ着座、中官・樂童子ハ三之間上より一枚目之末ニ列居、左ル而、御小姓御上段之御簾を巻、此時越來御上段敷居涯より末貳枚目之中程ニ進三拜、副使来着座之席より少進三拜、其外之琉人来着座之席ニ而直ニ御禮平伏、其時隼人より御禮御取合申上、御意有之ル時越來御禮、

一太守様御附書院ニ　御入、其時越來初中官・樂童子迄平伏、

一副使ハ最前之通罷通、表御書院二之間ニ着座、中通御目附貳人請込、中官・樂童子ハ表御書院三之間罷通新座ニ着座、中通御目付貳人受込、

一右終ゐ越來表御書院上之間ニ着座、

一御引渡出、御料理出ル前下ル、

一塗供行ニゐ三汁十菜之御料理出、御料理半隼人罷出挨拶、御側御醫師壹人相詰、

一銚子三篇、附後段御茶菓子・御濃茶・御薄茶、給仕表御小姓、支度熨斗目長上下、

一副使表御書院二之間ニゐ、三汁十菜之御料理塗供行ニゐ被下、給仕表御小姓、支度熨斗目半上下、御料理半御近習役罷出挨拶、御側御醫師相詰ル、附後段御茶菓子・御濃茶出、

一中官・樂童子ハ新座ニゐ、三汁七菜之御料理塗膳ニゐ被下、給仕御廣間小姓、支度不洗物麻上下、中通御目付貳人請込、附後段御濃茶・後菓子出、

一右終ゐ　御上段御簾巻、

一越來表御書院上之杉戸口より、御用人・奏者ニゐ御上段上之敷居頭より三枚目之中程、御客居御上段之方ニ向着座、追付　太守様御出座、越來御禮、

一御吸物上、越來ハ表供行ニゐ被下之、

一嶋臺上、御土器御取上、御上段御客位之方ハ嶋臺直ス、越來御土器頂戴、御土器御挨拶之人(挨脱カ)ゟ下ケ渡、御肴被下、又　御前ハ御取上、越來本之所ハ着座、

　但　右進退之節、隼人付添罷在致介抱ル、

一嶋臺下、

一副使ハ表御小姓番所ハ扣居ル、新座之面〻ハ副使後之方ニ列居、中通御目附請込、

一足打ニ土器請出、　御前ハ御取上、御土器二之間下より貳枚目頭ニゐ副使ハ被下、御家老差寄肴、抑副使御土器持下、

一右相濟、足打ニ土器請、兩銚子并挾肴御小姓持出、三之間上壹枚目末ニゐ、中官・樂童子ハ御通被下、御用人貳人ニゐ肴抑被下、納之人土器持下、

一右終ゐ御吸物下ル、越來着座より少中央之方ニ進出御禮、御家老御取合申上、　御意有之退出、

一右相濟、追付作左衛門并谷山角太夫・宮之原甚太夫御前ハ被召出、何れ茂精を出相勤首尾好ゐと　御意有之、隼人より御取合申上退出、

一越來其外御料理被下ル琉球人御禮參上、越來ハ如最前

(の10)

御玄關ゟ罷出、表御書院中之間ニゐ、御家老出合ハ節御禮申上退出、副使・中官・樂童子共新座玄關より罷出、於新座御側目付出會退去、

一作左衞門・谷山角太夫・宮之原甚太夫於御家老座、越來同前之御料理被下之、給仕御廣間小姓、支度不洗物麻上下、中通御目附貳人請込、

一琉球假屋守ハ於御用人座、右同斷御料理被下之ハ、給仕右同斷、

十一月廿六日琉球人ハ操御見せ被成ハ次第

一御床、定御飾之通御簾掛卷置、

一御舞臺之方之縁、毛氈敷、

一越來其外之琉球人、琉球支度冠なし、

一御家老始支度平服、

一御上段御簾垂、敷居涯ニ御屏風立切、

一御上段敷居涯より下三枚目ニ屏風を立切、此所ゟ　隅州樣御見物被遊ハ、

一御屏風涯ゟ下三枚目屏風立切、此所より越來并副使・樂童子見物、

一大御書院主居之方、障子・外縁之雨戸差置、

一御上段上杉戸之方ハ、御小姓貳人東方ハ向相詰、

一御棧敷御簾掛、御奥より御見物、御通筋大御書院御床之後、御附書院屏子門通、

一表御書院上之襖を仕切、中官並士ニゐ見習ニ參ハ琉人相覗見物ハ儀、被差免ハ、

一越來御玄關より罷登、御取次番壹人板之間ハ出合、奏者御取附之間邊ハ御側御目附出會、直ニ見物所ハ致案内、御舞臺之方ハ向着座、副使・樂童子共新座玄關より參上、中通御目附貳人案内ニゐ、表御書院三之間通、表御小姓番所罷通、夫ゟ大御書院見物所ハ着座、火鉢・たはこ盆・茶見合出ハ、請込御側廻、

但操之内何そ出ハ儀ゑ、御側廻請込之面々ゟ見計ハ、

給仕ゑ御側廻之御小姓・御茶道、

一中官并士ニゐ見習ニ參ハ琉人共、新座玄關より、中通御目附・表御目附兩人案内ニゐ、表御書院上之間ハ差置、中官ハ前通、見習ニ參候琉人共後通ニ着座、たはこ盆等見合、請込中通御目附、給仕御廣間小姓袴計、

一操一流濟御中入之節、越來并副使・樂童子見物所ニゐ茶漬ことき御料理出、御中入之節ハ御舞臺之方御簾垂、

一中官并見習之士琉人共、罷歸支度致ニゐゑ勝手次第ニ

ケ由、中通御目附より相達ケ、
一操終ゐ、越來并副使表御書院二之間に着座、樂童子ハ三之間に着座、御用人壹人出會ケ時、操見物被仰付ケ御禮申上退出、中官并見習之士琉人ハ、見物所ゟ直ニ御暇、
一越來并副使其外之琉人御暇・退出之次第、最前罷出ケ節同前、

越來御暇被下十二月二日出足付、前日朔日罷出
御目見被　仰付、御禮申上ケ次第

一越來御玄關より參上、御取次番貳人出向、御使者之間御縁之邊に、御用人・奏者こゐ御取附之間に扣居ケ、
一副使ハ新御玄關より參上、御取次番貳人奏者、御取附之間王子着座之下に扣居ケ、
一中官・樂童子ハ右二之間に差置ケ、
一表御書院二之間と三之間と相之御襖差置ケ、
一御出座前、表御書院二之間中央に越來并副使列居、
一御出座被遊ケ節、越來并副使少進出三拜、御家老ゑ相添罷在、三拜相濟、即作左衛門より、此節　御威光を以首尾好相勤、御暇をも被成下難有奉存ケ旨申上、御意有之ケ時、御取合隼人・作左衛門より表申上、御禮仕、本之所に歸座、

但王子より申上ケ儀ハ、通事を以申上來ケ得共、今日之儀、通詞を以何角不致樣可仕旨被仰付、右之次第こケ、

一三之間御襖明ケ付、作左衛門ゟいつれも御禮申上ケ通遂披露ケ、其時一同ニ御禮、
一右終ゐ　御入被遊ケ、
一御兩殿樣より中山王に之御返翰、表御書院二之間こゐ御用人より越來に相渡、御家老ゟ三司官に之狀引次ニ相渡、御家老列座、右過ゐ何れも退出、
一越來王子江戸首尾好相仕舞、御暇被下ケ付、御家老嶋津内記(久賢)、御用人谷山角太夫(純房)・鎌田六郎太夫(政直)、御近習役平田孫太郎(位充)被相添、十二月二日江戸被差立、東海道・美濃路廿日道中被仰付ケ、
一越來芝御屋鋪四時出足、北新御門より行列繰出、御本門前・東御門前通、通町ニ懸罷通ケ、
一鈴之森迄正使ハ駕籠、副使ハ駕籠、中官・樂童子ハ騎馬、御家老・御用人・御近習役其外御馬廻騎馬、
一道中泊休之警衛等、罷上ケ節同前、罷下ケ付ゐ之一卷

ハ、總ゐ別冊ニ委細有之ゟ、嶋津内記殿首尾、

一琉球中山王使者并従者迄、道中無別條十二月廿一日伏見ゟ到着仕ゟ由申來ゟ、此段申上ゟ由、御留守居佐久間九右衛門(虎村)名書ニゐ、御用番井上河内守様ゟ、右九右衛門を以同晦日御屆有之ゟ、

一右使者并従者迄、無別條舊臘廿七日於大坂致着船、順風無御座ゟ付川口ゟ滯船仕、正月八日朝出帆仕ゟ旨申來ゟ、此段申上ゟ由、御留守居森川理右衛門(武寛)名書ニゐ御用番水野和泉守様へ、同十七日右理右衛門を以御屆有之ゟ、

一琉球中山王使者并従者迄、無別條今月六日薩州鹿兒嶋ゟ下着ゟ旨申來ゟ、此段申上ゟと書付、二月廿六日川上五後右衛門名書ニゐ、久世大和守様ゟ御屆有之ゟ、

一琉球使往來共人馬并川之渡船中浦御觸之儀、先例之通被仰渡ゟ、委細之儀ハ、琉球使者方諸事一巻帳ニ有之ゟ、

享保四年己亥二月

(朱)「右者就　御代替、享保三年琉球使江戸江參府勤務之次第、用係北郷作左衛門ゟ書出ゟ帳面を以、相記之置ゟ」

1038

吉貞公御譜中

正文社文庫

なを〳〵なにも〳〵よろしく申せとの御事御さゟ、一位様(家宣室、天英院)より申せとの御事に御座ゟ、まつ〳〵餘かんニ御座ゟへとも、

一位様御機けんよくならせられ、御せん等もめし上られゟまゝ、御めてたくおほしめし被成へくゟ、いよ〳〵御手まへ様かわらせられゟ御事もおはしましゟハすや、きかせられ度思しめしゟ、此御もくろくのとをり、おりふしのまゝ被遣ゟ儀、文の御しなまてこておはしましゟ、めてたくかしく、

享保(ヤカキ)四年二月七日

ゟ

いわ倉

まつ平

さつまの守様

人〻御中

梅園

1039

繼豐公御譜中

今茲享保四年己亥二月八日、近衛攝政家熙公之令妹(八百君)整二婚儀於閑信院宮(直仁親王)一、是故繼豐呈二上賀文於天英院殿一、

1040

正文在文庫

なを〳〵何もよく御心得ゟて申せとてゟ、かしく、

御文くたされゟ、まつ〳〵

一位様御機嫌よくならせられゟ御事、御めてたさ、

八百君様御入輿も、萬〻しゆひよく濟せられゟ御事、御めてたさ、御祝義仰あけられ、御文のやう披露いたしまいらせゟへハ、御滿足ニ思しめしゟ、

一位様大かたならす御滿足ニ思しめしゟ御事御さゟ、幾久しく千とせ萬代までも、御機けんよく御はんしやうあそハされゟ事、かきりあらすと祝入らせられゟ御事御さゟ、かしく、

享保四年（朱カキ）

松平　大隅守さま　御返事　人〻御中

岩倉　梅園

1041

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵、是よりハめてたさのミと、祝〳〵入まいらせゟ御事に御座ゟ、かしく、

御ふミ被下かたしけなく存まいらせゟ、御手前さまニも弥御替り被成ゟ御事も御座なくゟよし、數〳〵めてたく存まいらせゟ、偖は平松少納言（侍春）事、此度三位ニ敕許いたしまいらせゟ御事、めてたく思召被成ゟよしそう〳〵御悦として文被下、數〳〵かたしけなく存まいらせゟ、かしく、

享保四年二月（朱カキ）

松平　さつまの守さま　人〻申給へ　御返事

梅園

1042

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

(の1)

寫

去比、大坂町奉行所ニゐ、唐物ぬけ商之者召捕ゟ付ゐ、同類とも國〻ニ申越段〻差出ゟ得共、面〻手前より改被出ゟとの儀ゑ、いまた屆無之ゟ、當六月書付を以相達ゟ趣ゑゟ處、如何被相心得ゟ哉、先比被差出ゟゑ、大坂ニゐ相知ゟ分計之儀ニゟ、年來之事ゟへハ、ぬけ商之もの餘多可有之ゟ間、西國・中國筋津〻浦〻、人之多く集ゟ所ゑ、平日無油斷被致吟味、他領之者ニゐも、ぬけ商ニ

たつさハりけ者ハ召捕、大坂町奉行・長崎奉行兩所之内、手寄次第可被相屆け、尤召捕け者を被出けこ者不及け、以上、

十一月

(の2)

寫

唐船海上こ見懸けハ、、間を隔可罷通け、并唐船之同樣こ舟かゝり不可仕趣、當度被仰出け、最早右之御觸、國〻廻船之者迄も可致承知け間、此以後唐船漂流之節、番船之者こ申付置、若右躰之品相背け船於有之者相改、うたかハしき儀もけハ、召捕可申け、

但 ふと參懸け樣子こけハ、、湊ゟ引入、舟中荷物委相改、其上こゟ通し可被申け、以上、

十一月

(の3)

右之通段〻從

公義被 仰渡けこ付、去年十一月被 仰渡御書付之寫、琉球在番ゟ差越之、唐船漂流之所近ク不圖不參懸樣、其元へ下居け船持共ゟ堅可申付旨先比申越け、然者抜買之儀こ付ゟ、別ゟ被入御念御事け故、去年六月已來被 仰渡け御書付之寫、此節相渡け間、攝政・三司官ゟ、右仰渡之趣末〻迄相守け樣こ可相達け、尤地下之船唐船近ク船を寄、唐物致抜買け儀、又者買本不慥唐物類相求け儀、曽ゟ不仕樣時〻可申渡け、就中横目之面〻ゟ申含置、萬一右躰之者於有之者、遂吟味其者急度覺悟申付置、無油斷早〻可遂披露け、右之趣稠敷可申渡け、以上、

朱カキ
享保四年 二月十八日　　種子嶋(久基)彈正

1043

吉貴公御譜中
正文在文庫

歳暮之 御内書可相渡け間、明廿一日五半時 御城ゟ家來可被差出け、以上、

朱カキ
享保四年 二月廿日　　戸田山城守

松平薩摩守殿

1044

吉貴公御譜中
正文在文庫

肇年之賀詞雖事舊け珎重、滋可爲勇健け、此方無吴事け、然者如目錄贈之け、猶屬使者口上け、謹言、

享保四年二月廿三日　（花押　No.4）

薩摩中將殿

1045

仝上

新年之佳義雖事舊ハ珎重、滋可爲勇健ハ、此邊無恙ハ、仍如目錄贈之ハ、猶屬使者口上ハ、謹言、

二月廿三日　基熙

薩摩中將殿

1046

仝上

陽春之慶賀珎重ハ、如例營中へ以使者申入ハ序、啓一簡ハ、滋可爲清福ハ、此邊無恙ハ、仍目禄之通并調合之保之贈之ハ、餘屬口上ハ、謹言、

仲春廿三　（花押　No.3）

薩摩中將殿

1047

繼豊公御譜中

正文在文庫

年甫之慶事珎重ハ、如例營中へ以使者申入ハ序、啓一翰ハ、愈可爲安穩ハ、此邊同前ハ、仍如目錄贈之ハ、餘屬口上ハ也、

享保三年（ママ）仲春廿三（島津繼豊）　（花押　No.3）

松平大隅守殿

1048

仝上

今年之嘉義雖事舊ハ珎重、弥可爲勇健候、此邊無吴事ハ、仍如目錄贈之ハ、猶屬使者口上ハ也、

享保四年二月廿三日　基熙

松平大隅守殿

1049

仝上

改年之佳慶雖事舊ハ珎重、滋可爲勇猛ハ、此邊無吴事ハ、然ハ如目錄贈之ハ、猶屬使者口上ハ也、

享保四年二月廿三日　（花押　No.4）

松平大隅守殿

1050

吉貴公御譜中

今歲大清國康熙皇帝康熙五十八年遣二冊使于流球國一、封二尚敬一爲二琉球國中山王一焉、正使翰林院檢討海寶・副使翰林院

編修徐葆、光齎敕封一、六月朔日來二琉球國一、七月二十六日捧二敕書一登レ城、翌年二月十六日開帆、歸二大清國一也、吉貴命二相良權太夫長規一用人役奉二行之一、野村勘兵衛良昌目附役副二之於長規一、家老筆二其命令一而投二豐見城王子・三司官一、長規以二四月朔日一到二琉球一、翌年六月十七日解二纜於琉球一、同月二十一日歸二麗府一、良昌以三月十九日到二琉球一、翌年六月十日琉球出帆、同月十八日曉歸二麗府一、

1051

正文在琉球國國司

當年從大清國封王使渡來付ゐ、御用人相良權太夫渡海被仰付、御目附野村勘兵衛事相添被差越ケ間、萬端無遠慮申談、首尾能樣可被相計ケ、且又勅使・家來其外來着之大清人、猥横行無之樣可被致格護ケ、此儀申渡ニ及不及事ケ得共、猶以可被入念儀肝要ケ、以上、

享保四年亥二月　　種子嶋彈正（久基）
　　嶋津將監（久當）
　　嶋津本（久武）
　　嶋津内記（久賢）

豐見城王子
三司官

1052

「雜抄」（朱）

犬抔盜ケ義ハ輕キ事之樣ニ存、間ニハ盜取ケ者も可有之ケ、馬盜取ケ者ハ御仕置之御法も有之事ケへ共、都ゐ生類盜取ケ儀ハ、外ゝ盜同前之筈ケ間、末ゝ迄得其意相慎ケ樣ニ、與頭・支配頭、私領ゑ領主其外、早晩之通惣通達ニて不洩樣可申渡ケ、

享保四年亥二月　　將監

（表紙）

吉貴公
繼豐公　自享保四年三月
至同五年十二月

追錄　舊記雜錄　巻五十五

1053

吉貴公御譜中
正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ゟ間、不及登城ゟ、以上、
三月十四日
水野和泉守（忠之）
戸田山城守（忠眞）
久世大和守（重之）
井上河内守（正岑）
松平薩摩守殿（島津吉貴）

1054

仝御譜中

同年三月十五日
將軍吉宗公第三男子（号源）、誕生於武江平川城、

1055

仝御譜中
正文在文庫

宜しく申上まいらせられゟ、なをめてたくかしく、
御文下されゟ、まつ〳〵
公方様御機嫌能御座被成御めてたさ、偖は今朝
若子（源三）様御誕生被遊、かす〳〵御めて度、右之御祝義仰上
られ、文の様序之時分、めてたくかしく、
享保四年三月十五日（朱カキ）

ゟ

ときはゐ
みむろ
たかせ
外やま
たさは

松平薩摩守様
御返事
人〻申給へ

1056

仝上

返〳〵文のやうかす〳〵御満そくに思しめしゟ、よく申せとの御事に御さゟ、めてかしく、

被仰上ゟことく今朝御する〳〵と
若子様御たん生成まいらせ、
一位様（天英院、徳川家宣室）こも大方ならす御満そくに思しめしゟ、萬〻年も
といわゐ入らせられゟ、かしく、

朱カキ享保四年三月十五日

ゟ

いわくら
梅その

まつ平
さつまの守様
人〻御中 御返事

1057

繼豐公御譜中
正文在文庫

よろしく申せとの御事御さゟ、返〳〵めてたくかしく、
被仰上ゟことく、今朝御する〳〵と
若子様御たん生成まいらせゟ、
一位様こも大方ならす御まんそくに思しめしゟ、萬〻年も御はんしやうならせられ、いく久しくとかきりなく思しめしゟ、御悦被仰上かす〳〵御満そくに思しめしゟ、めてたくかしく、

朱カキ享保四年三月十五日

ゟ

いわくら
梅その

まつ平
大すミの守様
人〻御中
御返事

1058

仝上

此由、何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、返〳〵かしく、
文被下ゟ、まつ〳〵
一位様御機嫌よく成らせられゟ御事、御めてたく思召被成ゟよし、偖はきのふ
一位様より御尋まし、御目錄の通參らせられゟへハ、數〳〵かたしけなく思召なされゟよしこて、文のやう披露申まいらせゟへハ満そくこおほしめしゟ、めてかしく、

朱カキ享保四年三月十六日

ゟ

岩倉
梅園

松平
さつまの守さま
人〻
御返事
申給へ

1059

仝上

此由、何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、御返〻かしく、

御ふミ被下ゟ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられゟ御事、めてたくおほしめしゟ、扨は昨日御尋まし遊ハし御同氏大隅守殿へ御目錄の通参らせられゟ得ハ、數〳〵かたしけなく思召被成ゟよしこて、文のやう披露申まいらせゟ得ハ、數〳〵御滿そくにおほしめしゟ、めてかしく、

享保四年（朱カキ）

松平　　岩倉

薩摩守さま　御返事　　梅園

人〻御中

ゟ

1060

仝上

誠に幾千とせ萬〻年も長久御繁昌成らせられ、御目出たさのミ限りなく、相替らす御しうき拜領被成ゟやうこと祝思しめしゟ、此由何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、なをめてかしく、

文被下ゟ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられゟまゝ目出度思召被成ゟへくゟ、偖は今日御本丸こて、

源三様御七夜にて數〳〵御目出たさ、御祝儀御目錄の通公方様よりおく方へ拜領被成、數〳〵有かたくかたしけなく思召被成ゟよしこて、御禮仰上られゟ御ふミのやう披露申まいらせゟ得ハ、數〳〵御滿そくこおほしめしゟ、めてかしく、

享保四年三月二十一日（朱カキ）

松平　　岩倉

さつまの守さま　　梅園

人〻御中

ゟ

1061

吉貴公御譜中

正文在文庫

明廿八日例月之御禮無之ゟ間、不及登　城候、以上、

享保四年三月廿七日（朱カキ）

水野和泉守

戸田山城守

久世大和守

井上河内守

松平薩摩守殿

1062

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝香具品〻并丸熨斗一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ之處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

享保(朱カキ)四年四月十三日　正岑判

松平薩摩守殿(在口脇)　井上河内守正岑

1063

仝上

明十五日例月之御禮無之ゟ間、不及登　城ゟ、以上、

享保(朱カキ)四年四月十四日

水野和泉守
戸田山城守
久世大和守
井上河内守

松平薩摩守殿

1064

継豊公御譜中

正文在文庫

謹奉呈一翰候、松平越中守(定重)殿去十月御卒去之由、不慮之御事絶言語奉存ゟ、此等之御悔爲可申上如斯御座候、誠惶誠恐敬白、

享保(朱カキ)四年四月廿三日　中山王尚敬判

進上　侍從様

1065

吉貴公御譜中

正文在文庫

謹奉呈愚翰候、去申年大清國ゟ指遣候進貢使兼城親雲上北京首尾能相仕舞、去年八月歸帆仕、唐太平之由承知仕ゟ、此等之趣爲可申上兼城差上申候、依之目錄之通進上之仕候、猶奉期後音之時候、誠惶誠恐敬白、

卯月廿六日　中山王尚敬判

進上　中將様

1066

仝上

謹奉呈一翰候、

公方様御代替御祝儀爲可申上、去夏差上越來王子候處、江戸ゟ被召列及兩度登　城　御目見被　仰付之、御懇之蒙　上意、首尾好御暇之節被成　御奉書、御目錄之表被下

置之、且又越來從者共迄拜領物被仰付段、別ゐ難有仕合
辱次第、誠琉球之規模不大形奉存ゟ、早竟以　御威光右
之仕合冥加至極奉存ゟ、從御老中ゟ豐見城王子・三司官
ゟ被仰越趣當春使者致歸國具承知仕ゟ、此等之御禮旁爲
可申上高良親方差上申候、因茲目錄之表進上之仕候、誠
惶誠恐敬白、

卯月廿六日　　中山王
　　尚敬判

進上　中將樣

1067

吉貴公御諸中

正文在琉球國國司

覺寫

一唐船持渡之諸色抜荷仕賣買之者今以不相止不屆にゟ、
向後買元不慥疑敷品有之ゟ者不可相求、於訴出者僉議
之上其荷物可被下之、尤抜買仕者有之ゟ由沙汰承ゟ共、
是又可訴出、縱同類たりといふとも其科をゆるし、御
褒美被下之、其上あたをなさゝる樣に可申付ゟ、若存
なから不申出者有之、於令露顯者急度可所罪科事、
一海上にゐ唐船見懸ゟハヽ、縱行違にゟ共、唐船とはる
かに間を隔可罷通、尤唐船かゝり有之、近邊に同樣に
船かゝりいたしゟハヽ、遂僉議可被行罪科ゟ間、國々
所々におゐて西國・北國往來の船持ゟ者共へハ常々急
度可申付事、
右之趣堅被申渡直(置)、外より相知さる以前、面々領知
支配下より相改出しゟ樣に無油斷可被申付ゟ、若違
犯之者有之時者、伺之上仕置可被申付ゟ、以上、

戌六月

1068

全御諸中

正文在琉球國國司

琉球ゟ可申渡覺

唐物致抜買ゟ者有之、從
公義段々被仰渡趣有之ゟ、御領國之儀琉球より唐通融有
之付ゐ、前々より別ゐ被入御念、段々締方申付置事ゟ故、
大形者無之ゟ得共、萬一輕キ品にゐ者密々致商賣、自然
公義及御沙汰ゟ儀共有之ゟゐ者、別ゐ不宜事ゟ條隨分入
念締方堅固可被申付ゟ、尤爰元ゟ持渡ゟ唐物之儀者、自
今以後致脇賣ゟハヽ、買手より御勝手方ゟ申出、令免許
ゟ節假屋守承屆、慥成品者賣渡ゟ樣にと此節琉球假屋守
ゟ申渡ゟ、且又御當國之者唐物於長崎買調ゟ節も、御勝

手方免證文を以可相調ハ、上方於他國買求ハ儀一切令停止ハ、乍然藥種之儀ハ他所ニ而ハ不相求ハ而不叶品有之ハ、、抜物ニ而無之段賣主より證文取置可相調ハ、買元不慥唐物相求ハ者於有之ハ、不依自他國者、屹可及沙汰旨、御國中一統申渡置ハ、尤琉球在番方ニハ委細申渡旨有之ハ條、聊緩せ之儀無之樣可仕ハ、

右之通三司官方ニ可申越ハ、以上、

享保四年（朱カキ）亥四月　　（種子島久基）彈正

1069

全御譜中

正文在琉球國國司

琉球三司官ニ申渡覺

公義御尋者人數四拾六人有之、諸國改被仰付ハ、右之者共長崎ニ往來之唐船荷物致抜買ハ者之由ハ、依之人相書被相渡御領國中改被仰付ハ、他國者ハ勿論御當國者迄、右者共之内爲存者、又ハ唐物商賣ニ携ハ者ハ無之哉之旨人別ニ被相改事ハ、然ハ右之者共船住居、又ハ陸ニハ上りハ由人相書ニ相見得ハ、唐荷物商賣付而ハ、前〻より堅被仰渡被入御念事ハ、就中此節稠敷御改付而ハ、地方之栖居ハ曾而難叶筈ハ得ハ、無是非洋中ニ船乘出、無行方長〻難罷居筈ハ、然時ハ其領國中ニ可致漂着儀ハ難量ハ條、御當國より其許往來船之外自然於着船ハ、人相書ニ不似寄ハ共、早速船ハ陸ニ引上ケ、假籠并圍等堅固相調、其者共召込慥成番人附置、欠落又ハ不思案等不致樣ニ別而可入念ハ、　公義御尋者ニハ條飯料等ニ到、麁相無之樣申付之、則在番方ニ申出差圖次第可致ハ、人相書ニ相見得ハ通船數可乘組ハ得ハ、其元手廣其上島〻數多有之事ハ間、若怪敷船島近ク相まきり罷居儀ハ可有之ハ間、隨分氣を可附旨海邊之者共ニ兼而可申付置ハ、右改此涯迄ニ不限儀ハ條、重而何分可致下知内ハ、右之通可相心得ハ、仍人相書寫壹冊差越ハ、聊緩疎有間敷ハ、

右之通可申越旨藤馬殿（菱刈）・彦太夫殿（島津久富）被仰ハ、以上、

享保四年（朱カキ）亥四月

谷山角太夫（純朋）

頴娃長左衛門（久近）

1070

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來欣覺ハ、委曲井上河内守可述ハ也、

朱カキ
享保四年五月三日

吉宗公墨印

薩摩
中將殿

仝上

正文在琉球國國司

此節　公義御尋者ニ付ゐ、御領國中不殘御改相濟ハ、雖然此涯迄ニ不相限、向後とても御尋者之内、入來儀ゑ可有之ハ條、猶又入念時々可致穿鑿旨、大坂町御奉行より又々今度被仰渡趣有之ハ、尤御尋者之内少々ハ召捕、國々より被差上ハ得共、未殘黨過分ニ有之、被仰渡事之由ハ間、得其意左之通可相改ハ、

一改之次第諸事先頃申渡置ハ通ニ相心得、旅人・旅船堅固相改、諸所津口・境目番所之儀ゑ、改證文等相渡ハ儀此中之通可致ハ、

一右唐船抜買之者共、或四斗樽之内ニ紗綾・ちりめん類を入、銘書を替、其上を莚抔ニゐ包、或毛氈類を疊之表莚ニ卷添なと致シ、抜荷物樣々上手ニ相忍之由ハ間隨分氣を付可相改ハ、

一國往來并津口・境目より之改證文無之旅人見得來ハ、、樣躰書ニ不似寄者たりといふ共、先比申渡置ハ通早速召捕、御當地ゟ早々可差越ハ、若又往來證文等致所持ハゐゑ、何之所作ゑ不相見得疑敷旅人於有之ゑ、番人附置早々其首尾可申出ハ、尤於所相改ハ處、御尋者人相書ニハ不似寄者ニハ得共、何樣之子細ニゐ疑敷者ニハ旨委細書記可申出ハ、人相書ニ似寄ハ者ハ勿論、先頃申渡ハ通可相計ハ、

一御當國之者たりといふ共、或他所致往來、或旅人宿、或商すあひなといたしハものハ、自然紛敷唐物商賣等ニ相携儀ゑ可有之ハ間、隨分氣を付疑敷儀も於有之ハ、是又申渡置ハ通猶以可申出ハ、

一御領國手廣事ハ得ハ、萬一御尋者何方ニゑ紛居ハゐ、脇より相續ハ時ハ不可然儀ニハ條、無油斷氣を付可相改ハ、尤到以後右改被相止ハ節ハ其旨可申渡ハ、差圖無之内曽ゐ緩せ有之間敷ハ、

右通申渡ハ上、若大形之儀有之ハ節ゑ、其所曖役人・津口・境目番人其外右改方へ相懸ハ面々可爲越度ハ條、此旨堅諸支配頭并諸地頭・領主・諸所津口・境目番所諸島迄不洩樣可被申渡ハ、以上、

五月

右之通被　仰渡ゟ間、入念可被相改ゟ、此旨御差圖こゝゟ、以上、

享保四年亥五月

琉球

三司官

顕娃長左衛門

谷山角太夫

1072

吉貴公御譜中

去歳、琉球中山王遣二慶賀使越來於東都一、使職事畢、今春還二琉國一、故五月爲二謝恩使一、到二宮城親方於薩府一、從二先規一擎二書翰獻物等於　幕府一、時使三南郷休左衛門俊昌馳二東都一、傳二獻之　柳營一、

1073

仝上

正文在文庫

覺

先頃渡邊外記（永倫）於御用先、西國・中國筋之面々、唐舩抜商之者於領分吟味之樣子家來共相招相尋ゟ處、或領内之者共ゟ證文申付、或誓詞血判致させ、又ハ相觸ゟ書付を度々讀聞せゟ所々有之由、書付差出ゟ、是等之事ハ無益之儀改之名聞迄こゝゟ書付ニ預ケ置、早竟吟味之本意ハ不相立事にゟ、右之類無益なる改自今堅無用に可被致ゟ、舊冬及書付を以相達ゟ通、抜商之者共於奉行所遂糺儀、其領主ゟ申越ゟ得共、召捕被差出ゟ得共、面々手前より改被出ゟ者無之ゟハ、吟味の筋おろそかにゟ故と相聞えゟ、向後ハ一人成共召捕ゟを專一に可被申付ゟ、以上、

享保四年六月

1074

仝御譜中

正文在文庫

今朝琉球布十巻并砂糖漬天門冬一器・赤貝塩辛一器・泡盛酒二壺被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

享保四年六月七日　　重之判

久世大和守

松平薩摩守殿

1075

吉貴公御譜中

同年六月十一日、

將軍吉宗公使二井上河内守正岑一來中櫻田第上、賜二告於吉貴一、依二先蹤一賜二時服百領・白銀千枚一、同日登レ營奉レ謝レ之、謁二

吉宗公一、時賜二御馬一匹一、爲二留守於芝第一家老北鄕作左衞門久嘉亦此日奉レ拜二謁將軍家一、是依二先規一也、同月十六日發二東武芝第一、家老比志島隼人範房、若年寄名越右膳恒渡、側用人平岡八郎太夫之品、近習役相良源太夫長以此時勤用人代等從レ駕也、取二道於東海一、經二美濃路一、七月二日到二伏見一、同月十日到二大坂一、同月十七日發二大坂一取レ陸、同月二十一日到二播州坂越一、直駕レ船、同月二十六日到二備後鞆一、然駕船不レ快、同月二十七日於レ鞆登レ岸、減二人數一取レ陸、九月七日到二長州赤間關一直航到二豐州大里一、同月十日發二大里一取レ陸、經二九州之驛一、十月五日到二薩州和泉(久日出水)米之津一、由二此地一遣二謝使北鄕宗次郎久度於東武一、而同月二十八日入二麑城一、

1076

吉貴公御譜中

正文在文庫

1077

覺

乾字金引替之儀、觸書にも出ヶ通來寅十二月迄に限之ヶ、然處通用及寅年迄と心得違ヶ者も有之樣に相聞ヶ、先達ゐ相觸ヶ通通用者弥當亥十二月迄を限ヶ間、其旨急度相心得可申ヶ、以上、

朱カキ享保四年　亥七月

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

松平薩摩守口上

乾字金引替并通用之儀ニ付、家來之者被召呼、以御書付被仰渡趣致承知ヶ、此段以使者申上ヶ、以上、

(朱)「享保四年」亥七月十二日

(朱)「右久世大和守樣ヶ佐久間九右衞門(藤)(村)致持參、御取次杉山又八郎ヶ相渡、受取申ヶ旨九右衞門申出ヶ也」

1078

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

覺寫(永倫)

先頃渡邊外記於御用先、西國・中國筋之面々唐船抜商之

者、於領分吟味之様子家來共相招相尋ゟ處、或領内之者共證文申付、或誓詞血判致させ、又ハ相觸ゟ書付を度〻讀聞せゟ所〻有之由書付差出ゟ、是等之事ハ無益之儀改之名聞迄こゝ書付ニ預ケ置、早竟吟味之本意ハ不相立事ニゟ、右之類無益なる改、自今堅無用に可被致ゟ、舊冬ゑ書付を以相達ゟ通、抜商之者共於奉行所遂熟議、其領主ゟ申越ゟ得ゑ召捕被差出ゟ得共、面〻手前より改被出ゟ者無之ゟハ、吟味之筋おろそかにゟ故と相聞得ゟ、向後ゑ一人成共召捕ゟを專一ニ可被申付ゟ、以上、

享保四年（朱カキ）六月

1079

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

唐舩抜商之儀付、此節從　公義別紙之通被仰渡ゟ、然ゑ御尋者改之儀先頃段〻申渡置ゟ、向後之儀猶以入念書付等ニ不預置、改出ゟ儀を專ニ致吟味、若疑敷者有之ゟハ、無油斷申出ゟ様、役〻者共ゟ堅固可申付ゟ、尤此段末〻迄觸流等申渡儀こゝゑ無之ゟ、役〻之者共承罷在、内〻其心得を以致吟味筈ニゟ間、此段可申渡ゟ、依之右別紙寫壹通相渡ゟ、以上、

享保四年（朱カキ）七月

嶋津彦太夫（久高）

菱刈藤馬

1080

仝御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様倍御勇健御旅行、追付可被遊御着城珎重御儀奉存ゟ、然ゑ私儀、今日上使角南主馬殿こゝ御鷹之雲雀拜領仕、難有仕合奉存ゟ、早速登

城仕御禮申上ゟ、右之段爲可申上如斯御座ゟ、委細之儀ゑ、從作左衛門（北邨久嘉）隼人（比志島範房）ゟ申越ゟ、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

享保四年（朱カキ）七月十九日

松平大隅守

繼豐御判

進上　中將様

1081

繼豐公御譜中

同年七月十九日、　上使角南主馬重行來二芝邸一、繼豐始而自二

吉宗公一、拜下領貴鷹所二擊執一之雲雀上二、乃登　レ營奉レ申二

謝之ト、大樹綱吉公之時見レ憐下天下憐二生類一之法令上、自是中三絶賜二鷹鷹雲雀於侯伯一、然今也、改而復二旧範一、故總而賜二四品以上侯伯一、

1082

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

覺

大清國より琉球ハ差渡ル封王使兩人、惣人數六百四拾九人、六月朔日琉球國ハ致着船ル由、中山王申越ル、此段申上ル、以上、

亥八月二日　　松平薩摩守

1083

正文在文庫

御札令披見ル、

公方様御機嫌被相伺之ル、益御勇健御儀ル間可御心易ル、隨ゐ串鮑一箱被獻之ル、各申談遂披露ル處、一段之御仕合ル、恐ゝ謹言、

享保四年（朱カキ）八月二日　　井上河内守 正岑判

松平薩摩守殿

（朱）「右亥八月十八日岩山半兵衛ニ而御用番井上河内守様江差出ル處、御用人音羽庄兵衛請取置ル旨半兵衛申出ル」

1084

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕候、

貴公様倍御勇健可被成御座、珎重御儀奉存ル、然ゝ先頃拜領仕ル雲雀五以使差上之申ル、右付ゐ奉祝兩種目錄之通進上仕ル、將亦於御當地相替儀無御座ル之條尊意安可被思召ル、猶奉期後喜之時ル、恐惶謹言、

享保四年（朱カキ）八月二日　　松平大隅守 繼豐御判

進上　中將様

1085

仝上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ル、遂披露ル處一段之御仕合ル、恐ゝ謹言、

享保四年（朱カキ）八月三日

水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠眞判

久世大和守 重之判

井上河内守 正岑判

1086

松平薩摩守殿

繼豊公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

朱カキ
享保四年八月三日　　正岑判

〃　松平大隅守殿　　在口裏　井上河内守正岑

1087

吉貴公御譜中
正文在文庫

一筆啓上仕候、先以
貴公様益御勇健被成御座、去二日從備州鞆湊陸地被遊御通路旨承知仕、珎重御儀奉存ゟ、然ゝ去十五日一門中其外心安方相招、拜領之雲雀披首尾能相濟大慶仕ゟ、右之段爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

朱カキ
享保四年八月十八日　　松平大隅守繼豊判

進上　中將様

1088

仝上

御札令披見ゟ、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又同氏大隅守儀、以
上使御鷹之雲雀拜領之、難有由得其意ゟ、依之被差越使者ゟ、紙面趣各一覽之事ゟ、恐〻謹言、

朱カキ
享保四年八月十九日　　井上河内守正岑判

松平薩摩守殿

1089

仝上

誠ニ御機嫌よく度〳〵拜領なられゟやうニと思しめしゟ、此よしよく申せとてゟ、かしく、
八月二日の日付にて文くたされゟ、まつ〳〵
一位様御機嫌よく御座あそハされ、御めてたく思しめしなされゟ由、先月十九日
公方様より　上使角南主馬こて、御鷹雲雀御同氏大隅守殿へ御拜領被成、御てまへさまニおゐてかたしけなくおほしめしなされゟよし、御禮御ふいてうと御座ゟて、文のやう披露いたしまいらせゟへハ、御念入ゟ御事御滿足ニ思しめしゟ、めてたくかしく、

1090

松平　岩倉
さつま守さま　梅園
御返事
人〻御中

ゟ

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺ㄟ、委曲水野和泉守可述ㄟ也、

朱カキ
享保四年　九月七日

吉宗公墨印

薩摩
中將殿

1091

吉貴公御譜中

仝上

なを〳〵めてたくかしく、

御文被下ㄟ、

公方樣御機嫌能御座被成、御めてたく思召ㄟよし、扨は先月十九日

上使角南主馬にて、御鷹の雲雀御同氏大隅守殿御拜領被成ㄟ御事聞かせられㄟ、かす〳〵辱おほしめしㄟよし、使者をもて仰上られㄟニ付、なを文のやう宜しく披露いたしまいらせㄟ、めてたくかしく、

ゟ

松平
薩摩守樣
御返事
人〻御中

みむろ
たかせ
外やま
たさは

1092

繼豐公御譜中

正文在島津備中

來札令披見ㄟ、先頃御鷹之雲雀致拜領ㄟ爲祝儀示給、欣然之至ㄟ、謹言、

朱カキ
享保四年　九月十八日

繼豐御判

島津玄蕃殿（貴儲）

1093

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

覺

御尋者改付ゐ者、別紙之通段〻被仰渡ㄟ御書付被差越ㄟ間、入念可被相改ㄟ、左ㄟゐ當四月より以來被仰渡ㄟ御

書付有之ハ得共、船便無之故此節一所ニ被差越ハ、此旨
菱刈藤馬殿・島津彦太夫殿被仰ハ、以上、

享保四年（朱カキ）九月廿八日　　頴娃長左衛門（久近）
谷山角太夫（純房）

琉球
三司官

1094

繼豐公御譜中
正文在文庫

明後朔日朝鮮信使御禮申上ハ間、衣冠重を着太刀帯五時
可有登　城候、以上、

享保四年（朱カキ）九月廿九日　　水野和泉守
久世大和守
井上河内守

松平大隅守（島津繼豐）殿

1095

吉貴公御譜中
正文在琉球國國司

芳墨令披見ハ、弥安全之旨珎重之事ハ、然ハ從大清賜物
之緞子・繻子二卷贈給之、過量之至ハ、恐惶不宣、

享保四年（朱カキ）十月六日　　中將吉貴御判

中山王（回酬）

1096

全上

御札令披見ハ、
公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、然ハ去年琉球
中山王使者差渡ハ之處、首尾好御禮申上之、其上品〻被下
之、且又使者・從者迄拜領物被仰付之、重疊難有由得其
意ハ、依之爲御禮、其國迄以宮城親方書翰并目錄之通獻
上ハ付ゐ、以使者被越之遂披露ハ、則返翰遣ハ條可被相
達ハ、恐〻謹言、

享保四年（朱カキ）十月七日　　水野和泉守忠之判
戸田山城守忠眞判
久世大和守重之判
井上河内守正岑判

松平薩摩守殿

1097

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

猶以在番附役蘭牟田八左衛門六月八日致病死ハ由、右代役ゟ追ゐ被仰付、在番人同前來春渡海被仰付にて可有之ハ、其中之儀ハ權太夫附役罷居儀ハ間、申談御用向相勤ハ樣可申付旨、是又權太夫へ申越ハ、

已上、

一筆令啓達ハ、其元在番中原伊兵衛致病死ハ、然ゟ相良(長規)權太夫并野村勘(良昌)兵衛罷在ハ故、御用筋差支儀ゟ無之筈ハ、因茲伊兵衛代在番人之儀ゟ追ゐ被仰付、最早來春社渡海被仰付ニゐ可有之ハ、當時封王使在島御用向繁多可有之ハ條、右兩人ニ申談、萬端間違無之樣可被相勤儀可爲肝要ハ、權太夫ニゟ別紙を以申越ハ、恐々謹言、

享保四年(朱カキ)十月十一日　　種子嶋彈正　久基判

嶋津將監　久當判

嶋津内記　久貫判

豐見城王子

三司官

1098

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、公方樣御機嫌被相伺之ハ、益御安全御儀ハ間可御心易ハ、隨ゐ小熬海鼠一箱被獻之ハ、各申談遂披露候之處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

享保四年(朱カキ)十月廿一日　　久世大和守重之判

松平薩摩守殿

1099

吉貴公御譜中

芳簡披覽、先以海陸無難、去月五日歸國之由被示聞、目出度悅入ハ、漸寒氣ハ、弥可爲清福珎重、此邊無吳事ハ也、

享保四年(朱カキ)十一月朔日　　(近衛)基熙

薩摩中將殿

1100

仝上

鴈緘披閲、寒氣之節愈平安、且海陸無難歸國之事、早々被示聞悅思給ハ、此地無吳變ハ、尚期後音ハ、謹言、

享保四年（朱カキ） 仲冬初三　（近衛家久）（花押）No.4

薩摩中將殿

1101

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳牒披閲、今度海陸平安歸國之由被示聞、欣幸之至ハ、

此地無事ハ、尚期後信ハ、謹言、

享保四年（朱カキ） 仲冬五　（近衛家熙）（花押）No.3

薩摩中將殿

1102

吉貴公御譜中

正文在文庫

一筆啓上仕ハ、

貴公様益御機嫌能、去月五日被遊　御歸國之旨承知仕、

目出度御儀奉存ハ、御祝詞爲可申上、以使目錄之通進上

之仕ハ、猶奉期後音之時候、恐惶謹言、

享保四年（朱カキ） 十一月十三日　松平大隅守 繼豐判

進上　中將様

1103

吉貴公御譜中

同年十一月十五日、吉貴歸國之謝使北郷宗次郎久度登レ

營、獻二吉貴先規幣物一、勤二使職一、奉レ謁二

吉宗公一也、久度亦獻二上御太刀一腰・御馬代銀壹枚・時

服三領一、同十八日久度再召　レ營、賜二時服三領・道服一

領於久度一、

1104

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又今度被下

御暇、其上御馬并白銀・時服拜領之、難有之由得其意ハ、

就國許到着爲御禮、以北郷宗次郎琉球芭蕉布百端并御樽

肴被獻之ハ、遂披露ハ處、　御前ニ被　召出之、入念ハ

段御喜色之御事ハ、恐〻謹言、

享保四年十一月十八日（朱カキ）　水野和泉守 忠之判

戸田山城守 忠眞判

久世大和守 重之判

1105

吉貴公御譜中

正文在文庫

松平薩摩守殿

井上河内守
正岑判

なを〳〵御表よりも御禮御申上被成ゟ得共、尚又文の様宜申上まいらせゟ、めてたくかしく、

御文下されゟ、

公方様ます〳〵御機嫌よく御座被成、御めて度思召ゟよし、さてハこのたひ御手前様御いとま

上使を以仰出され、白銀・時服御拜領被成、その上御前にて御懇の御諚、ことに御馬拜領被成有かたく思召ゟ由、御國もとへ御着被成ゟ由にて、御使にて御禮仰上られゟ、御ふミの様宜しく申上まいらせゟ、めてたくかしく、

享保四年（朱カキ）

松平
薩摩守様
御返事　人〻御中

みむろ
たかせ
外　山
たさハ

ち

1106

仝上

なを〳〵御する〳〵と御無事ニ御着なされゟ御事めてたく思しめしゟ、此よし何もよく申せとてゟ、かしく、

十月五日の御ふミくたされゟ、まつ〳〵

公方様

一位様御機嫌よく御座被遊、めてたく思しめし被成ゟよし、さてハ御てまへさま今度　上使を以て御いとま　仰出され、白銀・時服御拜領、そのうへ　御前にて御ねん比の御諚、ことに御馬御拜領、重〳〵かたしけなく思しめし被成ゟよし、御國元へ御着なされゟよしニて、御使ニて御禮仰あけられゟニ付、文のやうひろういたしまいらせゟへハ、御念いらせられゟ御事御滿足ニ思しめしゟ、めてかしく、

享保四年（朱カキ）

松平
さつま守さま
人〻御中

いは倉
梅その

ち

1107

繼豐公御譜中

正文在文庫

一筆令啓ハ、漸〻寒氣ハ得共、貴殿弥御無吴之由珎重存ハ、我等無別條ハ間可心安ハ、歳末之爲祝儀、目錄之表令進入之ハ、恐〻謹言、

享保四年（朱カキ）十一月廿二日　　薩摩守　吉貴御判

松平大隅守殿　御宿所

1108

吉貴公御譜中

正文在文庫

瑞章令披閲候、今度首尾能御暇、海陸無吴儀其地御到着珎重之事ハ、依是被入御念之段過當之至存ハ、恐〻謹言、

享保四年（朱カキ）十一月廿二日　　水戸中將　宗堯判

松平薩摩守殿　御報

1109

仝上

一筆啓上仕候、

貴公樣益御勇健可被成御座、目出度御儀奉存ハ、歳暮御祝詞爲可申上、差上使目錄之通進上之仕ハ、於御當地ゑ相替儀無御座ハ、尊意易可被思召候、猶來春諸慶可申上候、恐惶謹言、

享保四年（朱カキ）十一月廿五日　　松平大隅守　繼豐判

進上　中將樣

1110

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方樣益御機嫌能被成御座、先頃朝鮮之信使御禮申上、其上御變應相濟ハ段被承之、恐悦旨尤ハ、依之被差越使者候紙面之趣各申談及　高聞ハ、恐〻謹言、

享保四年（朱カキ）十二月四日　　井上河内守　正岑判

松平薩摩守殿

1111

仝上

尊書拜見仕ハ、先以御機嫌能十月五日被遊　御歸國、目出度御儀奉存ハ、爲御禮使北鄕宗次郎被差上ハ付、被仰下段忝次第奉存ハ、宗次郎事

御目見相濟被成御奉書ハ、依之今日當御地爲立申ハ、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

享保四年十二月五日　　松平大隅守
進上　中將樣　　繼豐御判

1112

吉貴公御譜中
正文在文庫

御札令披見ㄟ、
公方樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ㄟ、隨ゐ蜜柑二箱
炙鰷一箱被獻之ㄟ、各申談遂披露ㄟ處一段之御仕合ㄟ、
恐ゝ謹言、

享保四年十二月十一日　　井上河内守
松平薩摩守殿　　正岑判

1113

全上

御札令披見ㄟ、就寒中
公方樣御機嫌以使者被相伺之ㄟ、益御安全御儀ㄟ間可御
心易ㄟ、隨ゐ御羽織五并鰹節一箱被獻之ㄟ、各申談遂披
露ㄟ處一段之御仕合ㄟ、恐ゝ謹言、

享保四年十二月十三日　　井上河内守
　　正岑判

1114

繼豐公御譜中
正文在琉球國國司

爲年首之嘉儀、被差渡使簡、殊目錄之表贈給之、入念ㄟ
之段令祝着ㄟ、猶期後喜之時ㄟ、恐惶不宣、

享保四年十二月廿五日　　侍從繼豐御判
謹上　中山王　　松平薩摩守殿

1115

全上

芳墨令披閲ㄟ、爲御代替御祝儀、去歲江府ゑ被差上使者
ㄟ之處、結構被仰付首尾好相仕舞之、歸國大悦之由こゐ
被差渡使翰、別錄之通贈給之、入念儀忻然之至ㄟ、恐惶
不宣、

享保四年十二月廿五日　　侍從繼豐御判
謹上　中山王

1116

全上

芳札令披見ㄟ、其元弥平安之由珎重存ㄟ、於我等無恙ㄟ、

入念示給殊從大清賜物之織物二巻被相贈之、懇篤之至ハ、恐惶不宣、

朱カキ
享保四年十二月廿五日　大隅守繼豐御判

中山王
回章

1117

吉貴公御譜中
正文在文庫

爲歳暮之祝儀、小袖五重到來欣覺候、委曲久世大和守可述ハ也、

朱カキ
享保四年十二月廿七日　吉宗公墨印

薩摩
中將殿

在包紙
薩摩
中將殿

1118

仝上

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ハ、將又參勤時分之儀、以使者被相伺之ハ、及　上聞ハ處、來年九月中可致參府旨被　仰出ハ條、可被存其趣ハ、恐〻謹言、

朱カキ
享保四年十二月廿八日

水野和泉守
忠之判
戸田山城守
忠眞判
久世大和守
重之判
井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

1119

仝上

一筆啓上仕候、寒氣甚敷御座候得共、　貴公様益御機嫌能被成御座、珎重御儀奉存ハ、然者爲今度御獻上御殘、櫻島蜜柑・炙鮎且又七嶋鰹節拜受仕、辱次第奉存ハ、御禮爲可申上如斯御座候、恐惶謹言、

朱カキ
享保四年十二月廿八日　松平大隅守繼豐判

進上　中將様

1120

吉貴公御譜中
正文在文庫

覺

一今度川船間尺相改極印打替ハに付ゐ、江戸并關東筋川船ハ何船によらす改を請、極印可受之、

但 江戸船ハ來子正月より同六月迄、在〻に有之船ハ來年中を限、江戸運送之序次第川船奉行役所に船乘行、川船奉行に相達、差圖次第極印可受之、前〻極印受おくれハ船たりといふ共、此度罷出極印可受之、且又江戸運送之序無之船ハ、船數委細書付、御料・私料共に川船奉行に差出置、重ゐ改を請、極印可受之ハ事、

一武家之乘船其外わけ有之ハゐ、跡〻より極印不受船ハ、船數委細書付、川船奉行に相達、帳面に可附置ハ事、

以上

享保四年（朱カキ） 亥十二月

1121

継豊公御譜中
正文在文庫

改年之御慶珎重ハ、仍昨日ハ御出欣然之至存ハ、猶期後喜之節ハ、恐〻謹言、

正月六日　　繼友判

尾張中納言
繼友

松平大隅守殿（在口裏）　御宿所

1122

吉貴公御譜中
正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、
一可專勸農事、
一可徵納國〻年貢事、

右任三ケ條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保五年正月十一日　　吉貴御判

1123

仝上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黄金十兩被獻之ハ、遂披露候之處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

享保五年（朱カキ） 正月十一日

水野和泉守
忠之判

戸田山城守
忠眞判

久世大和守
重之判
井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

御記錄奉行ハ

1124

吉貴公御譜中
正文在文庫

千臺文字之事、

公義ハ御調進之御繪圖ニ者、川内川と銘書有之ハ、御巡見上使より段々ケ書書を以御尋、御答書ニ者千臺川と有之ハ、新田宮(川内)權執印文書之内ニ及千臺と有之由ハ、御繪圖ニ川内と有之、其以後御答書ニ者千臺と有之ハ、千臺改之儀段々相糺ハ得共、其譯不相知ハニ付ゐ、兩樣之文字難被片付譯達　貴聞ハ處、上り御繪圖ニ川内川と銘書有之儀ハ得者、上り御繪圖を大元ニ被相立筈ニハ、依之向後川内之文字を用可申旨此節被　仰出ハ間奉承知、後年紛敷無之樣慥可書留置ハ、以上、

享保五年
子正月廿四日　(島津久貴)内記

1125

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

寫

御記錄奉行ハ

右出水賀志久利大明神を薩州之宗廟と唱來ハ得共、向後ハ薩州之惣社と唱ハ樣ニと被　仰出ハ、

右可申渡ハ、以上、

(朱カキ)享保五年正月　(種子島久基)彈正

1126

吉貴公御譜中
正文在文庫

一筆令啓達ハ、愈御無爲ハ哉承度存ハ、然者今日以上使、我等儀鷹場御暇被　仰出辱仕合御座ハ、此段爲可申述如斯ハ、恐々謹言、

(朱カキ)享保五年二月七日　水戸中將宗堯判

松平薩摩守殿
人々御中

1127

仝上

舊臘之芳簡披覽、弥平安之由、且又參府九月中迄相延、

緩〻可爲休息珎重ゟ、此邊無吴ゟ、謹言、

享保五年二月九日　　基熙

薩摩中將殿

1128

仝上

芳牒披閲、愈平安之由珎重思給ゟ、此方同前ゟ、然共參府延引之事、被蒙　嚴命　畏悦之旨尤之事ゟ、餘期後音ゟ、謹言、

享保五年仲春九　　（花押　№3）

薩摩中將殿

1129

仝上

芳簡披覽、弥清福之由目出、此方無吴ゟ、抑參府延引之事被蒙　恩命、緩〻可爲休息珎重ゟ、　思給ゟ、尚期後音ゟ、謹言、

享保五年二月十一烏　　（花押　№4）

薩摩中將殿

1130

仝上

正文在琉球國國司

公方樣就　御代替、江府被差上ゟ使者、去歳歸國、依之御禮爲可申上、以宮城親方如目錄被差上ゟ付ゐ、以使者致獻上ゟ處、被遂御披露　御奉書相渡ゟ間差越ゟ、難有可被奉承知ゟ、恐惶不宣、

享保五年二月十一日　　吉貴御判

謹上　中山王

1131

仝上

仝上

芳翰令披見ゟ、

公方樣就　御代替、被差上ゟ使者首尾克相仕舞令歸國、大慶之段尤ゟ、因茲高良親方被差越、別幅之通被相饋之入念儀令恰悦ゟ、恐惶不宣、

享保五年二月十一日　　中將吉貴御判

回復　中山王

1132

仝上

仝上

1133

從　國王樣被成下尊書拜見仕ル、
公方樣御代替御祝儀之御使者越來王子事江戸ニ被召列、
公方樣ニ御目見被仰付、御懇之　上意有之、其外結構成
御會釋御暇之節被成　御奉書、御目錄之通拜領之、且亦
越來從者共迄拜領物被仰付、早竟
太守樣以御威光右之仕合難有被奉存ル、依之右之御禮高
良親方を以被申上ル、紙面之趣、
太守樣　隅州樣達　貴聽ル處、被爲成御返書、高良事御
暇被下拜領物被仰付ル、此旨可有洩達ル、恐〻謹言、

享保五年（朱カキ）二月十一日

比志嶋隼人
範房判
種子嶋彈正
久基判
嶋津　李
久武判
嶋津　内記
久貫判

全上
全上

豐見城王子
三　司　官

一筆令啓達ル、然者去春越來王子首尾克歸帆、江戸ニ之
謝恩使宮城親方御當地迄被差上ル付、先例之通次御使者
を以書翰・獻上物等被差上ル段、御老中樣ニ被仰上ル處、
御奉書御返簡被爲成ル、依之宮城事御暇被下拜領物被仰
付ル、委曲宮城より可相達ル間宜有洩達ル、爲其如此ル、
恐〻謹言、

享保五年（朱カキ）二月十一日

比志嶋隼人
範房判
種子嶋彈正
久基判
嶋津　李
久武判
嶋津　内記
久貫判

豐見城王子
三　司　官

1134

繼豐公御譜中
正文在文庫

御狀令披見ル、如承青陽之慶賀珎重ル、
公方樣益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度
被存由得其意ル、猶以御機嫌被相伺之ル、弥御安全之御

事ゟ間可御心易ゟ、隨而鰯一箱被獻之候、各申談遂披露ゟ處一段御仕合ゟ、恐々謹言、

享保五年二月十二日　　水野和泉守忠之判

松平大隅守殿

1135

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、如承新春之慶賀珎重ゟ、公方様益御勇健被成御座、年始御規式可相濟と目出度被存由得其意ゟ、猶以御機嫌被相伺之ゟ、弥御安全之御事ゟ間可御心易ゟ、隨而御樽肴被獻之ゟ、各申談遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

享保五年二月十五日　　久世大和守重之判

松平薩摩守殿

1136

仝上

此よし何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、返〳〵かしく、

正月十一日の御日付にて御ふミ被下ゟ、まつ〳〵一位様御機嫌能成らせられゟまゝ、めてたく思しめし被成ゟへくゟ、扨は冬とし寒中御たつね、一位様よりおくかたへ御目錄之通參らせられゟへハ、かたしけなく思召被成之由ゟて、右之御れいおふせ上られゟ文のやう、ひろう申まいらせゟ得ハ、數〳〵御滿足ニ思しめしゟ、めてかしく、

享保五年　　岩倉

まつ平　　梅園

さつまの守さま

人々御中御返事

1137

仝上

此由何もよく心得ゟて申せとの御事に御座ゟ、なをめてかしく、

正月十八日の御日付ニて御ふミ下され、披露申まいらせゟ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられゟ御事、めてたく思召被成ゟよし、扨は寒中御尋、御同氏大隅守殿へ御目錄之通參らせられゟ得ハ、かたしけなく思召被成ゟよし、右之御禮仰上られゟ文のやう、何も御念入ゟ御事と御滿足ニ思

しめしけ、めてかしく、

享保五年（朱カキ）

松平
薩摩守さま　御返事
人々御中

岩倉
梅園

1138

仝上

此由、何もよく心得けて申せとの御事に御座け、御返〳〵めてかしく、

正月廿五日の御日付こて御ふミ被下、披露申まいらせけ、まつ〳〵

一位様御機嫌よく成らせられけ御事御目出度さ、扨は御手前さま參勤の時分御窺被成け處、當九月中さんふ被成けやうこと仰出されけよしこて、かたしけなく思召させられけよし、右之御禮御ふひてうおふせられけ御事、數〳〵めてたく御満そくこ思しめしけ、めてかしく、

享保五年（朱カキ）

松平
さつまの守さま　御返事
人々御中

岩倉
梅園

1139

吉貴公御譜中
正文在文庫

一筆啓上仕候、益御勇健被成御座珎重御儀奉存け、私御暇之儀付先頃以相良新右衛門（良賢）申上け之處、被遊　御參府御願可被下旨、委細承知仕忝次第奉存け、右之御禮爲可申上差上使、目録之通進上之仕け、猶奉期後喜之時候、恐惶謹言、

享保五年（朱カキ）三月二日

松平大隅守
繼豐御判

進上　中將様

1140

仝上

御札令披見け、

公方様益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤け、將又舊臘妻女歳暮之御祝儀拜領難有由得其意け、依之被差越使者け紙面之趣、各一覽事け、恐〳〵謹言、

享保五年（朱カキ）三月三日

井上河内守
正岑判

松平薩摩守殿

1141

繼豐公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之候間、不及登　城ゟ、以上、

享保五年（朱カキ）三月十四日　　水野和泉守
戸田山城守
久世大和守
井上河内守

松平大隅守殿

1142

仝上

爲改年之嘉義、芳書殊目錄之通被贈之至祝〻〻、弥清福加年不堪欣愉、老拙無吴事ゟ、猶期後慶ゟ、謹言、

享保五年（朱カキ）三月廿一日　　基熙（近衛）

薩摩中將殿

1143

仝上

芳簡披覽、弥平安之由、然者九月中參府之事、被蒙鴻命之旨珎重、此邊無吴事ゟ、謹言、

享保五年（朱カキ）三月廿一日　　基熙

薩摩中將殿

1144

仝上

依新中和門院之事、遠境以使者弔慰之儀不堪感謝ゟ、謹言、（中御門女御、近衛家熙女）

享保五年（朱カキ）三月廿一日　　基熙

薩摩中將殿

1145

仝上

依新中和門院之事、杳路以使者□（本マヽ、弔慰カ）丁寧之儀令感懷ゟ、謹言、

享保五年（朱カキ）三月廿一　　（花押　No.4）

薩摩中將殿

1146

仝上

依新中和門院之事、杳路以使者弔慰丁寧之模樣不堪感謝ゟ、謹言、

享保五年（朱カキ）姑洗廿一　　（花押　No.3）

薩摩中將殿

1147

仝上

三月廿日の御日付にて御ふミ被下、扨は
新准后様(中御門女御、新中和門院)薨御遊ハしゝ御事御聞被成、言語に思召被成ゝ
よし、御悔おふせ上られゝ文のやう、披露いたしまいらせゝ、殊外御愁しやうに思召させられ候得共、弥御機けんよく成らせられゝまゝ、御心やすく思召被成ゝへくゝ、何もよく心得ゝて申せとてゝ、かしく、

享保(朱カキ)五年　　岩倉
まつ平　　梅園
さつまの守さま

1148

吉貴公御譜中
正文在福昌寺

蓋夫爲玉龍刹祖先之布金場爲鴻基漢(眞梁)石屋之大法幢師檀之光輝以傳遠造創之功勲以可看夫以覺照山妙谷禪寺大隨和尚眼衝蒼天氣呑宇宙皓皓乎、其德澤春山華鮮巍巍乎其稜威樹頭月朗速出妙谷幽邃宜續玉阜法燈敬設法席嚴命闔山大衆敷陳禪牀恭入華嚴法界伏願籍是勝因國運昌隆禪林鼎盛四海晏清萬方向化因疏

享保五年庚子三月廿一日

1149

吉貴公御譜中
正文在文庫

行包紙
請疏　　中將吉貴

爲青陽之嘉儀、芳墨且目錄之通惠賜之、親切之至目出令祝納ゝ、弥堅固加年之事承悦ゝ、當方同然ゝ、餘期後慶ゝ、謹言、

享保(朱カキ)五年晩春廿三　　(花押 No.3)
薩摩中將殿

1150

仝上

爲陽春之賀儀、芳墨披閲且如目錄投與之、懇篤之至幾久令祝納ゝ、滋平安超歳之由珎重思給、此地同風ゝ、尚期後喜ゝ、謹言、

享保(朱カキ)五年季春廿四　　(花押 No.4)
薩摩中將殿

1151

吉貴公御譜中
扣寫在右筆所

松平薩摩守口上

私事持病ニ眼霞、其上去年病後身弱罷成手振、書狀・書判別ゐ不自由御座ハ、然ハ　公義勤御老中方ハ以前之通書判仕、脇々ニハ印判用申度ハ、此段御内意申上候、以上、

享保五年　三月

（朱）「右江戸調ニ而、御用番戸田山城守様江御書付ヲ三月廿五日川上五後右衛門（親房）致持参差出ハ處、被請取置、左ハ而同廿七日御留守居被召呼御返答被仰渡ハ事」

1152

仝御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山　御堂御参詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面趣各申談及　高聞ハ、恐々謹言、

享保五年（朱カキ）三月廿五日　　戸田山城守忠眞判

松平薩摩守殿

1153

芳牒披閲、弥平安珎重々々、此方同然ハ、然ハ参府延引之事被蒙嚴命、畏悦之旨尤之事候、餘期後音ハ、謹言、

享保五年（朱カキ）姑洗廿五　　（花押　No.3）

薩摩中將殿

1154

仝上

芳簡披閲、愈勇猛珎重ハ、此方同前ハ、然ゐ當九月中参府之事、被蒙嚴命之由早速被告知之、厚志之至令滿慰ハ、謹言、

享保五年（朱カキ）彌生廿七　　（花押　No.4）

薩摩中將殿

1155

吉貴公御譜中

正文在文庫

芳翰令披見ハ、先頃娘出生付ゐ入御念ハ之段欣然之至存ハ、恐々謹言、

享保五年（朱カキ）三月廿七日　　紀伊中納言宗直判

松平薩摩守殿　御返報

1156

仝上

若宮降誕（桜町天皇）、依之早速以使者目錄之通被贈之、丁寧之至目出令悦納ゟ、猶期後喜ゟ、謹言、

享保（ママ）五年三月廿八日　　基熙

薩摩中將殿

1157

仝上

爲若宮降誕之嘉儀、以使札如目錄被贈與目出令祝納ゟ、謹言、

享保（ママ）五年彌生廿八　　（花押　No.3）

薩摩中將殿

1158

仝上

若宮降誕、依之早速以使者目錄之通投與之、丁寧之至目出令悦納ゟ、餘期後喜ゟ、謹言、

享保（ママ）五年末春廿八　　（花押　No.4）

薩摩中將殿

1159

仝上

なを〳〵

女御様こもたん〳〵御機けんよく御ひたち遊ハしゟとの御事、一入〳〵御滿足の御事ニ御座ゟ、餘寒こゟへとも御てまへさまこも御ふしの御事ゟ、御休息なされゟ半とめてたく思しめしゟ、此よしよく申せとてゟ、かしく、

一位様より申せとの御事御座ゟ、

一位様御機嫌よくならせられゟ、御心易思しめし被成ゟへくゟ、さては上方こて、

女御様

若宮様御誕生遊されゟ御事御めてたさ、

一位様大かたならぬ御悦の御事ニ御座ゟ、此ほとハさふ〳〵御祝儀仰上られ、數〳〵御滿足ニ思しめしゟ、右之御悦仰せられゟ御事まてニ、此御目錄の通參らせられゟ、誠ニ〳〵幾久しく千代萬代までも御はんしやうあそハされゟ御事と、祝入らせられゟ御事ニ御座ゟ、めてかしく、

享保（ママ）五年　　ゟ

松平　　いは倉

さつま守さま　　梅その

人〻御中

1160

仝御譜中

扣寫在江戸家老座

覺寫

元禄銀・寶永銀・中銀・三寶銀・四寶銀通用之事者、來丑年を限り翌寅年より世上通用一切停止たるへくハ、右五品之銀新銀と引替ハ儀者、最前相觸ハ通弥來(本ノマヽ)寅年を限り可申ハ、

右可存此旨ハ、以上、

(朱)「享保五年」子三月

(朱)「右久世大和守様御達被成儀有之ハ間、可罷出旨大久保澤右衛門・三宅甚藏より申來ハ付、則相勤申ハ處、御書付寫ハ様ニと被仰聞、右寫差出由森川理右衛門(武宣)申出ハ、御國元ヱ相達、御請有之筈ニ理右衛門ゟも申達置ハ事、

右御書付之趣御承知被成ハ、御請ヲ五月廿五日岩山半兵衛、久世大和守様ヱ罷出申上置ハ、取次舞田助九郎」

1161

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方様益御機嫌能被成御座、正月廿四日

増上寺　御佛殿　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

享保五年(朱カキ)四月四日　井上河内守　正岑判

松平薩摩守殿

1162

繼豐公御譜中

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之候間、不及登　城ハ、以上、

享保五年(朱カキ)四月十四日　水野和泉守　戸田山城守　久世大和守　井上河内守

松平大隅守殿

1163

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、雌子單物數十到來歡覺候、委曲戸田山城守可述ハ也、

1164

朱カキ
享保五年 五月三日

吉宗公 墨印

薩摩
中將殿

吉貴公御譜中
正文在島津筑後

加冠　島津徳七郎（久道）

宜爲　伊豆

享保五子
五月廿八日
（島津吉貴）
（花押）
No.2

1165

吉貴公御譜中
正文在島津大学

加冠　嶋津牛次郎（久品）

宜爲　大學

享保五子
六月朔日
吉貴公御判

1166

仝上
正文在文庫

御札令披見候、先頃當地火事出來、東叡山　大猷院様御堂炎上之段被承之、被絶言語之由得其意ハ、依之被差越使者ハ紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐々謹言、

朱カキ
享保五年 六月五日

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

1167

吉貴公御譜中

御札令披見ハ、就酷暑之節公方様御機嫌以使者被相伺之ハ、益御安全之御事ハ間可御心易ハ、隨ゐ琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・赤貝鹽辛一器・琉球泡盛酒二壺被獻之ハ、各申談遂披露ハ之處一段之御仕合ハ、恐々謹言、

朱カキ
享保五年 六月廿二日

戸田山城守
忠眞判

松平薩摩守殿

1168

吉貴公御譜中

享保五年 庚子六月二十三日、吉貴發二府城一、述二職于江

都一、家老比志島隼人範房、若年寄名越右膳恒渡、側用人種子島十左衛門時成、表用人鎌田六郎太夫政直等扈從焉、經二九州路及中國路一、八月十一日至二攝州大坂一、同月十八日發二大坂一、泝レ流直至二山州伏見一、於レ是使三名越恒渡・鎌田政直先至二江都一、同月二十二日吉貴發二伏見一、取二途於美濃路・東海道一、九月十二日自二川崎驛一馳、至二江都高輪邸一、此日遂入二芝邸一、於レ是九月十五日、

將軍使下老中水野和泉守忠之來二于我櫻田邸一勞中吉貴之遠來上、同月十九日登レ城、拜二謁

將軍吉宗公一、獻二御太刀一腰・御馬鞍置二匹・御服二十・馬代金五百枚一、家老比志島範房、若年寄名越恒渡亦拜二謁幕下一、各獻二御太刀一腰・御馬一匹・御服三一、

1169

吉貴公御譜中

正文在南泉院

一將軍義輝卿公文　天文廿四年五月六日　栄嘉首座　壹通

一同公文　永祿二年八月十五日　栄嘉西堂　壹通

一將軍義昭卿公文　元亀二年六月廿一日　栄嘉西堂　壹通

一同公（文脱カ）　天正十年六月廿六日　栄嘉首座　壹通

一同公文　天正十年六月廿六日　栄嘉西堂　壹通

右五通者雖爲薩州伊佐郡鶴田郷（薩摩郡）大願寺文書、寺及于廢壞、依之右文書被收置官庫畢、雖然貴寺依爲廢跡相續之地此節所渡置于貴寺也、全可有笥藏者也、仍仰如件、

享保五年庚子六月日　　比志嶋隼人範房判

南泉院

1170

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

口上覺

大清國より琉球ゟ差渡ゞ封王使諸禮式舊例之通相濟、惣人數六百四拾九人、無別條當二月十六日致歸帆ゞ旨、中山王申越ゞ、此段申上ゞ、以上、

（朱）「享保五年」七月六日　　御名

（朱）「右御口上書爰許調ニ被仰付相認、御用番水野和泉守樣ゟ川上五後（親房）右衛門致持參、御用人中村紋左衛門を以差上ゞ處ニ御受

取被成ゟ旨被仰聞ゟ」

1171

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、四月晦日増上寺　御佛殿

御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申談及　上

聞候、恐〻謹言、

享保（朱カキ）五年　七月十二日　井上河内守正岑判

松平薩摩守殿

1172

吉貴公御譜中

正文在南泉院

下〻屋敷壹町五畦

南泉院

門前地

右ハ南泉院僧正依願、下町濱ニ門前地築地御免許ニ付、

郡奉行竿相究差出候帳面之通可致支配之旨、正德四年午

十一月廿四日御家老衆任御引付令支配、寺社屋敷帳ニ書

載候、仍證文如件、

享保五年　臭子七月十八日

蒲生十郎兵衛○

肝付典膳○

堀甚左衛門（興昌）○

嶋津主計○

1173

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、五月八日

東叡山　御堂　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之

趣各申談及　高聞ゟ、恐〻謹言、

享保（朱カキ）五年　七月廿五日　井上河内守正岑判

松平薩摩守殿

1174

繼豐公御譜中

正文在嶋津備中

芳札令披見ゟ、

太守様御機嫌能六月廿三日鹿兒島被遊御發駕ゟ、爲悦示

給欣然之至ゟ、於我等ゟ無吴事ゟ條可易芳意ゟ、謹言、

享保（朱カキ）五年　八月二日　繼豐御判

1175

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、

公方樣御機嫌被相伺之ハ、益御勇健御儀ハ間可御心安ハ、

隨而串蛇一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處一段之御仕合

ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保五年八月三日　水野和泉守忠之判

松平薩摩守殿

島津玄蕃(貴儲)殿

1176

仝上

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被

獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保五年八月三日　水野和泉守忠之判

戸田山城守忠眞判

井上河内守正岑判

松平薩摩守殿

1177

吉貴公御譜中

正文在文庫

御札令披見ハ、久世大和守卒去之段被承之、被絕言語由

得其意ハ、

公方樣御機嫌被相伺之ハ、御安全之御儀ハ間可御心安ハ、

紙面之趣各申談及　上聞ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保五年八月六日　水野和泉守忠之判

松平薩摩守殿

1178

仝上

正文在琉球國國司

芳札令披見ハ、去夏從大清國兩使者對顏祭禮等相濟、其

後兩使城元招請如先規、大明之衣冠即位式禮首尾能相濟

喜悅之旨尤ハ、依之與古田親方被差渡示給趣入念儀ハ、

恐惶不宣、

朱カキ享保五年八月十三日　中將吉貴御判

回復　中山王(尚敬)

1179

繼豐公御譜中

正文在文庫

今度爲年始之佳義使者指下ㄟ、因茲目錄之通贈之ㄟ、弥可爲堅固ㄟ、猶屬使者口上ㄟ也、

享保五年（朱カキ）八月廿三日　　基熙

松平大隅守殿

1180

仝御譜中

正文在琉球國國司

爲年首之嘉儀、被差渡使簡殊別錄表贈給之入念ㄟ之段令祝着ㄟ、猶期後喜之時ㄟ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）九月朔日　　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1181

仝上

芳墨令披閲ㄟ、去歲當山親雲上乘船、於五島令破損長崎ニ被送越ㄟ之處、彼地無吳儀歸帆被仰渡ㄟ付ゐ、以使簡目錄之表饋給之入念儀存ㄟ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）九月朔日　　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1182

仝上

芳翰令披見ㄟ、當年中將殿參府之時節御延引付ゐ、爲歡與座親方被差渡、太刀・馬代并目錄之表被相贈之、入念儀忻然之至ㄟ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）九月朔日　　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1183

仝

芳札令披見ㄟ、其國平安弥無爲之由珎重存ㄟ、我等無恙ㄟ、入念示給殊從大清賜物之緞子三卷被相贈之、懇篤之至ㄟ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）九月朔日　　大隅守繼豐御判

中山王　回章

1184

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀、小袖五到來歡覺候、委曲井上河内守可述ㄟ也、

朱カキ
享保五年　九月七日

吉宗公墨印

薩摩
中將殿

在包紙
薩摩
中將殿

1185

継豊公御譜中
正文在文庫

覺

爲部屋栖料 高五萬石 差分之ハ間、萬端被入念、所帶方相續ハ樣可被心懸ハ、尤家督方と不致混雜樣役人共ニ堅可被申付之者也、

享保五年九月十五日　　薩摩守御判

松平大隅守殿

1186

吉貴公御譜中
正文在文庫

明十九日五半時登　城參勤之御禮可被申上ハ、以上、

朱カキ
享保五年　九月十八日

水野和泉守
戸田山城守
井上河内守

1187

仝上

家來二人　御目見被　仰付ハ間、召連可被罷出ハ、以上、

朱カキ
享保五年　九月十八日

1188

吉貴公御譜中
正文在琉球國國司

一筆令啓達ハ、封王使御申請付ゐ段ゝ御訴被仰上ハ處、御願之通被仰付、

太守樣以御威光、舊例之禮式首尾好被遂行、御馳走旁無殘所相濟、重疊難有次第被思召ハ旨、國王樣相良權太夫旅宿ニ御出、被仰達ハ趣委細致承知、右御禮御口上書之通達　貴聞被聞召置ハ、此旨宜有洩達ハ、恐ゝ謹言、

朱カキ
享保五年　九月廿五日

種子嶋彈正　久基判
嶋津　杢　久武判

1189

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

豐見城王子　嶋津　内記

三　司　官　久貫判

口上覺

同氏大隅守今年私國元ニ初ゐ之御暇被下度奉願ハヽ、此旨可然樣奉賴ハヽ、以上、

（朱）「享保五年」九月廿五日　（吉貴）御名

（朱）「右御口上書ニ此御名書と致一ツニ、美農ニ而常々御口上書之通ニ包、九月廿五日御留守居川上五（親房）後右衛門を以小笠原（廣高）新九郎樣ニ御願被差出也」

子二十歳　松平大隅守

1190

仝上

正文在文庫

明廿八日於東叡山御法事初日付ゐ、月次之御禮無之ハヽ間、不及登　城ハヽ、以上、

（朱）「享保五年」九月廿七日　水野和泉守

1191

紹豊公御譜中

松平薩摩守殿　戸田山城守　井上河内守

今茲享保五年庚子九月二十五日吉貴上ニ書於　官府ニ請ニ嗣嫡繼豐初而到ニ于薩府ニ（事詳吉貴譜中）蒙ニ允容ニ、同年十月二十七日大樹吉宗公使下ニ　上使戸田山城守忠眞ニ來中櫻田第上、賜ニ繼豐初而歸國之告ニ、因ニ流例ニ拜ニ領時服五十ニ、昱二十八日繼豐登レ營奉レ拜ニ謝之ニ、時下ニ懇篤之　尊言ニ、貺ニ龍蹄一匹ニ、是故十一月五日發ニ江都芝邸ニ、家老北鄕作左衛門久嘉、守役相良新右衛門長賢、用人役三雲新兵衛定恒・高橋外記種長等扈ニ從之ニ、經ニ東海之驛路ニ、同月二十日到ニ城之伏見ニ、同二十四日下レ河而著ニ攝之大坂ニ、同二十八日出ニ大坂ニ、經ニ山陽道ニ、十二月十八日到ニ長之赤間關ニ、因ニ風波不順ニ滯留、同二十日駕レ舩著ニ豐之大里ニ、取ニ陸路於九州ニ、同二十九日到ニ西薩出水之假館ニ、翌六年辛丑正月元朝發ニ假館ニ、同月五日入ニ廐府四酡館ニ、今般第宅新成故、直成ニ移徙之賀儀ニ矣、

以下六年ニアリ參照スヘシ

吉貴公御譜中

正文在文庫

家來石谷左平次事、前々より町田家之庶流石谷名字之由こゝ、實名久之字用來ゝ得共、出所相知不申ゝ、右之通ゝ得ゝ御支流とゝ究ゝ難申御座ゝ、然共當分之通石谷爲名乘實名相改召置申度ゝ、已後證書等見出ゝゝ其節ゝ御吟味次第被仰付度存ゝ、以上、

享保五年（朱カキ）十月六日　　嶋津淡路守（薩久）

比志嶋隼人（範房）殿

1193

仝上

覺

石谷左平次親九郎右衛門久方、左平次久一と實名申ゝ、左平次儀三歳之時九郎右衛門致死去ゝ付、其以前之儀系圖所持不致相知不申ゝ、以上、

享保五年（朱カキ）十月六日

1194

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

口上覺

松平薩摩守芝居屋鋪差迫候付、島津淡路守（薩久）下屋敷地續故薩摩守一所之儀こゝ得ゝ借置一圍仕置ゝ、寅年・午年・戌年三度琉球人致參府ゝ節ゝ右屋敷ゝ差置漸御用相勤ゝ、今以借置申ゝ之間右之段御屆申上ゝ、

（朱）「享保五年」子十月　　松平薩摩守内

川上五後右衛門

（朱）「右書付十月十三日新地奉行小管伊右衛門（猪王親）樣ゝ今井平左衛門致持參、御用人中里城右衛門を以差出ゝ處、書付御受取ゝ由五後右衛門申出ゝ」

1195

仝上

正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ゝ間、不及登　城ゝ、以上、

（朱）「享保五年」十月十四日　　水野和泉守

戸田山城守

井上河内守

松平薩摩守殿

1196

吉貴公御譜中

正文在文庫

重陽之御内書可相渡ハ間、明日五半時　御城ニ家來可被差出ハ、以上、

享保五年（朱カキ）十月廿日　井上河内守

松平薩摩守殿

1197

仝上

御記錄奉行ニ

嶋津淡路守殿御家來石谷左平次事、石谷名字之儀ニ付淡路守殿方別紙御書付之通被仰聞ハ、町田家庶流ニ而ハ哉、於御國元相紛可申ハ、町田家庶流ニ而無之ハ而茂以前方石谷名字爲名乘來事ハ得共、石谷名字ハ御庶流ニ而無之ハ而茂、右躰之名字共可有之事ハ間、致吟味出所不相知ハ、今迄之通ニ而可差置ハ、久之字以前共爲名乘旨ハ得共、此儀共向後不用樣ニ可仕旨申達置ハ、御書付二通相渡ハ、以上、

享保五年（朱カキ）子十月廿二日　（比志嶋範房）隼人

1198

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

松平薩摩守口上

同氏大隅守今度私國許ニ初而之御暇被下置、去ル五日發足仕ハ、薩州ニ共漸來正月着可仕ハ、先例國元より參勤之時節相伺申儀御座ハ得共、此節共道中より當年相伺可申ハ哉、此段得御差圖ハ、以上、

享保五年（朱カキ）十一月　松平薩摩守使者

岩山半兵衛

1199

仝上

扣寫在江戸家老座

大隅守參勤時節伺別紙之通得御差圖ハ、近國之御方共御暇御給御歸國被成、翌年被相伺御方茂有之ハ得共、薩摩守參勤御暇之儀共、例年六月ニ而ハ故、國元ニ致着ハ段以使者申上ハ、左ハ而其年十二月相伺、例年之通六月參府被仰渡ハ節共、國元四月上旬致出足事ハ、此節大隅守御暇時節違申上ハ故、薩摩守參勤時節伺之通國許ニ致着候段、使者を以申上ハ、以後伺ハ得共來年二月比相伺筈ハ、五六月比致參府ハ樣ニと被仰渡ハハ、、右之通之事

ハ故、間ニ合兼可申と存ハ、御尋申上不及、道中ゟ伺可申儀ニハ得共、致着御禮之使者不差上内、參府時節伺ハ例無御座ハ故、此段御尋申上ハ、以上、

（朱）「享保五年」十一月

（朱）「右者御用番水野和泉守様江御留守居岩山半兵衛罷出、御書付差出、且又物語之趣茂相達ハ處、委細ニ得其意、則和泉守様被聞召御請取置被成ハ、追而御挨拶可有之旨御用人赤星弥三左衛門ニ而被仰聞ハ、別紙之書付も弥三左衛門相受取置ハ、但明日八ツ比罷出ハ様ニと申ハ付、私又明日罷出へき由申達置ハ、

子十一月九日

右之通可罷出旨ニハ故、十日八後岩山半兵衛罷出ハ處、御用人赤星弥三左衛門ニ而被仰渡ハハ、御中途より御時節可被相伺由被仰渡ハ、此外何そ被仰渡儀者無之旨、弥三左衛門より承ハ段、半兵衛申出達貴聞置ハ事」

1200

吉貴公御諳中

正文在文庫

今朝御馬二疋被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保五年十一月十五日　　忠之判

松平薩摩守殿　　在口裏　水野和泉守忠之

1201

仝上

なを〳〵相替らす御きけん御うかゝい被成、御悦思しめしハ通何もよく申せとてハ、かしく、

十月廿八日の文くたされハ、ことの外寒し參らせハへとも

公方様

一位様御機嫌よく御座あそハされ、御めてたく思しめし被成ハよし、然ハ御てまへさま御領内のさくら嶋ミつかん・御看御もくろくの通御あけなされ、披露いたしまいらせハ得ハ、萬〳〵年もとめてたく御満足ニ思しめしハ、此よし何もよく申せとてハ、めてかしく、

ゟ

朱カキ享保五年

松平　御返事　いは倉

さつま守さま　人〻御中　梅その

1202

仝上

寫正文在文庫

寫

其方事、平岡之家號新規ニ被仰付ㇾ故、姓不相極ㇾ、依之先比願被申出趣有之、達　貴聞之處、家號新規ニ雖被仰付ㇾ、姓之儀ハ兄島津内藏家用來ㇾ藤原之姓ニ可被仰付旨、今度被仰出ㇾ、此段致承知、到于子孫無窮可被相傳者也、仍如件、

享保五年子十一月廿二日　嶋津（久武）壱判

平岡八郎（之品）太夫殿

1203

吉貴公御譜中

正文在文庫

なを〳〵此よし何もよく申せとの御事ニ御さㇾ、めてかしく、

十一月十八日の文下されㇾ、まつ〳〵ことの外寒しまいらせㇾへ共、

一位様御機嫌よく御座あそハされㇾ、御心易思しめし被成ㇾへくㇾ、さては先の比、

一位様より御たつねまし、御奥かたへ御目錄の通參らせられㇾへハ、御てまへさまかたしけなく思しめしなされㇾよし、御禮仰あけられ、御ふミのやう披露いたしまいらせㇾへハ、御念入參らせられㇾ御事と御滿足ニ思しめしㇾ、めてかしく、

享保（朱カキ）五年

松平　岩倉

さつま守さま　梅園

人〻御中御返事

1204

繼豐公御譜中

正文在文庫

猶〻本文之趣御老中相談之上被仰渡筋ニㇾ得共、達上聞之儀ニㇾ由致承知ㇾ、此儀ハ別ㇾ隱蜜（密）之儀ニㇾ間、作左衛門（北郷久嘉）、新右衛門（相良長賢）迄ニ被申聞、外沙汰被致間敷ㇾ、以上、

一筆令啓ㇾ、弥御無吴可爲旅行珎重存ㇾ、於爰元無別條ㇾ、然ハ拙者隱居願之御内意、別紙通以小野次郎（忠）右衛門殿、月番戸田山城守（忠眞）殿ニ去九日差出ㇾ處、同十一日右次郎右衛門殿山城守殿宅ニ被爲呼被　仰聞ㇾハ、右願之儀來年迄ハ間ㇾ有之事ㇾ間與得致養生、快無之ㇾハ來年相

願可然之旨被相談ゟ由被仰渡致承知ゟ、爲納得此段申越ゟ、恐々謹言、

朱カキ
享保五年十二月十三日　　薩摩守
吉貴　御印

松平大隅守殿
御宿所

1205

継豊公御譜中
正文在文庫

口上覺

私儀近年病身罷成ゟ處、去年道中こゟ相煩ゟ以後、痞強度々眩暈差發ゟ付、登　城仕ゟ時分ゑ別ゟ心遣仕ゟ、右之通御座ゟ故、不時之勤方被　仰付ゟゟも難相勤躰罷成ゟ、依之來年同氏大隅守參府仕ゟゑ、私隱居、大隅守に家督被仰付被下ゟ樣奉願度ゟ、尤其節願書差出可申ゟ得共、右之心懸等仕ゟ付、唯今御内意相伺申ゟ、以上、

朱カキ
享保五年十二月　　名

1206

継豊公御譜中
正文在文庫

御狀令披見ゟ、公方樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ゟ、將又參府時分之儀以使者被相伺之ゟ、及上聞ゟ處、來年五月中可致參府由被　仰出ゟ條可被存其趣ゟ、恐々謹言、

朱カキ
享保五年十二月十四日　　水野和泉守
忠之判
戸田山城守
忠眞
井上河内守
正岑判

松平大隅守殿

1207

吉貴公御譜中
正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鰷一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

朱カキ
享保五年十二月十八日　　忠眞判

松平薩摩守殿　　在口裏
戸田山城守
忠眞

1208

継豊公御譜中

正文在琉球國國司

爲年首之嘉儀、被差渡使簡殊目錄之表贈給之、入念ハ之段令祝着ハ、猶期後喜之時ハ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）十二月廿五日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1209

仝上

芳墨令披閲ハ、爲御代替御祝儀、去歲江府ニ被差上使者ハ之處、結構被　仰付首尾好相仕舞之、歸國大悅之由ニヲ、被差渡使翰別錄之通贈給之、入念儀忻然之至ハ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）十二月廿五日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1210

仝上

芳札令披見ハ、其元弥平安之由珎重存ハ、於我等無恙ハ、入念示給、殊從大清賜物之織物二卷被相贈之、懇篤之至ハ、恐惶不宣、

享保五年（朱カキ）十二月廿五日　大隅守繼豐御判

中山王

回章

1211

仝上

正文在文庫

御狀令披見ハ、就寒中公方樣御機嫌以使者被相伺之ハ、益御安全之御事ハ間可御心易ハ、隨ヲ鰹節一箱被獻之ハ、各申談遂披露ハ處、一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

享保五年（朱カキ）十二月廿六日　戸田山城守忠眞判

松平大隅守殿

1212

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖五重到來欣覺ハ、委曲水野和泉守可述ハ也、

享保五年（朱カキ）十二月廿七日　吉宗公墨印

薩摩

中將殿

吉貴公御譜中
正文在文庫

覺

一下田ハ湊口よろしからさるに付、風波之節難乗入、或ハ舟破損におよひ、其上乗おとしの舟も多く、旁諸廻船之者共難儀仕ゟ由相聞ゟに付、御吟味之上浦賀湊に御番所被仰付ゟ事、

一諸廻船之儀ハ、米穀を始其外炭・薪・材木等無滞留運送ゟ様に被　仰出儀ゟ間、向後植木・庭石其外遊道具之類積廻し不申筈にゟ條、此旨船持共ゟ可申付ゟ事、

右御番所替りゟに付、判鑑等引替、其外之儀に付ゐも浦賀奉行ゟ可聞合ゟ事、

以上

享保（朱カキ）五年　子十二月

（表紙）

吉貴公

繼豐公　享保六年

追錄舊記雜錄　巻五十六

1214

繼豐公御譜中

今茲享保五年云々、十一月五日發二江都芝邸一云々、十二月二十九日到二西薩出水之假館一、旦六年辛丑正月元朝發二假館一、同月五日入二麑府四酡館一云々、以上前冊ニアリ畧ス、參照スベシ

茲日使下二番頭役川上縫殿久盤一爲二謝恩使一赴中江都上、經二九州之驛一、到二豐之小倉一、駕レ船著二坂津一、泝レ河歷二東海道一、同年二月十日著二江都芝邸一、同月十五日久盤候二執政水野和泉守忠之・井上河内守正岑・戸田忠眞、若年寄大久保長門守教重・大久保佐渡守常春・石川近江守政郷（總茂）各之第一、勤二繼豐之使節一、同二十八日久盤登レ營、以二繼豐之獻物綸子二十卷・干鯛一匣・鯣一匣・御樽一荷一獻二上之一、拜二謁大樹吉宗公一、奉レ謝二繼豐初而歸レ國之恩篤一、内藤丹波守政森奏二達之一、久盤亦親自獻二上御太刀一腰・馬代白銀一枚・時服三領一、奉レ拜二謁公一、酒井修理大夫忠音奏二達之一、乃退去矣、三月朔日久盤重登レ營、水野忠之出二席于檜之間一、手自附下與貺二繼豐一之奉書於久盤上、且拜二戴御時服三領・道服一領一、土井伊豫守利意執二達之一、乃奉レ申二謝之一退去矣、同月十九日使節事畢而久盤出二芝邸一、四月七日到二大坂一、同月二十一日登二旅館一繼豐為參覲著大坂復命、五月二日自二大坂港一駕レ船、同月十九日還二薩府一、

1215

吉貴公御譜中

正文在文庫

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨、可有沙汰之狀如件、

享保六年正月十一日　吉貴御判

1216

仝上

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐々謹言、

享保六年（朱カキ）正月十一日　正岑判

松平薩摩守殿　井上河内守（在口裏）正岑

1217

継豐公御譜中

正文在文庫

爲年頭之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被獻之ゟ、遂披露候之處一段之御仕合候、恐々謹言、

享保六年（朱カキ）正月十一日　水野和泉守忠之判　戸田山城守忠眞判　井上河内守正岑判

松平大隅守殿

1218

仝上

正文在文庫

年始之御吉祥珎重多幸、猶更不可有休期御座候、先以貴國御靜謐、益御機嫌能被成御重歳ゟ之旨恐悦奉存ゟ、此等之御祝儀以當間親方申上ゟ、依之別錄之通進上之仕候、猶奉期後喜之節候、誠惶誠恐敬白、

正月十一日　中山王尚敬判

進上　侍從樣

1219

吉貴公御譜中

享保六年辛丑正月二十二日、上使朝倉甚十郎景孝來二芝邸一、自二大樹吉宗公一、拜下領貴應所二擊執一之鶴一雙上、時吉貴羅二微恙一故、島津但馬守忠就（雅）代二吉貴一登レ營、於二帝鑑間一憑二目附平岡市右衞門資明一、奉レ申二謝之一（此日奏者衆退席故及于茲）、且詣二執政各之第一、亦奉レ申二謝之一（大梅綱吉公之時見レ憐下天下憐レ生類之法令上、自レ是由三鶴鳴雲雀於侯伯一、去載改而復二舊範一、後倫レ之、）鳥居丹波守忠利之妹於糸者、吉貴之表妹也、初嫁二牧野備後守成央一、成央卒後雖レ歸二于忠利之家一、自レ幼以下被レ養二育于吉貴之室一之故上、享保六年辛丑正月二十六日吉貴訟二之官府一、同二月三日執政井上河内守正

岑傳二 台命一、以爲二吉貴之養女一也、同月四日改二名於喜代一、其後嫁二阿部伊勢守正福一、

1220

扣正文在右筆所

口上覺

鳥居丹波守妹事父方之從弟ニ而、牧野備後守妻ニ而ハ處、(牧野成央)備後守不幸之後丹波守所ゟ引取置ハ得共、幼少より私所ニ而養育爲仕置儀ハ故、此節丹波守ゟ致内談、私養娘仕度ハ、此段相願申ハ、以上、

享保(朱カキ)六年 正月 (島津吉貴)松平薩摩守

右正月廿六日被差出之

1221

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳札令披見ハ、從大清國兩使者被差渡ハ處、封王之法式一代之大禮、如先規首尾能相調招請之次第諸事無故障相濟、兩使致歸帆滿足之旨尤ハ、依之以北谷王子(朝篤)目錄之表贈給之、入念儀欣然之至ハ、恐惶不宣、

享保(朱カキ)六年二月九日 中將吉貴(御判ナシ)

謹上 中山王

1222

繼豊公御譜中

正文在文庫

御狀令披見ハ、如承青陽之慶賀珎重ハ、公方樣益御勇健被成御座、年始之御規式可相濟と目出度被存由得其意ハ、猶以御機嫌被相伺之ハ、弥御安全之御事ハ間可御心易ハ、隨而鰯一箱被獻之候、各申談遂披露ハ處一段御仕合ハ、恐〻謹言、

享保(朱カキ)六年二月十二日 水野和泉守忠之判

(島津繼豊)松平大隅守殿

1223

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

御筆寫

家老直申渡

來迎院ゟ大隅正八幡之別當寺彌勒院(給良郡)住職明日可申付ハ、來迎院(給良郡)ゟ此内之通兼帶ニ可致ハ、彌勒院之格式ゟ宮内之正興寺之格式ニ而、年頭禮之節ゟ正月廿八日着

座、門主之座席之次第ハ正興寺之上ニ可申付ハ、院家衣之事ハ上野ハ功德院迄申達、大僧都ニ御免有之ハ樣可致ハ、此一首尾之事ハ首尾濟ハ迄此方ハ可申ハ、右之通ニ而ハ南泉院(鹿兒島)之觸下ニいたしハ間、南泉院ハ此段可申渡ハ、末寺ニ而ハ無之ハ、

享保六年(朱カキ)二月十八日　右膳(名越信濃)ハ

1224

仝上

正文在彌勒院

寫

來迎院

右ハ大隅正八幡之別當寺彌勒院住職被仰付ハ、來迎院ハ此内之通兼帶可致ハ、彌勒院格式之儀ハ着座門主被仰付ハ、年頭御禮之節ハ正月廿八日、座席之次第ハ大龍寺之(本マヽ)上ニ被仰付ハ、院室願之儀ハ上野へ可申達ハ、且又此度大僧都ニ御免有之ハ樣可致ハ、右之通ニ而、南泉院觸下被仰付ハ、末寺ニ而ハ無之ハ、此段承知可仕ハ、以上、

右之通享保六年ヶ月二月十八日ニ、江戸芝御書院御取附之間ニ而、名越右膳殿ゟ被仰渡ハ、

1225

仝御譜中

正文在文庫

歲暮之　御内書可相渡ハ間、明日五半時　御城ハ家來可被差出ハ、以上、

享保六年(朱カキ)二月廿日　水野和泉守

松平薩摩守殿

1226

吉貴公御譜中

正文在彌勒院

大隅州桑原郡鷲峯山彌勒院者、薩隅日三州主兼領琉球大守羽林源朝臣吉貴再建廢寺、捨田祖貳百斛爲香積資、因而應大守需、永免準當門之院室、見住憲英補大僧都者、益祈領主之榮福、整本宗之綱維、精修勤行不可怠緩之旨、輪王寺一品宮御氣色之處也、仍下知如件、

享保六年二月廿四日　功德院大僧都尚志判

住心院大僧都覺濵判

1227

仝上

正文在國分宮内彌勒院

（島津吉貴）
（花押 No.2）

高貳百斛

右正八幡爲社領所寄附之也、全可領知之狀如件、

享保六年二月廿七日

正八幡宮別當

彌勒院

1228

仝上

正文在文庫

御記錄奉行ニ

國分宮内別當寺彌勒院此節御再興、來迎院ニ住職被仰付、大僧都院家之格ニ被仰付ル、

一右通被　仰付ル付ヲ、彌勒院より

御膳進上仕ル付、於　御前院家衣拜領被仰付ル、然ハ南泉院へ院家衣被下ル節ハ、寺社奉行御使者ニヲ被下ル歟と御覺被遊ル、彌勒院ハ南泉院觸下之事ル得ハ、同前ニハ不被仰付ル、院家衣之儀ヲ此節迄ハ自分調可致ル、

一彌勒院住職之御禮并大僧都院家衣御免御禮、上野　御門主樣又ハ役者中ニ彌勒院より爲御祝物、白銀目錄遣事ル、是ヲ此節迄ハ御物調ニヲ被下ル、已後之儀ハ寺領ヲ貳百石有之事ル得ハ自分調被仰付ル、乍然高原神（西諸縣郡）德院色衣成御禮之節、御物調被仰付事ル、ハ、彌勒院事ヲ神德院同前ニ可被　仰付ル、

右之通被　仰出ル間、承知可仕置旨可申渡ル、以上、

享保六年（朱カキ）二月　右膳

1229

繼豐公御譜中

正文在琉球國司

芳翰令披見ル、如來意我等去冬初ヲ之御暇被仰出ル、爲祝詞被差渡摩文仁按司、殊太刀一腰・馬代白銀百兩并別錄通贈給之、入念儀令祝着ル、恐惶不宣、

享保六年（朱カキ）二月廿六日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1230

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

一國分宮内正八幡別當寺來迎院ニ再興被仰付ル儀付ヲ

ざ、先達ゐ委曲申越趣有之ゟ、依之東叡山末寺廢寺之號功德院ゟ相尋ゟ處、彌勒院・正學院・正願院此三ケ寺古帳ニ相知有之ゟ通申來ゟ付、達

貴聞ゟ處、右三ケ寺之内彌勒院再興被　仰付、來迎院ゟ住職被仰付ゟ條可申渡ゟ、左ゟゐ東叡山末寺ニ被仰付、大僧都院家衣御免之格ニ被成度段、功德院迄可申越旨、別紙之通被仰出ゟニ付、去月十八日來迎院ゟ彌勒院住職被仰付ゟ段、於御取附之間右膳直申渡、御請御禮申出ゟ、且又右　仰出之趣を以、功德院・住心院ゟ私共ゟ以手紙申越ゟ處、同役申談遂披露、追ゐ可及御返答旨申來ゟ、然處去月廿四日右兩寺より書付を以被申越ゟざ、大隅國正八幡社僧彌勒院再興被仰付、寺領貳百石御寄附、來迎院ゟ住職御申付、依之當山御末寺被仰付、寺格大僧都ニゐ院家衣御免格式宜被成ゟゐ、八幡ゟ相付ゟ衆徒等支配ゟ樣被成度段、則

御門跡樣ゟ申上ゟ處、重キ事ゟ得共、

太守樣御願故、御願之通被　仰出ゟ旨申來ゟ付、右之紙面達　貴聞ゟ處、被遊御滿悅ゟ、

一右之通被仰付ゟ付、彌勒院ゟ御膳進上仕ゟ處、於　御前院家衣拜領被　仰付ゟ、然ざ南泉院之儀願王院僧正官ニゐゟ故、院家衣被下ゟ儀ざ無之ゟ、以後住替之節ハ院家衣被下筈ゟ、其節ざ寺社奉行御使者ニゐ院家衣被下格式之　思召ニゟ、彌勒院ざ南泉院觸下之事ゟ得ざ、同前ニざ不被仰付ゟ、以後住替之節ざ自分調ニ被仰付ゟ、

一彌勒院住職之御禮并院家衣之爲御禮、御門主樣ゟ之進上物且又役者中ゟ之進覽物、別紙之通此節迄ハ御物調ニゐ被下ゟ、彌勒院事寺領ゑ貳百石被附置事ゟ得ざ、以後之儀ざ自分調ニ被仰付ゟ、乍然高原神德院色衣成御禮之節、御物調ニ被仰付事候ハヽ、彌勒院事ゑ神德院同前ニ可被仰付ゟ、

一右付ゐざ從　太守樣ゑ爲御禮、　宮樣ゟ紗綾十卷御進上、兩役者ゟ紗綾五卷ツヽ被遣之ゟ、

右之通彌勒院住職來迎院ゟ被仰付、東叡山末寺ニゐ院家衣御免之格ニ被　仰付ゟ段、且又彌勒院寺格之儀共、別紙　仰出之趣御家老中承知仕、寺社奉行ゟ申渡、南泉院ゟざ寺社奉行ゟ申渡、勿論地頭所其外可承座ゝゟ申渡ゟ樣、可申越旨　御意ゟ條、被奉得其意可被申渡ゟ、右別當寺御再興ニ付ゐざ、正月十六日便段ゝ爲申越置趣もゟ得ざ、其許ゟ之御返答有之ゟ、以後被仰付筈之

儀ニも可有之ヶ得共、別紙申達ヶ通、去月十七日ゟ御
國元御用不被聞召上筈ニ被　仰出置ヶ譯ゑ有之ヶ故、
右之通被仰付御事歟と存ヶ、此段ゑ爲御心得申達ヶ、
來迎院ハ彌勒院住職被仰付ヶ段申渡ヶ書付寫一通、私
共より執當衆ハ申越ヶ手紙寫壹通、右之則答一通、院
家衣御免付ゐ執當衆ゟ之書付一通、且又　仰出御筆之
寫壹通、彌勒院より
御門主樣ハ進上物拜領被仰付ヶ段申渡ヶ書付寫壹通、
爰元御記錄奉行ハ申渡ヶ書付一通、以上七通相添差越
ヶ條、右御再興付ゐ之一巻其元ハゑ記置ヶ樣可被申付
ヶ、以上、

但別當寺再興被仰付、來迎院ハ住職被仰付ヶ段ゑ、此
節御中途ハゑ申上事ヶ、是又爲御存申達ヶ、以上、

享保六年三月朔日　　名越右膳（恒愛）
　　比志嶋隼人（範房）

嶋津内記（久貫）殿
嶋津（久武）李殿
伊集院藏（久矩）人殿
北郷作左衛門（久嘉）殿

1231

繼豐公御譜中
正文在文庫

種子嶋彈（久基）正殿

御狀令披見ヶ、
公方樣益御機嫌能被成御座、恐悦旨尤ヶ、將又今度初ゐ
被下御暇、其上御馬并時服拜領重疊難有由得其意ヶ、國
元到着付ゐ、爲御禮以川上縫（久磐）殿、綸子二十巻・御樽肴被
獻之ヶ、遂披露ヶ處　御前ハ被召出之、入念ヶ段御喜色
之御事ヶ、恐〻謹言、

朱カキ
享保六年三月朔日

水野和泉守
忠之判
戸田山城守
忠眞判
井上河内守
正岑判

松平大隅守殿

1232

吉貴公御譜中

享保六年辛丑二月九日未刻、自二江府四谷鹽町一失火、風
強餘焔延而移二片町市廓一、遂及二高輪第宅一悉燒失、長局

及社軍司長屋亦大半罹レ災、纔餘燼存矣、

仝上

寫正文在家老座

二月九日四谷筋より出火有之、夫より段々ニ曉(ママ)通片町ハ燒出、高輪表御門ハ火相掛り、折節風強防留難成、御家之分御類燒、長局少々社軍司長屋及纔相殘候由、苦々敷御事奉存ル、乍然芝御屋敷無御別條、此上之御仕合無御座ル、右付テ去惣出仕ニ及不及由被申越ル付、此段各樣迄申越候、以上、

享保(朱カキ)六年三月十三日　　種子嶋彈正

北郷作左衞門

伊集院藏人

嶋津杢

嶋津内記

嶋津將監

比志嶋隼人殿

名越右膳殿

寫正文在家老座

於糸樣御儀、御内々去

太守樣(島津吉貴)御養娘ニ被成置ル得共、表立テ御弘無之付テ、今度御願之上、二月三日御勝手次第可被成旨、井上河内守樣ヲ被仰渡、御滿悦被　思召ル、右付翌四日嶋津但馬守(忠雅)殿　御名代ニテ御老中樣ハ之御禮相濟ル、御願書ヲ及被差越ル、此方ニテ御取持之儀於兎樣御同前ニ可相心得旨被　仰出ル、且又　御名之儀　御前樣より於喜代樣と御改被成ル樣ニと被　仰進、先月四日より其通ニ御改被成ル、右付テ　隅州樣(綱豐)　信證院樣(江田五兵衞重國女)(名越磨樣(恒渡妹、綱豐生母)より御祝(綱貴側室)物被進ル儀、其外委細被申越段致承知候、則　隅州樣　信證院樣(久守)　於須磨樣ハ去義岡右京より被申上ル、兵庫殿(久年)・周防殿(久濟)ニ及被申越ル通ニ申達ル、玄蕃(貴濟)殿先月廿八日爰元出足被成ル間尤申渡ニ不及ル、右付テ御祝儀今日之便ニ被仰進ニテ可有御座候、

一右付御役人以上之面々御祝儀申上相濟ル、

一右御養娘御免之儀去、御領内何れ及承知仕可然と申談、惣通達ニテ申渡ル、且又於喜代樣と御名替付テ去、下々ニ去右之名附居候者及可有御座ル間、名相改候樣申渡ニテ及可有御座ル哉、又去右躰之者去漸々承附次第

相改候様、支配頭より申聞候筋こゝ可有御座哉、右通申談候得共、諸外城迄ゝ廣相掛儀ハ得ゝ、爰元こゝゝ難決候付申越事ハ、如何可被仰付哉、追ゝ御到來次第可申渡ハ、御返答爲旁申越候、以上、

享保六年（朱カキ）三月十三日

嶋津内膳（久兵）
種子嶋彈正（久基）
北郷作左衛門（久嘉）
伊集院藏人（久旭）
嶋津丞（久武）
嶋津内記（久貫）

比志嶋隼人（範房）殿
名越右膳（恒渡）殿

1235

継豊公御譜中
正文在文庫

一筆令啓ハ、弥御無吳弥重存ハ、我等不快今以同篇こゝ頃日物覺薄ハ、然共　公義御用筋付ゝゝ今程可致差圖ハ、其外家中諸用迄聞ハゝゝ養生之障相成ハ故、向後貴殿可被相計ハ、右付ゝゝ隼人・右膳ゝ委曲家老共へ申越ハ、爲納得如斯ハ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）三月十六日

薩摩守吉貴（御印）

松平大隅守殿
御宿所

12 6

継豊公御譜中
正文在文庫

御狀令披見ハ、公方様益御機嫌能被成御座、正月十日東叡山　御堂　御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ハ、紙面之趣各申談及　高聞ハ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）三月廿二日

戸田山城守忠眞判

松平大隅守殿

1237

吉貴公御譜中
正文在文庫

尊書拜見仕ハ、弥御安全被成御座、弥重御儀奉存ハ、御不快今以御同篇被成御座、頃日御物覺ゝゝ薄御座ハ得共、公義御用筋付ゝゝ今程可被遊御差圖ハ、其外家中之諸用向後私可承之旨被仰下趣承知仕ハ、未無功御座ハ得ゝ則御請難申上奉存ハ得共、御保養之御障こ罷成御事之由ハ

間、御斷申上度儀差扣、先畏御請申上ゟ、尤不及了簡儀耳可有御座ゟ條、左樣成節ゟ時〻可奉得御差圖ゟ、右付ゐ家老共ゟ隼人・右膳より申越ゟ段ゑ委曲相達申ゟ、陸ゐ私事無恙昨日筑前之内藍嶋迄通船仕ゟ、參府之節期尊顔可申上候、恐惶謹言、

朱カキ
享保六年四月六日　　松平大隅守
　　繼豐御判

進上　中將樣

1238

吉貴公御請中
正文在文庫
寫

宮原清右衛門
正清
玉置　小市
安代

右兩人打物別ゐ宜仕此度御用をも被仰付ゟ付、葵一葉之繪形壹枚充被下置之ゟ間、自今打立ゟ道具出來勝レゟに ハ、鉾之下ニ繪形之通切可申ゟ、打物之事猶以精出シ勵可申ゟ、且又葵切ゟ儀正清・安代一代計ニゟ、子孫ゟ讓ゟ儀ゟ不罷成ゟ、尤子孫ニ至り打物勝レゐ能仕ゟものにハ其節被差免ニゐ可有之事ニゟ、遠方被召呼ゟ付、白銀十枚充被下之、右之趣兩人ゟ申渡、最早御用相濟ゟ間、勝手次第可差戻ゟ、

1239

正文在宮原清右衛門正清

今度依
台命其方事被召呼、於江府濱　御殿打物仕致獻上之處、御氣宇相協御紋葵一葉之繪形并白銀十枚拜戴之、自今以後爲勝於打物ゟ、鉾下右一葉之葵可致彫刻之旨被仰渡、冥加之至、於御領國前代未聞之事也、依之此節受領被仰付早、猶以向後出精抽丹誠可勤家業者也、仍如件、

享保六年四月九日　　比志嶋隼人
　　範房判

宮原清右衛門殿

在上包
書付

1240

仝上
正文在玉置小市安代

今度依
台命其方事被召呼、於江府濱　御殿打物仕致獻上之處、御氣宇相協御紋葵一葉之繪形并白銀十枚拜戴之、自今以後爲勝於打物ゟ、鉾下右一葉之葵可致彫刻之旨被　仰渡、

冥加之至、於御領國前代未聞之事也、依之此節受領被仰付旱、猶以向後出精抽丹誠可勤家業者也、仍如件、

享保六年四月九日　　比志嶋隼人範房判

玉置小市殿

1241

吉貴公御譜中

正文在文庫

今朝香具品々并丸熨斗一箱被獻之ハ、遂披露ハ之處一段御仕合ハ、恐々謹言、

享保六年（朱カキ）四月十二日　　正岑判

松平薩摩守殿　　井上河内守正岑（在口裏）

1242

絲豐公御譜中

正文在文庫

謹奉啓上候、倍御機嫌能被成御座之由、恐悦奉存ハ、從御内證爲可奉伺御様躰如斯御座ハ、隨而紙紗綾五巻進上之仕ハ、猶奉期後喜之時候、誠惶誠恐敬白、

享保六年（朱カキ）卯月十八日　　中山王尚敬判

進上侍從様

1243

吉貴公御譜中

正文在文庫

龍眼肉之木六本被獻之ハ、首尾好遂披露ハ、恐々謹言、

享保六年（朱カキ）四月廿八日　　忠眞判

松平薩摩守殿　　戸田山城守忠眞（在口裏）

1244

仝上

扣写在江戸家老座

覺

一乾字金通用之儀去々亥年限こゐ、去子年以來ハ一切通用無之筈ハ處、今以通用ハ筋及有之由相聞得ハ、遠國末々之者心得違ハ故右之通ハ歟、此上堅通用不仕急度引替可申ハ、尤引替之儀及來寅年限之事ハ條、是又其旨を存無油斷引替可申ハ事、

一元禄銀・寶永銀・中銀・三ツ寶・四ツ寶銀之事及、弥

最前被仰出ゟ通、來寅年銀引替可申ゟ、卯年よりハ一切通用御停止之儀ニゟ條、是以遠國末〻迄其旨相心得、來寅極月を限、急度引替可申ゟ事、

右之趣江戸・京・大坂其外所〻町場ゟ其所之奉行、國〻在〻御料ゟ御代官、私領ゟ領主・地頭より念を入可被申付ゟ、若此上書面之趣違犯之事有之におゐてハ、可爲曲事者也、

（朱）「享保六年」丑四月

（朱）「右者戸田山城守様ゟ被召呼、御用人小林又兵衛を以御渡被成ゟ由、佐久間九右衛門（啓村）申出ゟ」

1245

繼豐公御譜中

正文在文庫

猶〳〵今朝ゟ爲御見立御出、御暇乞申、別ゟ致大慶ゟ、被入御念是迄以御飛札預御音信忝存ゟ、以上、

御札致拜見ゟ、如仰今朝其御地發足、今曉至大宮之驛（武蔵）致止宿ゟ、爲御見舞示預、殊兩種被懸御意、被入御念忝存ゟ、猶歸國之上可申達ゟ、恐惶謹言、

松平民部大輔（毛利）

吉元判

享保六年（朱カキ）五月朔日

松平大隅守様

御報

1246

吉貴公御譜中

正文在文庫

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來歡覺ゟ、委曲戸田山城守可述ゟ也、

五月三日　吉宗公御墨印

薩摩

中將殿

1247

繼豐公御譜中

正文在文庫

御狀令披見ゟ、

公方様益御機嫌能被成御座、去月廿日東叡山　御宮殿御參詣之儀被承之、恐悦旨尤ゟ、紙面之趣各申談及言上候、恐〻謹言、

水野和泉守

忠之判

享保六年（朱カキ）五月四日

松平大隅守殿

1248

吉貴公御譜中
扣正文在文庫

知行目錄

高五拾斛
伊集院之内（日置郡）　谷山之内（鹿児島）
川内高城之内
帖佐之内（姶良郡）　高限之内（鹿屋）

名寄帳在別

右ゟ其方事先年薩州家三男嶋津備前忠清後嗣被　仰付、右高雖被預置、御取立之家ゟ條、此節拜領被　仰付訖、全可有所務者也、仍如件、

享保六年丑五月九日

北郷作左衛門　久嘉判
伊集院藏人　久矩判
嶋津杢　久武判
嶋津内記　久貫判

嶋津六郎次郎（久基）殿

1249

仝上

仝上

知行目錄

高五拾石

伊集院之内
日當山之内（姶良郡）
川内高城之内

名寄帳在別

右ゟ其方事先年義岡家相續被　仰付、右高雖被預置御取立之家ゟ條、此節拜領被　仰付訖、全可有所務者也、仍如件、

享保六年丑五月九日

北郷作左衛門　久嘉判
伊集院藏人　久矩判
嶋津杢　久武判
嶋津内記　久貫判

義岡右京（久守）殿

1250

繼豐公御譜中
正文在文庫

御狀令披見ハ、
公方樣益御機嫌能被成御座、去月晦日增上寺
御佛殿　御參詣之儀被承之、恐悅旨尤ハ、紙面之趣各申
談及　上聞ハ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）五月九日　　水野和泉守
　　忠之判

松平大隅守殿

1251

仝御譜中

嚮ヽ是享保六年辛丑三月十八日、繼豐爲二述職一發二麗府四
酡館一、家老島津内膳久兵、守役相良新右衞門長賢、側
用人伊集院權右衞門久盛、三雲新兵衞定恒、用人宮之原
甚太夫重行等附二從焉一、同十九日到二向田（川内）假亭一、同二十
二日駕ヽ舩、同二十八日開二帆京泊（川内）港一、歷二西海一四月十六
日到二于播州坂越一、自ヽ是取二陸路一、同十九日到二于攝州
大坂一、同二十二日出二大坂一、溯ヽ流（リ）同二十三日到二于城
州伏見一、同二十六日出二伏見一、歷二東海之驛路一、五月十
一日到二著于江都芝邸一、翌十二日詣二執政之第一達ヽ事、

1252

正文在文庫

明十五日五時登　城參府之御禮可被申上ハ、以上、

享保六年（朱カキ）五月十四日　　水野和泉守
　　戸田山城守
　　井上河内守

松平大隅守殿

1253

仝上御譜中

同月十五日繼豐受二執政之奉書一、登ヽ營以二述職之事一、
奉ヽ謁二
大樹吉宗公一、隨二先規一獻二御太刀一腰・御馬代黃金十兩・
綿子百把一、時蒙二懇篤之　尊命一退去、

1254

吉貴公御譜中
在江戸家老座

享保六丑年五月十一日、
隅州樣御部屋栖ニゐ初ゐ　御參府被遊ハ、御獻上物其外
御禮被仰上候儀共諸事先例之通有之、首尾能相濟ハ、前
方　御部屋栖樣　御參府之節ゑ、御供之御家老御願上
御目見被仰付ハ、此節ゑ御供之御家老　御目見御願可有
之哉と、名越右膳より
太守樣ハ奉伺ハ處、先年

太守様御部屋栖之御家老と申譯ニゐ未無之、やはり　御家督様之御家老ニゐ　御目見被仰付ハ、其以後　御家督様　御部屋栖様御交替無之ハ付ゐ、　御部屋栖之御供御家老　御目見未無之ハ、近年未御願之上、御留守詰之御家老　御目見被仰付例ニ罷成、今以其通ハ得未、此節　隅州様御供之御家老　御目見御願有之、被　仰付ハハ、、其上ニ又御留守詰之御家老　御目見とて、兩度ハ無之筈ハ得未、一方未相欠ル積ニハ、然未御留守詰御家老　御目見被仰付ハ儀未別ゐ重キ事ハ、　御部屋栖様之御供御家老　御目見被仰付ハ儀未、輕キ事ハ得未、今度　隅州様御供之御家老　御目見御願未被仰上間敷旨被　仰出ハ付ゐ、此節未御供之御家老　御目見無之ハ事、

1255

仝上

扣寫在江戸家老座

覺

一琉球ハ渡海之儀、鹿兒嶋より春秋兩度有之ハ、

一琉球より鹿兒嶋ハ未夏一度ニゐ御座ハ、

一琉球人鹿兒嶋ハ在番、御當地ハ差上ハ使者之節、副使相勤ハ格之親方と申官人ニゐ御座ハ、人數未從者廿五六人ニゐ御座ハ、毎年代合申ハ、

一琉球ハ遣ハ者未、用人格又未物頭以上之役人三年代ニ遣事ニ御座ハ、右ニ相附ハ士六七人足輕少ゝ遣申ハ、

一琉球并嶋ゝハ遣ハ抑役之者、相附ハ下ゝ迄未三百人餘及可參ハ、

一右琉球在番嶋ゝ抑之者一度ニ未代合不申ハ、依嶋同年ニ代合ハ者及有之、翌年代合ハ者も御座ハ、嶋ゝ抑之者及三年代ニゐ御座ハ、嶋ゝハ抑ハ遣ハ者未目附又未代官遣申ハ、輕キ士及差添申事ニハ、

一藻玉未、琉球又未嶋ゝハ流寄ハを取申ハ、

以上

（朱）「享保六年」　五月

（朱）「右ケ條之儀、戸田山城守様より角野壽見江御物語之内被仰聞ハ付相尋ハ由、右膳江壽見申聞ハ付、右之通相調太守様備　御覽ハ而、右書付ハ五月十九日壽見江遣也」

1256

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披見ハ、今度大隅守初ゐ入國爲祝詞、被差渡摩文仁按司、殊太刀・馬代并目錄之表被相贈之、入念儀欣然

之至ハ、恐惶不宣、

享保六年（朱カキ）五月廿八日　中將吉貴御判ナシ

謹上　中山王

1257

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

芳翰令披閲ハ、去ゝ年從大清國敕使渡來、封王之禮式相調滿足之旨尤ハ、依之被差渡北谷王子、殊別錄之通被相贈之、入念ハ之段忻然之至ハ、恐惶不宣、

享保六年（朱カキ）六月二日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1258

仝御譜中

同年六月三日、吉貴訟（ルノ）于因二久痾一吉貴隱居使丙繼豐督（サ）乙家統甲之上書、使三鳥居丹波守忠利・小野次郎右衛門忠一持レ之到三于執政戸田山城守忠眞之第一、申二達之一、

1259

吉貴公御譜中

吉貴自二去歳一至二今年一、宿痾未レ愈痞悶眩暈時發、不レ獲二朝覲一、以故享保六年六月三日、上書請于賜二致仕一教丙嫡子繼豐相乙續家督甲、同月九日依レ命繼豐登レ營、鳥居丹波守忠利亦代二吉貴一登レ城矣、於二白書院一執政各列居、戸田山城守忠眞降二鈞命一、使二吉貴致仕繼豐家督一也、忠利來傳二台命之旨一、於レ是同月二十八日繼豐登レ營、拜二謁大樹吉宗公一、拜二謝襲封一、忠利亦代二吉貴一、拜二幕下一獻二上御太刀一腰・時服二十・馬代金十兩一、奉レ謝二致仕一、且奉二獻御刀一腰（正宗）・御茶入一箇（利休鶴首唐物）于吉宗公、五福神圖二軸（常信筆）・綿百把于天英院殿（前大樹家宣公之御妻）、是又依レ奉レ謝二致仕一也、而后贈二投太刀・絹帛・酒肴等於執政及諸有司且親戚知己一、爲二致仕之遺物一也、

1260

仝上

扣正文在右筆所

口上覺

私儀近年病身罷成ハ處、去年歸國仕ハ節於中途相煩ハ、以後痞強眩暈度ゝ差發ハ付而、登　城及難仕、色ゝ保養仕ハ得共、今以同篇ニ而、菟角快氣仕可相勤躰無御座ハ、

依之私隱居被仰付、同氏大隅守ハ家督被仰付被下ル様奉願ル、以上、

享保六年（朱カキ）六月三日　　御名御書判（月之御印添）

井上河内守殿
戸田山城守殿
水野和泉守殿

1261

仝上
正文在文庫

御用之儀ル間、明九日四時其方名代一人并同氏大隅守登城ル様可被致ル、以上、

享保六年（朱カキ）六月八日

水野和泉守
戸田山城守
井上河内守

松平薩摩守殿

1262

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

寫

一先便ニ申越ル通、
太守様御隱居御願書、今月三日戸田山城守（忠真）様ハ小野次郎右衛門（忠一）様を以被差出ル、重キ御願ニル故、此御方様御由緒之譯を以鳥居丹波守（忠利）様御添被成、御兩人ニテ御出し被成ル處、山城守様御逢被成、被請取置之旨御挨拶ニテル、然處昨八日御老中様御連名之御奉書御到來、明九日御用ル間、
太守様御名代壹人、
隅州様御登　城可被成之旨被仰渡ル、
一右付テ、今朝五時
太守様御名代鳥居丹波守様御同道ニテ、隅州様御登城被遊ル處、御白書院於御縁頰御老中様御列座、御用番山城守様ガ丹波守様ハ被仰渡ル者、
太守様御願之通御隱居被　仰付之旨被仰渡、引次ニ隅州様ハ者御家督被　仰付ル、薩摩守代之通可相勤之旨被　仰出ル通被仰渡ル付、難有思召候通御請被仰上、夫より御退出、直御老中様方ハ爲御禮御廻り被遊ル、
丹波守様御事者此御方ハ御出被成、仰渡之旨
太守様ハ被仰達、左ルテ又　太守様爲　御名代、御老中様方ハ爲御禮御廻り被成ル、若御年寄様方ハ

御兩殿様より御家老御使者こゐ御禮被仰進ケ、

一右御願之通首尾能被仰付ケ御祝儀、先御下屋鋪ハ惣出仕、　隅州様ハ御祝儀可申上ケ、右相濟ケゐ、御本丸ハ惣出仕、　太守様ハ御祝儀可申上ケ、

一右之御弘メ有之ケ當日より、

隅州様を太守様と可申上候、

太守様御事ハ　薩州様と可申上ケ、書付等こも、　御家督様御名を初こ書ケ様こと

御兩殿様御意こゐケ間、此段承知可被仕ケ、左ケゐ諸御役人ハも右之旨承知仕ケ様こと可被申渡ケ、

但此段ハ出仕之面々ハ、御家老對面之節直こ口上こゐ申聞ケ、

一右之御祝儀江戸ハ申上ケ事、又ハ御本丸ハ　隅州様御方御役座共こ被相直ケ儀ハ、委細被仰出筈ケ間、其内ハ可被差扣ケ、

右之通御祝儀可申上之旨被　仰出ケ間、可被奉得其意ケ、此外爰許御國元迄之御格式、段々之次第不殘被　仰出筈ケ間、是又左様可被相心得ケ、近日

御家督御禮を茂可被仰上ケ間、委細之儀ハ追々可申越候、右之内兩御奥ハ被申上ケ儀共ハ、早晩之通可被申上ケ、以上、

朱カキ享保六年　六月九日

嶋津内膳（久長）　嶋津内記（久貫）殿
名越右膳（恒慶）　嶋津（久武）李殿
比志嶋隼人（範房）　伊集院（久短）藏人殿
種子嶋弾正（久基）　北郷作左衛門（久駿）殿

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

仰出寫　寫

一太守様御方諸役座共　御本丸ハ相直シ可申ケ、

一御下屋敷ハ　御隱居御方御作事取掛可申ケ、御隱居御方被仰付ケ御役人ハ、御下屋敷長屋之内ハ當分ハ役座を建、義岡右京（久守）其外茂可相詰ケ、爰元こゐ之被遊様こ相應致ケ様可致ケ、御國許ハ御着被遊ケ時節ハ、何比と茂不相知ケ得共、御下屋敷御作事出來不申内こゐケハ、御假屋ハ可被成御座ケ、磯方之儀　御隱居御方

は被召附ハ、

一御部屋栖之内之五萬石御高、

薩州様御家督之内

太守様は御部屋栖料ニ不被進内之通格別ニ差分ケ可被置ハ、右五萬石方之御用嶋津彦太夫(久宮)、御用人ハ伊地知越右衛門は被　仰付ハ、以上、

六月

一御家督様御方之面〻其外方ゟ何そ付、

薩州様は書狀を以ゟ御祝儀等申上ハ不及ハ、

一御國許御納戸方之御道具、皆共不殘御銀迄ゟ御隠居御方御用無之ハ間、　御家督様御方罷成ハ、御隠居御方御用ニゟ可相立と存ハ品ゟ見合、追ゟ御沙汰可申上ハ、

御用ニゟ相立間鋪と存ハ御道具改之儀ゟ、種子嶋十左(時)衛門(守)・鎌田六郎太夫(政直)は委細被仰聞置ハ、

一伊地知越右衛門事、表方御用人ニゟ、右之五萬石方加役承筈ハ、

一右京筆者・五太夫筆者なと〻申候ゟ、差分申事無用可仕ハ、

薩州様御下向之間ゟ、御家老座之筆者ニゟゟ一節寄可申付置ハ、

薩州様被遊御下向ハハ、右之筆者ハ本〻之様相返シ、御供ニゟ罷下ハ御近習番ニゟ相濟ハ、此旨能〻可申遣ハ、以上、

朱カキ享保六年六月九日　　御取次　善兵衛

(島津久兵)内膳

(比志嶋範房)隼人は

1264

全御譜中

寫正文在文庫

覺寫

薩州様御隠居料壹萬石ニ可被成旨被仰聞ハ付、右之通ニゟ御用ゟ難達可有之ハ間、部屋栖之内之高五萬石差上度由申上ハ處、輕〻何事も被遊　思召ハ故、壹萬石ニゟ相濟ハと之御事　御意候、然共何とそ此方より申上ハ通ニと申上ハ得ゟ、是非共ニと申上ハ儀を、一向　思召之通計ニゟ難被成ハ間、一萬五千石可差上ハ、此上ゟ曽ゟ御受不被成と之事ハ故、弥壹萬五千石之御隠居料ニ相定ハ、此段何れも承諸役人は可申聞ハ、右高判物隼人は追ゟ可相渡ハ、

1265

朱カキ
享保六年　六月九日

繼豐公御譜中
扣正文在文庫
知行目錄
高百石
蒲生之内　始良之内
末吉之内　末吉之内
出水之内
名寄帳在別冊

右其方事江戸ハ被差置、御米三拾石宛被下置之處、右之内貳拾石此節相直、地高百石被下之條全可所務者也、仍如件、

享保六年丑六月九日　北(北郷)作左衛門　久嘉判
伊(伊集院)藏人　久矩判
嶋(嶋津)内記　久貫判

箕田政右衛門殿

1266

繼豐公御譜中

同年六月九日、吉貴受二吉貴・繼豐列位之奉書一、乃出二于執政一、於二是時一鳥居忠利代二吉貴一、與二繼豐一同登レ營也、於二白書院一執政各聯座、就レ中忠眞傳二台命於忠利一、而蒙ル許二吉貴之隱居一繼豐乃襲封且併領薩隅二州・日州諸縣郡及琉球國上、奉レ禮二謝之一而後退去、

1267

寫正文在文庫
寫
覺　寫

城代家老其外諸役人、此内之通可相勤候、
薩州樣御家督之節、諸役人一同ニ役儀之斷申ハ事ヌ爲有之由ハ得共、此節之儀ヌ直ニ何れヌ可相勤ハ、
一嶋津内膳(久氏)加判座席、嶋津内記(久貫)次可致ハ、側方之用可相勤ハ、
一名越右膳(恒度)事段々役斷之譯ヌハ得共、此間側方之儀勤馴ハ故、今程側方之勤可致ハ、
一比志嶋隼人(範房)　御隱居方可相勤ハ、加判ヌ差免ハ、家督方家老之次座席可致候、
一此間　薩州樣御方、御側中通之者御隱居方ハ勤ハ者之

外ニ、何れ茂家督方ハ可勤ル、同役之座席ニ部屋栖之内勤ル者之上座可致ル、

一隼人より可申渡事、

御隱居方ハ勤ル者共別紙之通可申附ル、右之段今日諸役人ハ一同ニ家老ゟ直申渡、國許ハ茂此趣を以何れ茂ハ申渡ル様ニ可致ル、

（朱）「享保六年」六月九日

1268

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

一嶋津内膳殿六月九日加判座席、嶋津内記殿次ニ被仰付ル、

一隼人殿事、六月九日御隱居様御方勤被仰付、加判被差免、座席表方御家老之次ニ被仰付ル、

一御隱居料壹萬五千石ニ被相定ル間、六月九日別紙寫之通被仰出ル、

右之通江戸より申來ル間、御記錄所ハ記置ル儀ニ、其通御記錄奉行ハ可被申渡ル、以上、

享保六年（朱カキ）七月廿一日　伊集院藏人（久矩）

嶋津將監（久當）殿

1269

吉貴公御譜中

同年六月十一日改名上總介、

1270

仝上

扣正文在右筆所

口上覺

同氏薩摩守願之通被仰付ル付、上總介と名相改申度存ル付、私より相伺申ル、以上、

（朱）「御張紙ニ

薩摩守儀上總介と名相改度由可為勝手次第旨可被相達ル」

（朱）「享保六年」六月九日　松平大隅守

但六月十一日御用番戸田山城守様御用人ゟ此御方御留守居御用ル由申來、森川理右衛門（武宣）罷出ル處、御名替之儀御勝手次第可被成旨、御願書ニ右之通御張紙を以被仰渡ル、

1271

仝上

扣正文在右筆所

口上覺

今度私家督被　仰付ハ付ゐ御禮申上度奉願ハ、其節同氏薩摩守隱居之御禮も以名代申上度ハ、獻上物等以別紙奉願ハ、以上、

享保六年（朱カキ）六月十一日　　松平大隅守

1272

繼豐公御譜中

同月十一日繼豐稟二官府一、蒙二允容一、吉貴改二薩摩守一稱二上總介一、

○同月十五日使二比志島隼人範房一、吉貴讓二覡傳來之家系文獻及許多品之寶器等於繼豐一、因二先規一也、委錄二于後一、

1273

寫正文在文庫

寫

寫

來ル十五日、

太守様ハ隼人を以被　仰進ハ儀有之ハ間御座之間ニゐ月次之御禮被遊御覽ハ、其御序隼人被召出候様可申上置候、

隼人御使相勤候御口上ハ

御家督被仰出ハ付、　御家御代々御讓物被進ハ、右品之儀御國元ニゐ可被遊　御覽ハと申上、御咄可申上趣左之通、　寛陽院（光久）様御隱居、

大玄院（綱貴）様御家督之節、御國元御對面所ハ御道具備置、以御使被進直ニ其品爲被進　御覽事ニハ得共、此節之儀ハ今日隼人御使ニゐ被進候間、被遊　御覽ハ儀ハ御國元ニゐ御勝手次第、いつニゐゑ　御覽被遊ハ様ニと可申上候、

右之通御使相勤ハ節、内膳（久氏）・右膳（恒度）相詰ハ様可致ハ、左ハゐ御國元御家老ハゑ此段可申越ハ、以上、

享保六年（朱カキ）六月十一日　　御取次（相良頼以）源太夫

隼人ハ（比志嶋範房）

1274

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

一薩州様御願之通御隱居被　仰出ハ付ゐ、

上總介様と御名被改度之旨、

太守様より之御願書、今月九日御使者川上五（規）後右衛門（房）

こゝ、御用番戸田山城守(忠真)様ニ被差出ケ處、同十一日山城守様御用人方御留守居御用之由申來、森川理右衛門(武直)罷出ケ處、御名替之儀御勝手次第可被成旨御願書ニ御張紙を以被仰渡ケ、

一右御願之通被仰渡ケ付ヲ、御祝儀申上ケ儀惣出仕ニ茂及間鋪ケ、諸御役人罷出、御祝儀申上可然と　御意ケ付、諸御役人罷出、右之御祝儀申上ケ付ヲ、御家老中對面早晩之通御祝儀之段可達　貴聞と申聞、左ケヲ御名替被遊ケ付ヲハ、御内々ニヲ茂　總州様と可申上旨被　仰出ケ、左様可相心得旨内膳より口上ニヲ申聞ケ、

一總州様御方此以後御祝儀等之儀茂、段々被　仰出趣別紙有之候得共、御名替御祝儀迄ハ其許より先例之通可被申上儀と、爰元ニヲハ致沙汰ケ、此段茂爲御心得申越ケ、

一御名替之儀島津淡路守(稚久)殿ニ此方方ハ御しらせ不申ケ間、其許より可被申越ケ、

右御名替之儀兩御奥ニ茂可被申上ケ、其外承知可仕面々ニ茂早晩之通可被致ケ、以上、

享保六年(朱カキ)六月十五日　名越右膳　種子嶋彈正

嶋津内膳

嶋津内記殿

嶋津李殿

伊集院藏人殿

北郷作左衛門殿

1275

繼豐公御譜中

正文在文庫

貴殿事家督首尾能被　仰付、別ヲ悦入ケ、因茲先祖代々相傳之家珎別錄之表令讓與之間、堅固被致所持、至于子孫萬々歲可被讓渡之狀如件、

享保六年六月十五日　上總介吉貴御判

松平大隅守殿

1276

全御譜中

正文在文庫

重物目錄

一系圖

一文書五帖

一同巻物數十軸

一家康公御墨印　一通
一秀忠公御感狀　一通
一御判物五通附領知目錄四通
一記錄四百貳拾五册
一源氏重代膝丸之御太刀一腰改小十文字光世作
一賴朝卿御太刀一腰号大十文字無銘
一賴朝卿御守脇指一腰鳩作無銘
一賴朝卿御本尊五指量愛染明王像一體弘法大師一刀三拜之作
一摩利支天多田滿仲御守本尊像一體
一忠久公御鎧一領
一太刀一腰兼永作綱切
一旗二流一流八時雨之旗一流八白旗八幡十
一太刀一腰青江恒元作
一般若之劍一振波平行安作
一太刀一腰宗近作
一劍一振血吸之劍弘法大師作之由
一手鑓一本城州長吉作
一一本杉馬驗一本
一太刀一腰真利作
一琴一面鴻雁
一衞府太刀一腰貞真作
一鞍一口・鐙一掛梨子地螺之高蒔絵紫大形綱虎皮泥障野唐四方手添
一旗一流八幡大菩薩之文字有之
一太刀一腰康次作
一腰物一腰包平作
一脇指一腰鷹之羽宗近作
一釜一口八景
一茶入平野肩衝一箇
一腰物一腰長光作
一脇指一腰弥正宗
一脇指一腰堀尾正宗
一太刀一腰正恒作
一腰物一腰来國光作
一太刀一腰備前長光作
一腰物一腰正宗作
一腰物一腰吉家作
一腰物一腰来國行作
一脇指一腰筑州住左文字作
一太刀一腰備前守家作

一腰物一腰無銘左文字作
一脇指一腰貞宗作
一腰物一腰國行作
一腰物一腰則光作
一脇指一腰備前兼光作
一腰物一腰則宗作
一腰物一腰備前吉房作
一腰物一腰備前助眞作
一腰物一腰一文字作
一腰物一腰備前長光作
一腰物一腰三條吉家作
一腰物一腰越中國則重作
一腰物一腰來國光作
一鞍一口鐙一掛亀甲高蒔絵金具散ン四方手添
一鞍一口鐙一掛菊之御紋高蒔絵梨子地桐之地紋蒔絵有鐙黒塗
一旗一流
一腰物一腰吉房作
一鞍一口紋猿金具
一鞍一口鐙一掛黒塗紋金具
一轡一間正宗作

以上

享保六年辛丑六月十五日

1277

繼豊公御譜中
寫正文在文庫

寫

御代々御讓物被進之段、別紙之通今日私御使ニ而
太守様ハ被仰進ル、右ニ付而者
太守様以後被遊　御覽ル節之次第等者、表方御家老中ゟ
被申越ニ而可有御座と存ル、以上、

享保六年朱カキ六月十五日　　比志嶋隼人

嶋津内記殿
嶋津　李殿
伊集院藏人殿
北郷作左衛門殿

1278

寫正文在文庫

寫

今度就　御家督、今月九日御座之間ハ私共被召出、　仰
出御書付二通之趣御直ニ被　仰下、右之趣爰許詰諸御役

人ハ御家老直ニ申渡、御國本ハ及可申越旨　御意ハ付、
御尤至極難有奉存ハ由御受申上、則日諸御役人大御書院
次之間并表御書院次之間ニおいて、御書付之趣彈正（種子島久基）ゟ直
申渡、御書付ハ御右筆ハ讀せ、いつれも奉承知御禮申出
候ニ付、大概之趣書擧を以達　貴聞ハ、右御書付寫貳通
差越ハ條各被奉承知、諸御役人ハ及奉承知候樣可被申渡
ハ、爰許書擧之趣爲見合寫差越ハ、以上、

朱カキ享保六年　六月十五日　　名越右膳（桓渡）
　　種子嶋彈正（久基）
　　嶋津内膳（久兵）

嶋津内記（久貫）殿
嶋津李（久武）殿
伊集院藏人（久矩）殿
北郷作左衛門（久嘉）殿

1279

全上

寫正文在文庫

寫

今度　御家督付ゟ別紙之通被　仰出奉承知ハ、右御書附
寫差越候條各被奉承知、被申渡ハ儀共不洩樣可被申渡ハ、
委細之儀ハ山本仙太夫ハ申含差越候間、可被得其意候、
以上、

朱カキ享保六年　六月十五日　　比志嶋隼人
　　嶋津内膳

嶋津内記殿
嶋津李殿
伊集院藏人殿
北郷作左衛門殿

1280

吉貴公御譜中

正文在文庫

端午之　御内書可相渡候間、明日五半時　御城ハ家來可
被差出ハ、以上、

朱カキ享保六年　六月廿四日　　戸田山城守

松平上總介殿

1281

全上

明廿八日隈居之御禮被　仰付ハ間、爲名代鳥居丹波守五
時　御城ハ罷出ハ樣可被致ハ、以上、

1282

享保六年（朱カキ）六月廿七日　　水野和泉守
戸田山城守
井上河内守

松平上総介殿

繼豐公御譜中

扣正文在右筆所

口上覺

同氏上總介奉願ハ通隠居、私ニ家督早速被　仰付之、難有仕合奉存ハ、然ハ上總介儀去年參府仕ハヽ、病氣故登　城ヲ懈怠仕、御用等ヲ相勤不申儀ニ御座ハ得ハ、私儀ハ來年迄在府仕、相應之御奉公相勤申度心底ニヽ罷在ハ、若私御暇之御沙汰ヲ御座ハハ、此段被聞召置可被下ハ、以上、

享保六年（朱カキ）六月　　御名（島津繼豐）

右戸田山城守殿正小野次郎右衛門（忠一）樣を以六月廿六日被差出ハ、

1283

正文在文庫

明廿八日五時登　城、家督之御禮可被申上ハ、以上、

1284

享保六年（朱カキ）六月廿七日　　水野和泉守
戸田山城守
井上河内守

松平大隅守殿

繼豐公御譜中

同年六月二十八日、繼豐受二執政之奉書一、登　レ營於二白書院一、拜二謁大樹吉宗公一奉レ禮二謝襲封一、牧野因幡守英成奏二達之一、獻二上眞御太刀一腰（備前元重）・時服五十領・御馬代白銀千枚一矣、是時家臣九人（著肩衣長袴）・一族島津玄蕃久典（丹羽式部少輔倚氏奏達）・家老島津内膳久兵（奏者不詳）・種子嶋彈正久基（三浦壹岐守明敬奏達）・名越右膳恒渡（丹羽倚氏奏達）各奉レ獻二御太刀一腰・御馬代白銀一枚・時服六領（内単一物三）、番頭二階堂新五右衛門行宏（酒井條理太夫忠音奏達）・三雲新兵衛定員（奏達不傳）・宮之原甚太夫重行（三浦明敬奏達）伊集院權右衛門久盛（丹羽倚氏奏達）・福山平太夫安村（丹羽倚氏奏達）各奉レ獻二御太刀一腰・御馬代白銀一枚・時服五領（内単一物二）於二白書院一奉レ拜二謁台顔一、是因二島津家之舊範一也、而後各退去、且以二白

銀十枚・縮緬紅白五十巻・干鯛一箱一、獻二上　天英院殿（徳川家宣室）一、
因レ奉レ謝二襲封一也、此外贈二投太刀・絹帛・酒肴等於執
政及諸有司親戚知己一、而謝レ之矣、
○同月同日、鳥居忠利代二吉貴一登レ營、拜二謁
吉宗公一、奉レ禮二謝吉貴之致仕一、委録（クハ）二吉貴之譜中一、

1285

正文在文庫
家來九人
御目見被　仰付ル間、召連可被罷出ル、以上、

1286

繼豐公御譜中
寫正文在文庫
寫
一先月廿八日御家督之御禮可被仰上之旨、前晩御奉書を
以被仰渡、且又御家來九人　御目見被仰付ル間、可被
召列之旨別紙御書付ニ而被仰渡候付、
太守様被遊御登　城ル、御獻上物之儀兼而御用意之通、
先例不相替御獻上、御奏者牧野因幡守（英成）様ニ而、於御白
書院　御目見御禮相濟御下り被遊ル處、　御前ニ御出
被成ル様ニと御奏者番高木主水正（正陳）様ゟ被仰ル付、本之
御座ニ御出被遊ル時、是ニと
上意有之ル付、敷居より内ニ御進被成ル節、國之仕置
入念ル様ニと
上意有之ル、其節戸田山城守様ゟ
上意之趣難有奉存ル旨被仰上、御退出被遊ル、誠以千
秋萬歳目出度御儀恐悦至極奉存ル、
一總州様ニ茂御隠居之御禮、廿八日御名代鳥居丹波守（忠利）様
ニ而可被仰上之旨、前晩御奉書を以被仰渡、御獻上物
兼而御用意之通御獻上、首尾能御禮相濟、重疊目出度
御儀奉恐悦ル、
一太守様御事　御城より直ニ御老中様方ニ御見廻、若御
年寄様方ニ茂名越右膳御使者ニ而御禮被仰達ル、
一丹波守様茂　總州様爲御名代、御老中様方ニ御見廻、若
御年寄様方ニ茂比志嶋隼人御使者ニ而御禮被仰進ル、
一嶋津玄蕃殿・嶋津内膳・種子嶋彈正・名越右膳・二階
堂新五右衛門・三雲新兵衛・宮之原甚太夫・伊集院權
右衛門・福山平太夫事、先例之通御太刀・銀馬代・御
帷子獻上、　御目見首尾能相濟御威光之儀ル、右面々
御老中様・若御年寄様方ニ、先例之通御太刀・馬代持
參御禮申上ル、

右之通ニゐ御家督御隠居之御禮首尾能被仰上、無殘所御事ハ、右之段兩御奥ハ表可被申上ハ、以上、

但右御禮御延引罷成ハ儀ハ、

太守様御事少〻御風氣被成御座ハ付、去月十九日御用番様ゟ其段被仰上置、同廿五日御快氣被成ハ旨被仰上ハゐ、廿八日御禮被仰上ハ、此段爲御存申越ハ、以上、

朱カキ享保六年七月三日　名越右膳
種子嶋彈正
嶋津内膳

嶋津内記殿
嶋津　杢殿
伊集院藏人殿
北郷作左衛門殿

1287

繼豐公御譜中
正文在文庫

今朝琉球布十卷并砂糖漬天門冬一器・泡盛酒二壺被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保六年七月五日　正岑判

〆　松平大隅守殿　在口裏　井上河内守正岑

1288

吉貴公御譜中
正文在文庫

今朝鰹節一箱被獻之ハ、遂披露ハ處一段之御仕合ハ、恐〻謹言、

朱カキ享保六年七月六日　正岑判

〆　松平上總介殿　在口裏　井上河内守正岑

1289

吉貴公御譜中
正文在文庫
（島津継豊）（花押）No.5

今度

總州様御隠居高壹萬斛ニゐ可被遊御續由御意ハ、其通ニ

ゐ者御用可難達ゝ間、此内被下置ゝ部屋栖料高五萬石ニ
ゐ御續被成ゝ様ニと段々申上ゝ處、何事ゟ輕被遊思召ゝ
得者、壹萬石ニゐゟ御續可被遊事ゝ得共、申上ゝ儀御用
不被成ゟ如何被　思召ゝ付ゐ、五千石相加可申旨應　御
意、先御隱居高壹萬五千石差上ゝ條、堅固可致差引ゝ、
尤右ニゐ難御續節者何度ゟ可申聞者也、

享保六年七月九日

比志嶋隼人とのへ

1290

繼豐公御譜中
正文在文庫

（花押　No.5）

今度
總州様依御願御隱居、我等家督無相違被　仰出ゝ、領國
之輩專重
公義之御政道、萬端可相慎之、國家之仕置
總州様御代之通申付ゝ條、不致忘却堅固可相守之者也、

享保六年七月九日

1291

寫正文在文庫

寫

今度如御願、御家督無相違被　仰出、御安堵之御事ゝ、
依之御領國之輩に、以
御袖判被　仰出趣謹ゐ承知仕、第一
公義御政道を相守へし、
御家之御仕置者
總州様御代ニ被定置通を不被改、直に被　仰付事ゝ條可
奉得其意、御代替之時節ゝ得者、他方より諸事氣を附、
批判ゟ可有之ゝ間、古來より之風俗を不亂萬端可相慎也、
仍如件、

享保六年七月

（名越恒度）右膳
（種子島久基）彈正
（島津久氏）内膳

1292

吉貴公御譜中
寫正文在文庫

寫

一今度　薩州様御儀、　上總介様と御名被改ゝ付ゐ者、
助之字遠慮仕儀ゟ可有之ゝ得共、不及其儀ゝ、乍然此

介之字ゟ用間敷ゟ、且又佐之助・佐助抔と付居ゟ名ゟ遠慮可仕ゟ、

一上總介様と御名被改ゟ付ゐ、御内々ニゐハ總州様と申上ゟ、

一上總介様之御名之介之字を、介と書申事ゟ得共、人冠ニ不懸様介と書可申ゟ、惣ゐ御名之文字別紙之通向後書調ゟ様、筆者共ゟ可申聞置旨申來ゟ、

右支配中可致通達ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）七月十一日　（伊集院久矩）藏人

1293

正文在文庫

總　眞

總　草

介

享保六年（朱カキ）

1294

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

寫

比志嶋隼人殿事　御隱居方ニ被仰付ゟ付ゐゟ、加判被差免ゟ旨被　仰出ゟ、寫六月十五日山元仙太夫使申越ゟ付、相達ゟ半と存ゟ、右之次第ニゐ加判爲被差免事ゟ間、書付等ニも連名無之筈ゟ間、弥其通可被相心得ゟ、尤其御考ゟ有之筈ゟ得共、御沙汰ゟ有之ゟ付、爲御心得申達事ゟ、勿論連名無之ゟゐ不叶節ハ、表方御家老末連名被仰付旨候間、是又左様可被相心得ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）七月廿一日　種子嶋彈正

嶋津内記殿

嶋津　杢殿

伊集院藏人殿

北郷作左衞門殿

1295

吉貴公御譜中

寫正文在文庫

覺寫

御隱居被遊ゟニ付、何事ゟ只今被遊　御意置ゟ、

一御逝去被遊ゟハ、、爰許ニゐゟ大圓寺、御國元ニゐゟ淨光明寺ゟ可被遊御入候、淨光明寺ゟ御位牌所別ニ相立ニ不及ゟ、只今

御先祖様御位牌所御一所ニ可被成御座ゟ事、
一御遺躰土葬ニ可被成事、
一御吊之節ハ、
寛陽院(光久)様・大玄院(綱貴)様御吊之節ゟハ三部一諸事輕ク可被仰付ゟ、出家抔ハ不右ニ準シ被下物相應ニ可被仰付事

(朱)「享保六年」六月

(朱)「此御書付者　總州様より
太守様ニ被進、名越右膳殿、嶋津内膳殿ヱ　太守様より
御見せ被遊ゟ御書付寫也」

1296

吉貴公御譜中

覺寫

丑六月十四日江戸芝御屋鋪於御部屋、比志嶋隼人殿(範房)・相良源太夫(良以)・私三人　總州様御前ハ被召出、　御意ニ而承知仕ゟハ、此節御隱居御願之通被　仰出ゟニ付、　太守様ハ鍬田休之進を以被仰進ゟ儀有之ゟ、右之譯ハ
總州様ニ而一度ハ被遊御逝去事ニゟ得ハ、於御國元被遊御逝去ゟハ、、淨光明寺ハ可被遊御座ゟ、御佛餉料被相附ゟ儀ハ、　寛陽院様、　大玄院様ハ附被進ゟ三ケ壹程附可被進ゟ、於江戸被遊御逝去ゟハ、、大圓寺ゟ別ニ被成御座ゟ御寺而無之ゟニ付、大圓寺ハ被遊御座、御位牌之儀ハ於御國許ハ淨光明寺ハ可被成御座ゟ、右一筋只今ゟ不被　仰出ゟとも可相濟儀と何れ而可存ゟ得共、此節御隱居相濟ゟニ付而ハ此涯ニ而　御一世之儀迄被遊御仕舞被召置　思召ニ付、則爲被仰進事ニゟ、且又淨光明寺ニ可被成御座と之　思召、何様成譯ニ而有之ゟ哉と可存ゟ、淨光明寺之儀ハ、御家五代目迄之　御先祖様　御位牌而被成御座事ニゟ得ハ、至後年御寺之餘勢ニ而可罷成と被　思召上而之事ニゟ、左ゟ而火葬之儀ハ御嫌ニ而ゟ間、土葬ニと被　思召上ゟ、此儀ハ被遊御逝去候而ハ御物數寄而不入事ニゟ得共、兼ゝ御嫌之事ニゟ故、爲被仰進事ニゟ、此節仙太夫ニハ、御國許ハ御使被仰付罷下ゟニ付、御國許御家老中ハ右之段可申聞旨承知仕ゟ、
右　御意之趣先頃於御座何れも様ハ申上置ゟ、以上、

享保六年(朱カキ)閏七月三日　　山元仙太夫

1297

仝上

寫正文在文庫

寫

總州様今度御隱居被遊ゟ付、　御一世之儀被極置度被

思召上ゟ故、鎌田休之進御使こゝ　太守様ゟ被仰進ゟ趣有之ゟ、此節山元仙太夫御用付御使被差下ゟ故、御家老中こゝ右之趣可申聞由　御意ゟ通、享保六年丑七月九日仙太夫到着、於御家老座　御意之趣嶋津將監(久豊)・嶋津内記(久賢)・嶋津左(久武)・伊集院藏人(久矩)・北郷作左衛門(久嘉)承知仕ゟ、仙太夫口達之趣書付させ、後年爲見合此箱入付置ゟ、以上、

朱カキ
享保六年丑閏七月三日　伊集院藏人

1298

繼豐公御譜中

寫正文在文庫

寫

太神宮(伊勢)ゟ當家代々爲祈禱料、銀子拾枚毎年奉納之事不可有相違ゟ、今度依太守繼豐代替弥無怠慢御懇祈尤ゟ、恐々謹言、

朱カキ
享保六年閏七月六日　名越右膳恒渡判
種子嶋彈正久基判
嶋津内膳久兵判

御炊太夫殿

1299

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

爲陽春之嘉儀今歸仁親方被差越、殊目錄之表被相贈之、入念ゟ段令祝着ゟ、猶期後喜之時ゟ、恐惶不宣、

朱カキ
享保六年閏七月十五日　侍從繼豐御判

謹上　中山王

1300

全上

芳札令披見ゟ、愈安全之由珎重存事ゟ、我等無吳事ゟ間可易心ゟ、然ゟ從大清賜物之金入錦繻子二卷送給之、懇篤之至ゟ、恐惶不宣、

朱カキ
享保六年閏七月十五日　大隅守繼豐御判

中山王　回章

1301

全上

芳札令披見ゟ、就冠舩渡來拜借返上方願之通被　仰付ゟ、爲謝禮被差渡佐久眞親方、殊目錄之表饋給之、紙面之趣入念儀ゟ、恐惶不宣、

朱カキ
享保六年閏七月十五日　侍從繼豐御判

1302

謹上　中山王

仝上

琉球假屋在番

親方江

一太守様近年御病身被成御座、御勤等茂難被遊ル故、六月三日於江府御隱居之御願被　仰上ル處、同月九日於御城御老中様御列座ニ而、太守様御願之通御隱居、隅州様江御家督被仰付ル間、御隱居様御代之通御勤可被成旨、被　仰出ル通被　仰渡ル、

一隅州様を　太守様と申上、書付等ニ茂御家督様御名を初書可申旨被　仰出ル、

一薩州様御隱居被仰出ル付、御願之通六月十一日　上總介様と御名替被仰渡ル、依之御家中ニ而茂　總州様と申上ル、

一六月廿八日　太守様御家督之御禮首尾能被　仰上、先例之通御獻上物等有之、殊於　御前御懇之被蒙上意ル、且又右御禮付而、嶋津玄蕃殿・嶋津内膳殿・種子嶋彈正殿・名越右膳殿・二階堂新五右衛門・三雲新兵衛・宮之原甚太夫・伊集院權右衛門・福山平太夫事、

公方様江　御目見被　仰付ル、尤御家中より九人御目見被仰付ル儀、御家之御先格御威光之御事ル、

一總州様ニ茂御同日、　御名代鳥居丹波守様ニ而、御隱居之御禮首尾能被　仰上、先例之通御獻上物等有之ル、右之通段々江戸より御到來有之ル、御家督御隱居一通之儀茂以書中申越ル得共、右之趣中山王御承知ル様、攝政・三司官江可申越ル、以上、

享保六年（朱カキ）閏七月　　作左衛門

藏　人

杢

内　記

1303

繼豐公御譜中

正文在琉球國國司

一筆令啓達ル、六月九日

太守様　總州様御願之通御家督・御隱居・御名替首尾能被　仰出、恐悦奉存ル、委細茂於御當地在番親方江申渡

ハ間、其旨奉承知可有洩達ハ、恐〻謹言、

享保六年閏七月十五日　　北郷作左衛門　久嘉判
　　伊集院　藏人　久矩判
　　嶋津　杢　久武判
　　嶋津　内記　久貫判

豐見城王子
三司官

1304

繼豐公御譜中
寫正文在文庫

寫

御隱居・御家督ニ付、先頃段〻被　仰出ハ趣有之、申越ハ處被奉承知、御城代・御家老其外諸御役人此内之通相勤ハ様被申渡、且又御書付御右筆ニ被爲讀、將又　御隱居料御高之儀并内膳殿加判、又ハ御側中通之面〻、勤方座席等之儀共何れ茂被奉承知、御請御禮之首尾一書を以委曲被申越趣得其意達　貴聞ハ、以上、

享保六年閏七月十六日　　名越右膳

嶋津　内記殿
嶋津　杢殿
伊集院　藏人殿
北郷作左衛門殿

1305

繼豐公御譜中
正文在文庫

今度如御願御家督無相違被　仰出、御安堵之御事ハ、依之御領國之輩に以　御袖判被　仰出趣、謹ゐ承知仕、第一公義御政道を相守へし、　御家之御仕置ハ
總州様御代ニ被定置通を不被改、直に被　仰付事ハ條可奉得其意、　御代替之時節ハ得ハ、他方より諸事氣を附、批判も可有之ハ間、古來より之風俗を不亂萬端可相慎也、仍如件、

享保六年閏七月廿二日

作左衛門
藏　人
杢
内　記

1306

吉貴公御譜中

扣正文在右筆所

口上覺

同氏上總介私國元ニ之御暇奉願段得御内意ケ之處、委細被仰聞ケ趣致承知ケ、兼テ登　城仕隱居之御禮等申上度内存ニテ罷在ケ得共、早速其段相伺可申儀御座ケ得共、最初申上ケ通、勤ケ間鋪儀無覺束ケ得共、氣分快節、先各樣迄相廻、右之御禮及申上其上見合ケテ、弥病氣も打續快方ニ罷成ケ共、登　城之儀追テ可奉伺ケ、右之存寄ニ有之ケ間、登　城之願先暫延引仕ケ故此段申上置ケ、以上、

享保六年（朱カキ）八月　　御名

1307

仝上

扣正文在右筆所

口上覺

同氏上總介儀病氣ニ付、先頃願之通首尾能隱居被仰付之、難有仕合奉存ケ、得快氣ケ共何とそ登　城等及仕、御禮申上度兼テ存罷在得共ケ、最前ハ申上ケ通出來不出來御座ケ病症ニテ、勤ケ間鋪儀難仕其儀及不奉伺ケ、然共此間向冷氣病氣少ゝ快方罷成ケ、就夫國元ニ病氣相應之温泉も御座ケ得共、罷越致入湯保養仕度相願罷在ケ、然共隱居被　仰付ケ間及無御座、御暇之願申上ケ儀如何奉存ケ得共、病氣養生之儀御座ケ得共、只今時節及宜御座ケ間、道中日數を經ケテ、成程國元ニ差遣保養爲仕度存ケ、病身之事御座ケ得共、時節を限參府難仕可有御座ケ條、病氣快時節伺之上參府仕、御機嫌可奉伺ケ、此段奉願度心底罷在ケ得共、先各樣思召之程奉得御内意度ケ、何分ニ及可然樣御差圖奉願ケ、以上、

享保六年（朱カキ）八月　　御名

1308

吉貴公御譜中

正文在琉球國國司

去ゝ年從大清封王使就渡來御即位被成ケ、依之北谷王子被差上ケ付、從

國王樣被成下尊書拜見仕ケ、北谷勤方首尾好相濟、此節御暇被下歸帆ケ故如斯ケ、此旨可有演達ケ、恐ゝ謹言、

享保六年（朱カキ）八月三日

北郷作左衞門　久嘉判

伊集院　藏人　久矩判

嶋津　李
久武判
嶋津内記
久貫判

豐見城王子
三司官

1309

（朱）「雜抄」

一筆致啓上ル、　前攝政樣弥勇健被成御座、珎重奉存ル、
然ハ同氏上總介賀之屏風相調ル付ヲ、色紙形御清書之儀
從左府樣被仰上ル處、今度之祝儀格別被　思召上御染筆
被成下、頃日相屆致拜見ル、右清書之儀ハ故實有之不容
易之事ル由ル處、被盡御心ル儀誠以御懇之至辱奉存ル、
御禮爲可申上如斯御座ル、隨ヲ目錄之通致進上ル、此旨
宜預□達ル、（ンレス）（洩カ）恐惶謹言、

八月四日　繼豐

中川石見守（長堅）殿

右享保六年御家督已後ナルヘシ

1310

繼豐公御譜中
正文在文庫

爲八朔之御祝儀、以使者御太刀一腰・御馬代黃金十兩被
獻之ル、遂披露ル處一段之御仕合ル、恐々謹言、

享保六年（朱カキ）八月三日　忠眞判

松平大隅守殿　戸田山城守（在口裏）忠眞

1311

仝上

正文在琉球國國司

芳札令披見ル、今般謝恩使就歸帆、從大清賜之緞子三卷
被相贈之、入念ル儀過量之至存ル、恐惶不宣、

享保六年（朱カキ）八月六日　大隅守繼豐御判

中山王　回章

1312

仝上

芳翰令披閲ル、去春大清國ニ爲謝恩使富盛親方被差渡ル
處、令歸帆ル付ヲ、以右使者目錄之通送給之、入念ル之
段忻然之至ル、恐惶不宣、

享保六年（朱カキ）八月六日　侍從繼豐御判

1313

謹上　中山王

継豊公御譜中

扣正文在右筆所

覺

私領内之鍛治正清・安代先比御當地ニ被召呼、御用相濟難有被仰付、此間國元ニ差越申ハ、到着仕ハヲ兩人之者共細工初打物一腰宛打調、中心ニ拜領之葵并官名相記、爲冥加差上度由申ハ得共、恐多ハ付ヲ私迄差出可申旨申付置ハ、不苦儀候ヱ右刀到着次第私より獻上仕ハヲ者、如何可有御座哉御内意奉伺ハ、被成御差圖被下度存ハ、以上、

享保六年八月　御名

右八月十八日被差出ハ、

1314

継豊公御譜中

享保六年八月二十二日、繼豊表ニ襲封之賀儀一、招ニ請于執政并上河内守正岑・水野和泉守忠之、若年寄石川近江總茂、其外奏者衆三浦壹岐守明敬(奏者番)、留守居松前伊豆守信高(松平)、大目附彦坂壹岐守重敬(重)、町奉行大岡越前守忠相(忠)、勘定奉行大久保下野守忠位(忠)、作事奉行柳澤備後守信尹(信)、普請奉行朽木丹後守定盛(定)、長崎奉行日下部丹波守博貞(博)、山田奉行黒川丹波守正増(正)、日光奉行松平阿波守康約(康)、佐渡奉行北條新左衛門氏如(氏)各芝邸ニ而饗ニ應之一、是故松平民部大輔吉元・松平日向守定輝・阿部伊勢守正福・松平監物定章・酒井右京亮忠武・松平三郎助定儀・小笠原新九郎・前島太郎左衛門重命(重)・小野次郎右衛門忠一(忠)・丹羽玄孝・數原通玄・湯川壽得・丸山昌貞・島津八郎兵衛・島津式部久芬(久)・伊勢兵庫貞益(貞)・山元縫殿山本正延(山本)等各配レ席而在ニ勝手一也、猿樂、寶生・金剛・喜多三太夫等奏ニ囃子一、燕終而各退出矣、

1315

継豊公御譜中

正文在家老座

囃子組

高砂　八右衛門　九郎兵衛長右衛門　慰右衛門庄兵衛

東北　宝生太夫　三郎右衛門新九郎　市右衛門

祝言　十太夫養老　彦三郎五郎左衛門　又右衛門又六郎

1316

仝上

仝上

御座飾付

大書院

一床掛物三幅對　中寿老人　両脇鶴　月舟筆

三具足

鶴臺

香爐　古銅耳付

香合　菊彫物　大卓　古青貝

香匙火箸

立花

左右立花

違棚

後醍醐天皇震筆

軸物一巻　盆　古青貝

堆朱重印籠　盆　堆朱

葉茶壺　呂宋蠟付網掛ル

石摺手鑑　文鎭かね

書院床

喚鐘

執木

弗子

硯　未央宮瓦

硯屏　青磁福禄寿

墨　丸唐

筆　軸唐燒物

水入　かね鯉

筆架　九仙八海古銅

筆洗　草青磁三足

古今集　文鎭かね後京極良經公御筆

表書院

一床掛物三幅對　中布袋　両脇牛人形　可翁筆

香爐　古銅獅子蓋

香合　曲輪　中央青貝卓

左右　立花　臺

違棚

八代集　文鎭かね　一條關白昭良公御筆

仙香立　青磁　盆　堆朱

籠飯　古青貝紫網掛ル　盆　古青貝

附書院

一床掛物　一幅　慈母烏之絵　牧溪筆

活花入　青磁乱入　香臺　墨塗

違棚

香爐　太宗製　　盆　唐朱

香合　堆朱揚茂作　　盆　青貝

香匙火箸

正親町院宸筆御歌有

伊勢海硯

次之間

一床掛物　一幅　　閑極墨蹟

色奉書　卦算　　折卓　青貝

短尺

1317

全御譜中

饗宴畢而執政及若年寄各退出、而後賀ㇾ之、重而奏二囃子一也、

1318

正文在家老座

囃子組

龍田　金剛太夫　彦三郎　長右衛門　又右衛門　又六郎

蘆刈　十太夫　三郎右衛門　新九郎　市右衛門

祝言　助五郎　猶ゝ　與七郎　藤三郎　又五郎　文左衛門

1319

全上御譜中

同月二十五日・同二十七日繼豐襲封之後賀之招二于松平吉元・松平右近將監清武・松平左兵衛督直常・酒井阿波守親本・阿部正福・有馬左衛門佐壽純・秋田信濃守頼季・稲葉能登守董通・鍋島加賀守直英・金森出雲守頼時・松平采女正定基・細川伊豆守有清・池田丹波守信正・久留島信濃守勝重・戸田伊賀守氏長・織田備後守信房・毛利主水親就等且松平甲斐守吉里・松平越前守信清・稲葉丹後守正知・立花彈正貞晟・中川内膳正久忠・秋田頼季・相良遠江守長有・津輕右京亮信興・龜井能登守茲長・一柳對馬守末昆・小笠原近江守基重、其外親戚諸有司及戲下之諸士・大小家之家老・留守居等於芝邸一、而饗ㇾ之、恢設ㇾ燕乃猿樂觀世・寶生兩太夫各奏二舞曲一、終而退出矣、事繁故載二別冊一、

1320

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲重陽之祝儀小袖五到來歡思食ㇾ、委曲井上河内守可述ㇾ也、

朱カキ
寛保六年　九月七日

1321

薩摩侍從とのへ

仝御譜中
正文在文庫

明十五日例月之御禮無之ゟ間、不及登　城ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）九月十四日　水野和泉守
戸田山城守
井上河内守

松平大隅守殿

1322

継豊公御譜中
正文在文庫

生龍眼肉一箱被獻之ゟ、首尾能遂披露ゟ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）十月四日　忠眞判

〃　松平大隅守殿　戸田山城守（在口裏）忠眞

1323

仝上

御連札令拜見ゟ、然者當表大隅守殿御藏屋敷裏爲地之儀、御望之通申渡ゟ趣、於江府大隅守殿被成御承達之旨、依之預示入御念ゟ御事御座ゟ、次各弥御無吳御勤珎重御事存ゟ、恐惶謹言、

享保六年（朱カキ）十月六日　石河土佐守政郷判

嶋津内記様
嶋津本様
伊集院藏人様
北郷作左衛門様（御報）

1324

継豊公御譜中
正文在文庫

重陽之　御内書可相渡ゟ間、明日五半時　御城ゟ家來可被差出ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）十月廿日　井上河内守

松平大隅守殿

1325

仝上

覺

一諸大名參勤之節、從者之員數不可及繁多之旨、

御代々御條目ニ為被　仰出ル、然共在江戸中御番所火之番等被　仰付ルニ付ゐ人數多ク被差出ル、依之自今以後在江戸相應ニ、大概人數之御定被　仰出ル事、

一近年者江戸ニゐ御用被　仰付ル節、下人之内ニ雇人を差加勤させル様ニ相聞ル、向後右躰之儀堅無用ル、殊今度人數之儀被　仰出ル上ハ、御定之通急度人數召置可被申ル、若又少々餘り之人數有之ル共、差出被申間敷ル、尤不相應之場所ハ被　仰付間敷ル、萬一人數御用之時ハ勿論、領内より人數召寄御軍役之通堅可被相勤事、

貳拾萬石以上

馬上　拾五騎より廿騎迄但自身被召連ル共
足輕　百貳三拾人
中間人足　貳百五拾人より三百人迄

拾萬石

馬上　拾騎
足輕　八拾人
中間人足　百四五拾人

五萬石

馬上　七騎
足輕　六拾人
中間人足　百人

壹萬石

馬上　三四騎
足輕　貳拾人
中間人足　三拾人

一只今迄小人數ニゐ被相勤事濟ル場所ハ、尤其通たるへき事、

一貳拾萬石以下此外之知行高者、右御定ニ准し心得可被申事、

以上

（朱）「享保六年」丑十月

1326

（朱）「諸御大名様方御參勤之節從者員數定之儀被仰出ル覺書

享保六年丑十月朔日

太守様御登　城被遊ル處、御禮相濟ル以後御家督之御大名様方御用有之ル間、御殘被成ル様ニと被仰渡、水野和泉守様御逢被成被仰渡ル、火之御番等被仰付候節、被差出ル人數定之儀、此節被　仰出趣有之由ニゐ、右御書付之趣

被仰渡、左ゟ御宅江御人被遣ゟハ、、寫御渡可被成由ゟ付、森川理右衛門罷出ゟ處、右之御書付被相渡ゟ由ニ
ゟ差出之、

卯八月廿二日」

右ハ享保八年癸卯ナルヘシ

1327

継豊公御譜中
扣正文在右筆所

覽

先頃御暇時節之儀、小野次郎右衛門(忠一)ニゟ御尋ニ付申上置ゟ、四月御暇於被下ゟ、留主差置ゟ家來共召寄、且又乗船等之儀只今より國元江不申越ゟ得ゟ、遠國故往返難達御座ゟ、何れ之筋ニゟ相知不申候得ゟ、手當難致ニ付、此段御内意ニゟ御尋申上ゟ、以上、

(朱)「享保六年」十月　　御名

戸田山城守様江十月廿六日森川利右衛門ニ而被差出ゟ、十一月二日山城守様用人中嶋六郎左衛門を以被仰聞候者、四月御手當可被成ゟ由、山城守様被仰ゟ由、利右衛門江相達ゟ由、利右衛門ゟ直ニ承居記置ゟ、太守様阿部伊勢守様江御出被遊ゟニ付、右之段御近習役山澤十太夫伊勢守様御宅江參上、其段申上置御禮使相勤ゟ事、

1328

継豊公御譜中
寫正文在文庫

寫

此御方御暇時節之儀、先年　總州様依御願六月御暇ニゟゟ處、先比戸田山城守様より小野次郎右衛門様江被仰ゟゟ、弥六月御暇ニゟ宜ゟ哉、四月御暇ニゟ宜ゟ哉承合可被申聞旨被仰ゟニ付、　御兩殿様達　貴聞候處、前〻ハ四月御暇ニゟゟ得共、從御國元船中之時節海上荒クゟ付ゟ、六月ニ御願其通相濟ゟ、然共御暇之節、六月発許御發駕被遊ゟ得ゟ、七八月究竟風時分ニゟゟ、前〻之通四月御暇御給被成ゟ得ゟ、御幸ニ　思召之由次郎右衛門様江右膳ゟ口達ニゟ可申上旨　御意ゟ付、其通申上ゟ處、其趣次郎右衛門様より御書付被成、山城守様江被仰上候由、其後何之御沙汰ゟ無之候付、總州様より御意被遊ゟゟ、此比迄四月六月之譯不相知ゟ得ゟ、諸事御手當ゟ難被成ゟ間、御留守居を以山城守様江御尋申上、苦ケ間敷ゟ哉承合ゟ様ニと被仰ゟ、承合させゟ處御書付を以御尋申上、可然と　御内意有

之、其通御書付先月廿六日山城守様御方ニ被差出ル、然處今月二日山城守様ゟ森川理右衛門被召呼、御用人中嶋六郎左衛門ニゟ被仰渡ル者、遠國之事ニゟル故、四月六月之譯不相知ル得者、御手當及難被成之由尤ニ思召ル、　太守様來年四月御暇之御手當ニ可被成旨被仰渡ル、

一右ニ付御祝儀共被申上ニハ不及事ル間、左様可被相心得ル、

一右之通御座ル付、　太守様來年四月御暇之筈ニ、其許之手當可被申付ル、然者當春御參勤之節者、御家老一人御供ニゟル得共、來年御暇之節者、内膳殿・右膳兩人御供ニゟ可有之ル、大御備ハ當春者三十人備ニゟル得共、御家督様之御事ル故、來年ハ六十人備御持せ可被成哉、此儀者　太守様より　總州様ニ御尋被遊、御持せ被成筈ル、大形三十人備ニゟ可有御座哉と存ル、此外當春御供立ニ相替儀者無之筈ル間、右之考を以先太抵御船取仕立可被申渡ル、何方御通路之儀者未相知ル、然なから播磨路小倉御通路被遊ニゟ可有御座と存ル、究ゟ者重ゟ可申越ル、

一大御備相重ルハ、、足輕當詰之内ゟ被召列ルゟハ可差支ル哉、此段者爰許物頭ニしらへ申渡、申出趣を以追ゟ可申越ル、

一總州様御暇之儀者未何分ニ及不相知ル、此段も御存之ため申越ル、

右之通ニル間、諸事手當可被申付ル、右ニ付御考ニ可成儀共者追々可申越ル、以上、

（朱）「享保六年」十一月八日　　名越右膳

嶋津内記殿
嶋津　杢殿
伊集院藏人殿
北郷作左衛門殿

1329

吉貴公御譜中
正文在文庫
涅槃畫像　一幅
右就
上總介吉貴公貴院御再興、
公御夫人被爲寄附之旱、全令受納永可有寶護者也、依
仰如件、
享保六年丑十一月十五日　　義岡右京久守判

1330

吉貴公御譜中

今朝鰯一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）十二月九日　　正岑判

〃　松平上總介殿　　井上河内守（朱「石口裏」）正岑

1331

継豊公御譜中

正文在文庫

今朝蜜柑二箱・炙鮎一箱被獻之ゟ、遂披露ゟ處一段之御仕合ゟ、恐〻謹言、

享保六年（朱カキ）十二月九日　　正岑判

〃　松平大隅守殿　　井上河内守（朱「石口裏」）正岑

1332

継豊公御譜中

彌勒院大僧都憲英御房

今茲六月繼豊襲二封于江都一、是故敬二賀之一從二先躅一、同年十二月十三日於二薩府一命二幣使一、各以二白銀二十兩一獻二納于薩府五社正一位諏方大明神・稲荷大明神・祇園大明神・春日大明神・若宮八幡及福箇迫諏方大明神一矣（顔爽仙十郎清純代）、各以二白銀二十兩一進二納于恕翁福昌寺殿（元久）・慈眼院殿（家久）・寛陽院殿（光久後室）・陽和院殿（綱貴）・大玄院殿（綱貴側室）・蘭室院殿（久豊）・惠燈院殿（綱久）・泰清院殿（綱久室）・眞修院殿（綱久室）及深固院殿（忠國）之靈牌一矣（入来院主馬重矩同上）、各以二白銀二十兩一進二納于淨光明寺殿（忠久・忠時・久經・忠宗・貞久）五代之靈牌且青蚨三百匹本立寺五代之靈塔一矣（島津市大夫久邦同上）、各以二白銀二十兩一進二納興國寺殿（忠昌）及彭窓庵（家久室）主之靈牌一矣（島津藤次郎久智同上）、以二白銀二十兩一進二納于南林寺殿（貴久）之靈牌一矣（島津仁十郎久福同上）、各以二白銀二十兩一進二納于妙谷寺殿（義久）且興岳（忠隆）盛院殿之靈牌一矣（鼠山式部國儔同上）、白銀二十兩進二納于谷山皇德寺殿（久保）之靈牌一矣（種子島平馬憲時同上）、以二白銀百兩一獻二納于滿家院花尾權現社一矣（島津左衛門久健同上）、

1333

継豊公御譜中

正文有文庫

御用之儀候間、明十八日四時可有登　城ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）十二月十七日　　水野和泉守

戸田山城守

松平大隅守殿

1334

全御譜中

同年十二月十八日受二執政奉書一登レ營、於二白書院一執政列座、就レ中水野和泉守忠之傳二台命於繼豐一、轉二任左近衛少將一(位階如元)、乃奉レ禮二謝之一退出、

1335

正文在文庫

上卿　醍醐大納言(冬熙)

享保六年十二月十八日　宣旨

侍從源繼豐朝臣

宜任左近衛權少將

藏人右中辨兼左衛門權佐藤原賴胤奉

(在口裏)　口　宣案

1336

正文在文庫

侍從源朝臣繼豐

正二位行權大納言藤原朝臣冬熙宣、奉

敕、件人宜令任左近衛權少將者、

享保六年十二月十八日大外記兼掃部頭造酒正講直中原

朝臣師岑奉

1337

(在引札)

源繼豐任左近衛權少將　宣旨

正文在文庫

薩摩少將

上卿　醍醐大納言(冬熙)

職事　葉室右中辨

1338

繼豐公御譜中

同年十二月二十一日、使二上使倉橋内匠久富來二芝邸一、自二吉宗公一拜下領貴鷹所二搏擊一之鶴一雙上、則繼豐登レ營、時執政各退去之故、憑二奏者番高木主水正正陳一、奉レ禮二謝之一退出、

1339

繼豐公御譜中

正文在文庫

爲歲暮之祝儀、小袖五重到來歡覺候、委曲水野和泉守可述ㄴ也、

享保六年(朱カキ)十二月廿七日

吉宗公墨印

1340

全上

明廿八日五時登　城、任官之御禮可被申上候、以上、

享保六年（朱カキ）十二月廿七日　　水野和泉守
戸田山城守

松平大隅守殿

薩摩少將殿

1341

松平上總介（吉貴）養娘
松平大隅守妹（於喜代）
阿部伊勢守ハ

右之通縁組奉願候、以上、

松平大隅守取次
小野次郎（中）右衛門

十二月十一日

阿部伊勢守取次
六郷主馬

料紙大奉書切紙ニ調

上包
小奉書
上
松平大隅守取次
小野次郎右衛門
阿部伊勢守取次
六郷主馬

一享保六年丑十二月廿七日水野和泉守様御宅江小野次郎右衛門様被召呼、願之通縁組被仰付候旨、御切紙左之通、

一阿部伊勢守様方江茂、六郷主馬水野和泉守様御宅江被召呼、願之通縁組被仰付之旨被仰渡候由、彼御方江茂丑十二月廿七日被仰渡、

小野次郎右衛門様・小笠原新九郎様御両人御差図ニ而、右之通相調候、御取次御名一字下り小文字、

松平大隅守妹
阿部伊勢守ハ
願之通縁組被
仰付之、

右御切紙之裏松平大隅守江と書付有之

1342

全上

正文社文庫

松平大隅守妹
阿部伊勢守ハ

願之通縁組被　仰付之、

松平大隅守ハ

1343

継豊公御譜中

同年十二月二十八日、因ニ執政之奉書一、繼豊登ㇾ營、

獻ニ上御太刀一腰・時服二十・馬代黄金十兩一、拜ニ謁吉宗公一、牧野因幡守英成奏ニ達之一、是奉レ禮下謝任ニ少將一之儀上退出、

可承合之ハ、

吉貴公御譜中

扣寫在江戸家老座

吉貴様御隱居以後年頭御太刀御獻上之次第

松平大隅守口上

同氏上總介儀病身故登　城難仕ハ付ゐ、明年頭之御禮、二日以使者御太刀獻上爲仕度ハ、此段奉伺ハ、以上、

享保六年十二月　松平大隅守使者

佐久間九右衛門（盛村）

右御口上書、享保六丑十二月廿五日御用番戸田山城守様江、御使者御留主佐久間九右衛門致持參、御取次御用人小林又兵衛ニ而差上置ハ處、同日八日九右衛門御用之由申來罷出ハ處、年頭御太刀獻上之儀、伺之通正月二日以使者獻上ハ様可被致旨、右之御口上書ニ御張紙ニ而被仰渡ハ、御取次同人、

右之通被仰渡ハ付、正月二日相良源太夫（長以）御使者ニゐ、

御獻上首尾能相濟ハ段ゑ、御使番方ニ書留可有之ハ間

（表紙）

繼豐公　自享保六年六月　至同七年八月

追傍舊記雜録　巻五十七

繼豐公御譜中

御腰物奉行三宅彌市郎（德恩）様より佐久間九右衛門（盛村）御用之儀ハ間、御城ハ罷出候ハ、御案内可申上旨被仰聞ハ故、去朔日御案内申上ハ處、御逢被成、只今之持太刀古代作之儘成を取出候様ニとの御事ニ而、御吟味被成ハ處、本阿彌其外ニ茂無之ハ、此御方之儀茂、古キ御家之儀ハ間、若古代之作り之儘之持太刀可有之哉と被　思召候、其外神社ニ被籠置ハ儀ともハ無之ハ哉、昔之太刀拵損ハ而只今被仕直置ハ而茂昔之通有之ハ得茂、御手本ニ罷成事ハ間、被差出ハ様有之度ハ、且又今之小サ刀之様成物ニ鞘巻と申もの候、此巻様其外拵迄茂難相知候、若右之古キ物茂有之ハ哉、柄琴之糸抔ニ而巻、鍔なしなとも有之由ハ、是茂御當地ハ有之ハハ、被差出度旨被仰聞、御書付御渡被成ハ由九右衛門申出、右之件達　貴聞候處、御國元ハ申越、古代之拵之儘之御太刀・御小サ刀有之ハハ、可被差出ハ、且又御領國神社ハ被籠置ハ御太刀、古代之拵之儘於有之ハ、是又可被差出ハ條致吟味候様ニと可申越旨御意ハ條、被奉得其意吟味被申渡、右躰之御太刀・御小サ刀有之ハハ、早々可被差越ハ、尤脇方ハ持合ハ人茂可有之事候條、是又可被承合ハ、彌市郎様より九右衛門ハ御渡被成ハ御書付寫壹通并九右衛門書付壹通相添差越之ハ、以上、

六月六日　　嶋津内膳（久兵）

嶋津内記（久貫）殿

嶋津小（久武）殿

伊集院藏人（久旭）殿

北郷作左衛門（久嘉）殿

（の1）

一兼而拙者共役所ハ被仰付ハ而、只今之持太刀古代作之儘成を取出ハ様ニとの御事ニ而、彼是致吟味ハ得共、

本阿彌其外ニ茂無之ハ、薩摩守殿　御家茂古キ事ハ間、若古代之作り之儘成持太刀可有之哉と存ハ、其外神社籠物なとにも左様之物有之沙汰茂御聞無之ハ哉、御覺無之とも輕ク御聞合なとも可成筋ニハ、何とそ御尋賴入存ハ、

一右之外今之小サ刀之様成物ニ鞘巻と申ものハ、此巻様其外拵迄茂難相知ハ、若右之品古キ物茂御座ハ哉、是又御吟味賴入度存ハ事、

(の2)

寫

御用之儀ハ間、近日　御城ハ罷出候ハヽ、御案内可申上旨三宅彌市郎様より三日前被仰聞ハ故、昨日御案内申上ハ處、御出被成、差上ハ御書付之趣被仰聞ハ、昔之太刀拵損ハ而、只今被仕直置ハ而茂昔之通ニ而ハ得茂、御手本ニ罷成事ハ間、小サ刀之儀茂柄琴之糸なとは巻、鍔なし抔も有之由ハ、是茂近日御當地ハ有之候ハヽ、被差出ハ様ニと被　思召之旨彌市郎様被仰ハ、

朱カキ
享保六年　六月二日　　佐久間九右衛門（盛村）

(の3)

御腰物奉行三宅彌市郎様ゟ今月朔日佐久間九右衛門被召呼、古代作り之儘之持太刀之儀付被仰聞趣有之、其段被達　貴聞ハ處、御國元ハ申越、古代之拵之儘之御太刀・御小サ刀有之ハハヽ可被差出ハ、且亦御領内神社ハ被籠置ハ御太刀、古代拵之儘於有之ハヽ可被差出ハ條致吟味ハ様ニと御意ハ旨被申越委細承知仕、則吟味申渡相しらへ申ハ條、何分茂追而可申越ハ、此段申達ハ、以上、

朱カキ
享保六年　六月廿七日

北郷作左衛門
伊集院藏人
嶋津李
嶋津内記

嶋津内膳殿

(の4)

一御腰物奉行三宅彌市郎様より六月朔日佐久間九右衛門被召呼、只今之持太刀古代作之儘成を御吟味有之候處、本阿彌其外ニ茂無之ハ、此御方古キ　御家之事ハ間、若右躰之太刀可有之哉と被　思召ハ、其外諸神社ハ被籠置ハ儀ハ無之ハ哉、昔之太刀拵損、只今被仕直置ハ而茂昔之通有之ハ得茂御手本ニ被成事ハ間、被差出度ハ、且亦今之小サ刀之様成物ニ鞘巻と申ものハ、此巻様拵

迄ゟ難相知ル、若右之古キ物ゟ有之ル哉、柄琴糸ニゐ巻、鍔なし抔も有之由ル、是ゟ被差出度旨被仰聞、御書付御渡被成ル旨申出、右之件被達　貴聞候處、御國元ニ申越、古代作之御太刀有之ルハ、可被差出ル、御領内神社ニ被籠置ル御太刀、古代之儘於有之ハ可被差出ル、且又右躰之御小サ刀有之候ハ、致吟味ル様との御意候間、早ゝ相しらへ可承越ル、尤脇方ニ持合ル人ゟ可有之事ル條、可承合旨被申越趣承知仕ル、則しらへ申渡ル段ハ六月廿七日御使便申越ル、

一右付ゐ、御納戸奉行ゟ出所不相知重長作之御太刀一振、且亦御小サ刀一腰、無銘にて是ゟ出所不知刀有之差出ル付、致見分ル處、別ゐ古く有之、當時御用被成ル御太刀ニハ拵相替ル、御小サ刀之儀も鍔なしニゐ、御柄琴之糸ニゐ巻、胴かね有之、何れゟ古く相見得ル、此節被仰渡ル古代作之太刀、又ゟ鞘巻と申物ニゐル哉、相糺ル得共相知不申ル、然ゟ御太刀拵等ゟ相替、御小サ刀ゟ鍔なしニて琴之糸巻ニゐル得ゟ、此節之御用罷成可申哉と申談ル、

一嶋津筑後（玉遵）より國行作之太刀一振、足利將軍普廣院義教公より筑後先祖ニ拜領之由申傳ル、年久敷物ニル、柄鞘ハ損ル付、貳拾年以前ニ如本調直シ、其外之拵ハ少ゟ不相替旨申出差出候付致見分ル處、別ゐ古く相見得ル、拵等當時之太刀相替ル付、是ゟ此節之御用ニ可罷成哉と申談、筑後ニゟ右之太刀今度　公義御用付ゐ江戸ニ被差越ル段申渡置ル、

一右三腰御納戸奉行ニ申渡、荷作申附、拵書別紙之通相調、此節仁禮仲右衛門（頼常）其元ニ差上ル故、右便ニ差越申ル、右付ゐハ中途爲下宰領足輕兩人申渡相付差越候、

一右躰之太刀・小サ刀等持合可罷居面ゝニハ申渡、段ゝ差出ル得共、右差越候御太刀拵書等不相替ル故相返申ル、

一右付ゐゟ寺社奉行ニ申渡、御領國神社相しらへル處、神社手廣儀ル故、未しらへ不相濟ル、此節差越ル御太刀并御小サ刀之拵ニ相替ル有之ルハ、追ゐ差越可申ル、若拵等不相替ルハ、差越申間敷ル、惣ゐしらへ相濟申越ル間、延引ニ罷成事候故、先三腰差越申ル、其上遠方ニ有之急ニしらへ難成ル、八幡新田宮（介内）ニ右躰之御太刀有之ル由ル得共、神前ゟ外ニ出ル儀難成と申傳たる太刀有之ル由申出、未惣様しらへ相濟不申、追ゐしらへ相濟ル節何分ニゟ可申越候、

右之次第御座ハ間、可被達
貴聞儀ゑ被申上、右御太刀・御小サ刀於其元ゑ被致
見分、若御用ニ罷成事候ハ、宜様可被致ハ、被差越
ハ書付三通ハ此方ニ留置ハ、以上、

朱カキ
享保六年七月十八日

北郷作左衛門
伊集院　藏　人
嶋　津　　杢
嶋　津　内　記

嶋津内膳殿

右ノ書中朱書ニテカキ入レ左ノ如ン

(の5)

(朱)「別紙拵書

一御太刀一振　重長兩樋有、長二尺五寸八部
一御鞘梨子地葵唐草金かな具帶取有、袋ニ入、但かな
具二所落
一御鎺一重　金きせ
一御切羽二重　赤銅
一御縁柄頭帶取金物芝引羽かね地赤銅葵之彫めん金
但帶取金物革切
一御鍔三重右同　但ふくりん金
一御柄　革巻下琴之糸巻
一御目貫三具右同
一御太刀一振　國行作　長二尺四寸四部
一御鞘　革きせ黒ぬり芝引羽かね帶取袋有
一御鎺一重　金
一御切羽三重　黒ぬり
一御縁頭　但金きせ頭赤かね黒ぬりめん金きせ
一御鍔三重　壹重ハふくりん金
一御目貫一具
一御鮫　但打鮫
一御柄あい革巻さや右之革巻
一御小サ刀一腰　無銘二ツ樋有、長壹尺貳寸壹部
一御鎺　一重銀　一方ハ赤銅
一御鵐目　金
一御弁縁頭くりかた逆角小尻地赤銅銅七子金こゐ桐之
居物
但裏之皮有
一御目貫　金馬之彫
一御小柄　銀
一御小刀　兼常

(1346の1)

一御星目釘　赤銅

一御柄　琴之糸巻銅金地赤銅色繪

一御下緒

七月十八日」

一先月朔日三宅彌市郎様より古代作之太刀・小サ刀之儀付被仰渡趣有之、段々相しらへ、去ル十八日仁禮仲右衛門便御太刀二振・御小サ刀壹腰差越ㄟ、追ゐ相屆可申と存ㄟ、

一先便ニ及申越ㄟ通、御領内神社相調ㄟ處、別ゐ手廣有之惣様もしらへ相濟不申、乍然水引八幡新田宮ハ古代作之御太刀・御小サ刀御座ㄟ得共、内陳より出候付ゐハ鬮之上神樂をも拜進有之規ニゐㄟ由、且亦顯娃(掛塔郡)開聞社ニ及御太刀・小サ刀段々有之候得共、祭之節外ハ出ㄟ、其外間ニ出ㄟ儀古來ゟ無之由、寺社奉行申出ㄟ、右之通ㄟ得ㄟ致見分候儀ㄟ可難成と申談、先其通ニゐ差置申ㄟ、此外之神社よりも御太刀・御小サ刀等差出ㄟ所及有之ㄟ得共、御用ニ罷成躰ニ無之ㄟ故差越不申ㄟ、未何分ニ及不申出所及貳拾ケ所餘有之候間、自然其内古代作之拵様子相替ㄟ御太刀・御小サ刀及有之候ハヽ、差越可申ㄟ、

一右古代作之太刀・小サ刀之儀御手本ニ罷成事之由相見得ㄟ故、繪形ニゐ及御用可罷成哉と相考ㄟ付、右躰之繪形持合ㄟ人及可有之哉と是又相しらへㄟ處、木上清(雅)左衛門(雪)事古代拵之太刀繪形所持ㄟ、是ハ中納言(島津家久)様御代、寛永七年年櫻田御屋敷ハ御成之節御獻上ニ罷成ㄟ、御太刀之拵清左衛門曽祖父掃部助と申者ハ被仰付ㄟ、其時之繪形ニゐㄟ由申出ㄟ付、致見分ㄟ處、仲右衛門便差越ㄟ御太刀拵少々相替ㄟ付、自然ㄟ御用ニ及可罷成哉と申談、右之繪形寫壹枚并拵様之次第、且亦清左衛門親類より書留置ㄟ書付、清左衛門より差出ㄟニ付、右寫貳通差越申ㄟ、若御用罷成事ㄟハヽ、宜様可被致候、

一右之外ニ及繪形差出ㄟ人及有之候得共、御用可罷成と見及不申候故差越不申ㄟ、

右之趣被達　貴聞儀候ハヽ、宜被申上ㄟ、以上、

享保(宋カキ)六年　七月廿七日　　嶋津内記

嶋津内膳殿

五條之太刀之事

一龍頭くさりの太刀、つかまき・めぬき・つは・太刀のあし二所、さやさきいつれもゑつのことくりうの頭をほり物にする也、是ハ金にても銀にても又しやくとうちうしやく何れもよし、人〻のこのミによるへし、

一くさりの事ハ金を以はりかねのことくのへ、もちりくさりにして上にくさりつくる、くさりの長さは貳寸三部計たるへし、以上くさりハ三さかり也、そのさきへ龍の足をほり物にして、ほうしゆの玉をつくりつけ、そのたまのうちよりをひ取をとおし、あしの中ほとにむすひつくる也、

一おひとりの長さはさたまらす、人〻のこしによりみしかくもなかくもする也、色之事五色いつれもよし、むらさきはかりしんしやくあるへし、是ハ公方様めされけ、

一おひとりハから糸にて八ツくミにする事もあり、又色かハなとにてくけてする事もあり、軍陳なとの時ハ、五色のくミませ又黒革なと一段よくけ歟、

一つはのふくりん、つかさきのさかわにくち、いつれも金にてけ、さりなから色はさたまらすけ、

一たちはなくさりの太刀の事、是もくさりやうハ同前、つか頭のさかわにくちのまへ、目貫つはのほり物、たち花をほりものにする也、

一太刀のさやの事、ぬりあけ色は青くせいしつにぬりあくる也、又赤くも黒くもする、さたまらすけ、又下地をぬり、其上になめし革をかけ、ぬる事もあり、

一つかハ打さめたるへし、是ゑ色は金・銀・しやくとうこのミによるへし、又さめをめくる事も有、

一とつこくさりの事、是ハ七所のかな物いつれもとつこをかな物にしてくさる也、くさりやうハ同前かな物色は金・銀・又ちうしやく・しやくとういつれもこのミによるへし、

一きりくさりの事、是ハ公方様御太刀をきりのとうにてくさる也、

一つはハまるつは也、おひとりむらさきの糸にてうち申けし、太刀の寸ハ二尺七寸八寸九寸まて也、打さめ金物替らすけ、

一つはのうち裏表に八ところきりのたうをほる也、

一菊くさりハ一段賞斳、

公家の御太刀のこしらへなり、つはも丸くきくゆうに

する、つかかしら・太刀のあし・さやさきミなくきくをほりあけくさる也、

一さやの事、金にてはり、其上ふくりんをふかくと懸る、ほり物さやにきくの花をしかとほりつくる、太刀のつか巻事なし、つかにもふくりんあり、さかわに口何の太刀同前、目貫すへ目貫也、

一帯執ハ、から錦を丸くくけてむすふなり、　公家つくりの事武家よりハさたすましき事也、おほへのためにしるしおかるゝもの殊外の秘傳也、

一此御太刀の事　公方様御參内之時、必御持せゝ、此時ハ三官領(管)の御役也、諸大名も古へハ此作りを一腰ツゝ、こしらへて守にをかむ也、秘傳之事也、

(の3)

覺

一此太刀之圖前代より所持申ゝ事、

一寛永七年庚午卯月十八日江戸櫻田御屋敷にて

公方様御成、中納言様(島津家久)就被遊御進上御太刀誘差上可申候通、祖父掃部助(後号和泉守)被仰付、右如圖相調差上申ゝ事、

一金細工津曲甚九郎殿(後号内膳正)細工弟子衆餘多にゐ日數三拾餘日出來申ゝ事、

右御太刀差上申ゝ、依之御使藤崎有家にゐ御紋付之御上下・同御小袖一重・熨斗目御小袖一重・樽肴拜領仕ゝ段、親祖父日高新左衛門抔細々申聞ゝ、右御太刀御進物に備り爲申儀重々承屈ゝ、其砌ハ諸人御存之儀ゝ、雖然于今爲存仁ゑ無之故、爲後年書付置ゝ、於子孫ゑ疎意仕間敷者也、

天和二年壬戌二月九日　　木上清右衛門(左カ)　惟雪判

(の4)

一御腰物奉行三宅彌市郎様より只今之持太刀古代作之儘成太刀御用之由ゝ付、被仰渡趣有之しらへ被申渡ゝ處、御納戸より御太刀一振・御小サ刀壹腰差出、且亦嶋津筑後(忠置)ゟ太刀一振由緒相記被差出ゝ付、右三腰拵書相渡、仁禮仲右衛門(頼常)便被差越、段々被申越ゝ趣得其意達　貴聞ゝ、

公義御用可相成儀ゑ未相知ゝ、右しらへ神社之儀ゑ手廣儀ゝ故未相濟、此節被差越ゝ拵ニ相替ゝゑ有之ゝハ、、追ゐ可被差越旨被申越ゝ、右太刀之儀付ゐゑ、彌市郎様ゟ折々御沙汰ゑ有之事ゝ間、御領國中神社之分差付被相調有之ゝハ、、早々可被差越ゝ、八幡新田宮ゐゑ右通之太刀有之ゝを見ゝと申ものも有之由ゝ間、

右躰之神社を差付相しらへけ様ニ先可被申渡け、都ゐしらへ相濟け儀ハ、追ゐ被申越可然と申談、乍御返答此段申越け條無延引しらへけ様ニ可被申渡け、以上、

閏七月十六日　「上」嶋津内膳

嶋津内記殿

「下」嶋津本殿

伊集院藏人殿

北郷作左衛門殿

右ノ書中ニ返答書入左ノ如ン

(の5)

「御返答朱書」

「右被申越け趣致承知け、先頃仁禮仲右衛門便差越け御太刀一振、御小サ刀一腰、筑後ゐ差出け太刀一振、以上三腰ともニ相屆被達　貴聞、未　公義御用ニ可罷成儀ハ不相知け旨得其意候、其砌御領國中神社手廣有之け處、未しらへ不相濟候間、段々相しらへ此中差越け太刀ニ相替け儀も有之けハ、差越可申旨申越け、然處御腰物奉行三宅彌市郎様より折々御沙汰有之け付、御領國中存寄け神社ハ差付相しらへけ様ニ、又々此節被申越趣得其意け、此程御領國中之神社不殘しらへ相濟け得共、御用ニ罷成太刀・小サ刀無之旨寺社奉行ゐ申出け付、其趣ハ先頃委曲申越け條追々相達け半と存け、新田宮并開聞社ハ太刀有之け得共、右兩所調有之け太刀見分等ゑ難成譯有之、其段をも先達ゐ申越通け、此等之段及御返答け、以上、

八月十一日」

（以上朱書、前文書中朱書上、下は宛所、差出所ノ位置を示す）

(の6)

公義御用之御太刀二振・御小サ刀一腰仁禮仲右衛門便被差越、委細被申越趣相達、右付ゐハ神社しらへ等之儀共委曲先便申越け、然ハ去廿日御留守居附象瀬五郎右衛門ニゐ三宅彌市郎様御宅ハ右三腰ともに、覚書相添差出け處、御逢被成暫御預り被置け由ニゐ被請取置せ候由、佐久間九右衛門申出、其後何様とも不被仰渡け、追ゐ何分と被仰渡次第可申越け、先爲御存此段申越け、以上、

享保六年（朱カキ）八月七日　嶋津内膳

嶋津内記殿

嶋津本殿

伊集院藏人殿

北郷作左衛門殿

(の7)

一三宅彌市郎様ゐ被仰渡け古代作之太刀・小サ刀之儀、

段〻被相糺、仁禮仲右衛門便被差越相屆差出置ゟ段ハ別紙返答申越ゟ、

一木上清左衛門古代作太刀繪形致所持ゟ、是ハ　中納言様御代、櫻田御屋敷ニ御成之節御獻上被成ゟ御太刀之由ニ而、被差越相達ゟ得共、差而古代作と申ニ而茂無之ゟ、右躰之太刀ハ　公義ニハ可有之事ゟ故、被差出及間敷哉と申談事ゟ、

一御領内神社手廣ゟ付しらへ不相濟ゟ、水引八幡新田宮ニ古代作之太刀・御小サ刀御座ゟ得共、内陳ゟ出ゟ付而茂鬮申上、神樂拜進有之御規模之由、且亦顯娃開聞社ニ茂御太刀・御小サ刀段〻有之ゟ得共、祭之節外ニ出ゟ、其外間ニ出申儀古代ゟ無之旨寺社奉行申出候由、右之通ゟ得茂、見分茂可難成と被申談其通ニ而被差置ゟ由、其外貳拾ケ所餘未何分ニ茂不申出所有之由ゟ、

一右之通被申越ゟ以後、御領國惣様之しらへ相濟ゟ處、御用ニ相立ゟ御太刀・御小サ刀等無之旨寺社奉行申出ゟ段被申越相達得其意ゟ、

一右付而申談ゟハ、此御方之儀ハ別而古キ御家之事ゟへハ、古代作之類　御家ニ社可有之との御事ニ而　公義より茂爲被仰渡事ゟへ茂、何とそ致吟味、何程古ひゟ而茂被差出社御規模之御事ゟ、神社ニ相納有之ゟ茂御自分ニ被成事ニ而茂無之、　公義御用付而被差出事候得茂、現其太刀被差出儀難成事にもゟハ〻、繪形ニ而もいたし差出方ニ有之度旨申談ゟ、　(古貴)總州様ニ茂右之思召ニ而ゟ、左ゟへハ新田宮之儀茂鬮・神樂等被申上、御鬮次第其趣可被申越事ゟ、開聞之儀ハ追付御祭之事ゟへ茂、其節茂見分茂可罷成哉、御鬮茂被申事候ハ〻、何分茂可成所意を被相糺、其趣可被申越事ゟ、直ニ其御太刀等被差越ゟ事不罷成ゟハ〻、繪圖ニ而茂被遣度ゟ、繪形茂難被遣譯ニゟハ〻、何分ニ茂其趣可被申越ゟ、尤見分有之ゟ而茂、此中被差越ゟ御太刀・小サ刀類ニ不相替ゟハ〻、繪形ニ而茂被遣不及ゟ、先手を盡ゟ分を被申越度ゟ、最早御領國中改相濟、御用ニ罷成太刀・小サ刀無之由被申越ゟへ共、右通之　思召ニ而ゟ故、乍御返答此段申越ゟ、以上、

(朱カキ)享保六年　八月

名越右膳(恒渡)
種子嶋弾正(久基)
嶋津内膳(久兵)

嶋津内記(久貫)殿

(の8)

一三宅彌市郎様より被仰談事有之ゟ間可罷出旨申來ゟ故、今月十日佐久間九右衛門　御城ゟ罷出ゟ處、先日被差出ゟ太刀二腰・小サ刀一腰備　上覽ゟ、此間所々ゟ上りゟへ共、無手入古流之太刀無之ゟ故、三腰ともに珎敷被　思召ゟ、依之寫被仰付御用ゟ相濟ゟ故、近日御返被成旨被　仰聞、去ル十四日御返シ被成ゟ間、追ゟ便次第可差下ゟ、

一又被仰聞ゟハ、御國元ハ古キ　御家之事ゟ故、上代之鎧御所持亦ハ神社等ニ被籠置ゟ類有之ゟ哉、是ゟ所々被遂儀ゟへ共　思召ニ不相叶ゟ故、承見可申由御沙汰有之ゟ通彌市郎様より被仰聞ゟ旨、九右衛門申出ゟ付、達　貴聞ゟ處、於御國許吟味いたし御用可相成哉と存ゟ鎧ゟ有之ゟハ、、可差越旨被　仰出ゟ、此御方之儀古キ　御家故右通御尋被成事ゟ得ゟ、委敷致吟味被差出ゟへハ頂上之儀被　思召上ゟ、右付ゟ此程古代作之太刀之儀付ゟハ、申越趣同斷之　思召ゟ間、何とそ致吟味差上ゟ様ニ有之度ゟ、樺山權左衛門所ゟ將軍家より拜領之鎧ゟ有之由彈正殿覺ゟ、此等ゟ被差上事ゟ、其外被相紛ニゟ可有之と存ゟ、以上、

朱カキ享保六年　八月十六日　　嶋津内膳

嶋津　内記殿
嶋津　李殿
伊集院　藏人殿
北郷作左衛門殿

(の9)

一三宅彌市郎様ゟ御用付佐久間九右衛門罷出ゟ處、先日被差出ゟ太刀・小サ刀三腰とも備　上覽ゟ、此間所々ゟ上り候得共無手入古流之太刀無之ゟ處、三腰ともに珎敷被　思召ゟ、依之寫被仰付御用相濟ゟ旨被仰聞、其後御返被成ゟ由、左ゟゟ彌市郎様ゟ古キ御家之事ゟ故、上代之鎧御所持又ハ神社等被込置ゟ可有之ゟ、右付ゟハ所々ゟ被遂御吟味ゟ得共　思召不相叶間、御聞合候様ニと御沙汰ゟ由被仰聞、其段被達　貴聞候處、於御國元致吟味、御用ニ可罷成哉と存ゟ鎧ゟ有之ゟハ、可差越旨御意之趣委細被申越致承知、早速吟味仕事ゟ間、追々差出ゟハ、見分之上御用相達ゟ鎧有之ゟハ、、差越候様可仕ゟ、神社佛閣なとも相込有之候半、左様之儀共隨分不洩様吟味申度事ゟ、且又樺山權左衛門所ゟ

將軍家ゟ拜領之鎧ゟ致沙汰ゟ處、弥所持仕箱等ゟ其節之通ニ御座ゟ由、權左衞門より申出ゟ條見分之上致吟味、御用ニ罷成鎧ニゟ御座ゟハヽ、急度差越候様可仕ゟ、其外上代之鎧有之ゟハヽ、無延引致吟味差越申ニゟ可有御座ゟ、

一古代作之太刀・小サ刀　公義御用付ゟハ、御家ニ社可有之との御事ニゟ爲被仰渡事ゟへハ、吟味を盡何程古ひ候ゟゟ被差出社御規模之御事ゟ、神社ゟ相納有之ゟゟ早竟

公義御用之儀ゟへハ、新田宮・開聞内陳ゟ相込有之ゟ太刀・小サ刀差越ゟ儀難成ゟハヽ、繪形ニ成とも相調可差越ゟ、若又先頃差越ゟ太刀・小サ刀ニ不相替候ハヽ、繪形とても差越ゟニ不及旨委細被申越趣致承知、重ゟ寺社奉行ゟ右之趣を以申渡ゟ處、神前ニ有之ゟ太刀・小サ刀御當地迄差越ゟ儀付ゟハ、御鬮之上御神樂御拜進被遊御規ニゟ御座ゟ由、此間しらへ之節申出ゟ、然共於神前繪形亦ハ木形等ニ相寫ゟ儀ハ成程罷成、尤御神樂等御拜進ニゟゟ不及事ゟ、最前しらへ之節ハ直之太刀・小サ刀其御元ゟ差越ゟ考ニゟ申渡ゟ故、右之通寺社奉行ゟゟ相しらへ爲申出事ゟ、依之最前申越ゟ趣、間違ゟゟ爲有之事ゟ間、弥此節被申越ゟ趣を以早速繪師等差越、繪形委相調ゟ様爲申渡事ゟ、且亦開聞之儀ハ、此節御祭ニ付、幸嶋津登顕娃（久置・永吉家）ゟ差越罷在ゟ間、右次第ニ不殘相調差越ゟ様ニと申渡ゟ、乍然現ニ右之太刀鹿兒嶋ゟ差越ゟ儀ゟ可罷成哉、神前ニ爲被込置事ゟ得ゟ、卒尓ニゟ難成筈ゟ故、神前作法之通ニゟ御用相達ゟ様可仕旨、是又爲申渡事ゟ、

右之通先爲御返答ゟ、委細相究趣ゟ追々可申越ゟ、

以上、

享保十八年（朱カキ）九月八日　　嶋津内記

嶋津内膳殿
種子嶋彈正殿
名越右膳殿

(の10)

一三宅彌市郎様ゟ上代之鎧之儀付、御沙汰之趣委細被申越趣有之、先便一通り御返答申達置ゟ、右式御用付被差越候儀ゟ、別ゟ古キ御家柄故と御規模之御事ゟ故、御領内神社佛閣并諸外城迄不洩様一々吟味申渡、折角相改申ゟ處、所々ゟ至頃日少々古鎧をも差出候得共、不致全備大形不具之鎧ニゟ御座ゟ、左ゟへハ御領内惣

様改相濟、上代之鎧之内致全備ハ鎧有之ハハ、、吟味之上差越可申と申談ハ、乍然上代鎧之事ハへハ、大形ハ全備いたしたるハ無之積ハ付、全備ハ鎧無之ハハ、、不具ニ有之ハゐ及上代之鎧無紛を致吟味差越申ニゐ可有御座ハ、右之次第候故、段々相揃ハゐより吟味不致ハゐ者、難成儀ハ故、段々差越ハ様ニハ難致事ハ、改之儀者無油斷折角沙汰仕事御座ハ、先此段爲御存申越事ハ、以上、

九月廿二日　　嶋津内記

嶋津内膳殿

種子嶋彈正殿

名越右膳殿

(の11)

一上代之鎧之儀付ゐ、段々　御意之旨委細被申越趣有之、御領内改之儀申渡ハ段者、先便御返答申越置ハ間可相達と存ハ、右改至頃日相濟、方々より古代之鎧差出ハ付、御用可罷成鎧段々吟味仕ハ處、三領程御用ニ及可罷成哉と相見得ハ付、近日宰領相付中國筋差越申筈ハ、

一古代作之太刀・小サ刀水引八幡新田宮又ハ顯娃開聞宮社内ニ相籠有之ハを現差越ハ儀難成ハハ、、繪形ニゐもいたし差越ハ方ニと、　總州様思召之旨も段々被申越奉承知、右兩社ニ相込ハ太刀・小サ刀之儀ハ、其元迄差越ハ様ニハ難成事ハ、就中開聞宮ニ相込有之ハハ、祭外ハ前代より社内外ニ出不申事ハ由、座主・神主より及段々申出ハ、然共此節者宰御祭内右御到來有之候故、早速寺社座取次、繪師・小細工人をも相添差越、繪形ニ一通り寫させ、繪形ニゐ様子難分所ハ木形ニ及相調、右細工人共委細仕立ハ様子見屆ハゐ罷歸、繪形・木形ともニ差出ハ付致見分ハ處、先頃差越ハ御太刀・御小サ刀とハ仕立爲相替所及有之、古代之拵と相見得ハ、且又新田宮社内ニ相籠有之ハ鳩丸・御戸丸二振之御太刀及右同斷、繪形又ハ木形ニ爲相寫致見分ハ處、右太刀之儀ハ拵等先達ゐ差越ハニハ相替、古代作と相見得ハ故、右三腰共ニ御用可罷成哉と致吟味ハ得共、直之太刀差越ハ儀者兩社ともニ不罷成事ハ段承屆ハ故、直太刀少及違無之様相調、拵之次第迄も委相記差越可申と致吟味ハ得共、繪形迄ニゐハ恰合難分所及有之ハ故、繪形一通り、木形一通ツ、相調差越ハハ、、自然者御見合之御用ニ可罷成哉と申談調申渡置候條、近日出來次第差越申ニゐ可有之ハ、委細之儀者其節可申

越候得共、各爲御存申越事ハ、以上、

十月九日　　嶋津内記

嶋津内膳殿

種子嶋彈正殿

名越右膳殿

(の12)

一筆申達ハ、　太守様　總州様　御前様益御機嫌克被成御座、恐悦奉存ハ、於御當地　信證院様　於須磨様弥御安康被成御座、重疊目出度御儀奉存ハ、然ハ　公義御用上代之鎧三領差越ハ付、鮫島權兵衛・南郷孫七宰領申渡、足輕四人相添、今日、中急ニ而三道中差立申ハ、御用之儀ハ別紙申達ハ、恐惶、

享保六年（朱カキ）十月十三日　　久嘉

久矩

久武

久貫

嶋津内膳殿

種子嶋彈正殿

名越右膳殿

(の13)

一公義御用付而、上代之鎧致吟味可差越旨被　仰出ハ付、早速申渡、御用可罷成哉と致吟味ハ、鎧三領有之候段ハ、今月九日申越ハ間可相達と存候、右之内一領ハ樺山權左衛門家三代之先祖樺山安藝守教宗事元久公御上京之節、爲御一族致御供元久公御旅館ニ　將軍義持卿應永十七年六月　御成之節、安藝守御目見仕、拜領被仰付ハを權左衛門所持仕罷在ハ、同一領ハ右權左衛門先祖樺山安藝守幸久ゟ永錄（ママ）元年十二月國分正八幡ニ致寄進置ハ付、八幡ニ相納有之ハ、右之鎧取仕立ハ右年間より別而古代之物と相見得

忠久公御鎧同様之仕立之由ハ、然ハ別而上代之鎧を右年間ニ爲致寄進ニ而可有之ハ、同一領ハ出水（出水）箱崎八幡ニ相納有之ハ得共、何方より之寄進共由緒之譯不相知ハ、右三領ハ別而上代之鎧と相見得ハ、右付而ハ少々不足之品ゟ有之ハ得共、年來之物ハ故右式不足ハ有之積ハ、委細ハ權左衛門より之書出、又ハ上原後藤兵衛・田中諸右衛門并祝井吉左衛門・鹿嶋六左衛門書付ニ相見得ハ、右之外古キ鎧段々有之致見分ハ處、右三領之

鎧よりハ以後之仕立ニゐ格護大形故ニゐも〻哉、別ゐ損、品數大分不足有之、此節御用ニ可罷成躰無之〻付、右四人ニゑ吟味申付〻處、弥御用ニハ可難成旨申出〻故扣置〻、

一右三領之鎧長持二竿ニ入付、御歩行鮫島權兵衛・南郷孫七ニ宰領申渡、足輕四人相添、中急ニゐ三道中差越候、右鎧ハ段〻譯有之權左衛門先祖安藝守ニ拜領被仰付、又ハ古來より右兩社ニゑ爲籠置事〻得ハ、尤御考之前ニハ〻得共、御見合之御用相濟御下被成〻ハ、、早〻被差下ニゐ可有之〻、此段ゑ各迄爲御存申越事〻、

一顯娃開聞社内ニ古來より鎧壹領相込有之〻得共、右鎧ハ祭外ハ出〻儀不罷成由〻、右之次第〻へハ猶其地迄差上〻儀ハ難成事〻付、先頃御太刀見分申渡〻節、右鎧ゑ致見分させ〻處、此節差越〻三領之鎧ニ相替候儀ハ無之、其上右之譯〻故差越不申事〻、

右段〻可被達　貴聞儀ゑ宜被申上〻、右三領之鎧ハ別ゐ上代之鎧ニゐ、其已後威替〻躰ニも無之、切損〻所多有之〻付、道具ニゑ一〻致付札、取立〻節紛無之樣仕差越申〻、此段爲御存〻、以上、

享保六年（朱カキ）十月十三日　　嶋津内記（久賢）

嶋津内膳（久長）殿
種子嶋彈正（久基）殿
名越右膳（恒渡）殿

(の14)

先頃被仰渡置〻上代之鎧之儀、弥御吟味被成ニゐ可有之〻、とかく上代鎧之儀〻へハ、致全部たるハ有之間敷〻間、全部不致〻ゐも可差出と爲被仰由是又申出〻、右鎧之儀被致吟味〻得共當分迄ゑ無之〻、有之〻ハ、可被差越旨武松權右衛門便ニ被申越趣有之〻、蒐角上代鎧之儀〻得ハ、爲致全部ハ有之間敷事〻間、不致全部候ゐゑ上代鎧と爲相見得道具有之候ハ、、隨分被致吟味可被差越〻、且亦此中被仰渡〻古代作之太刀之儀ゑ、何樣有之〻哉と爲被仰由〻間、右太刀之儀ゑ被致吟味有之〻ハ、可差越〻、以上、

享保六年（朱カキ）十月十六日　　嶋津内膳

嶋津内記殿
嶋津　杢殿
伊集院藏人殿
北郷作左衛門殿

一古代作之太刀水引八幡新田宮又ハ頴娃開聞宮社内ニ相
込有之ヶ太刀、現ニハ差越ヶ儀難成ヶ、然共繪形ニ相
調候迄ニゐハ難分所ゑ有之ヶ故、直太刀少ゑ相違無之
様ニと寺社方取次、繪師・小細工人等差越木形ニゑ相
寫させ、拵之躰委相記差越ヶ方可然と申談、其通調方
申渡置ヶ段ハ十月九日申越ヶ、

一右太刀木形ニ寫ヶ付ゐハ、折角相調ヶ處、新田宮ニ相
込有之ヶ御戸丸之太刀一振、頴娃開聞宮社内ニ相込有
之ヶ太刀一振、木形漸此比出來ヶ付、右貳振之太刀木
形二腰、又ハ開聞宮太刀裏表之繪形并御戸丸之繪形壹
枚、以上貳枚寺社方取次岩崎唯右衛門并木村探元差出
ヶ書付委細相見得ヶ間、右書付貳通相添今日之便差越
ヶ、且亦新田宮社内ニ相込有之ヶ鳩丸之太刀ハ、木形
未不致出來ヶ付、折角相調ヶ得共、手之組たる拵ヶ故、
此節之便ニ差越候様ニハ不出來合ヶ付、追ゐ出來次第
差越申ニゐ可有御座ヶ、

一御戸丸・鳩丸之太刀ハ、　禁中より新田宮ニ御寄進之
由申傳迄ニゐ委細之由緒不相知ヶ、此節差越ヶ御戸丸
ハ長光作ニゐヶ、開聞宮太刀ハ古來より作又は何方よ
り寄進とも不相知、身を抜ヶ儀ハ堅不罷成事ヶ、先年
御祭之節、右太刀役々社人如何様之身ニゐヶ哉と不圖
抜可申といたしヶ故、則座蒙御罰相果ヶ由申傳ヶ、夫
故今以抜候儀不罷成事之由御座ヶ、然共此節之儀格別
之御用ヶへハ、作をゑ見屆可相記と閲をも申ヶ得共闕
下り不申ヶ付、作見屆ヶ儀難叶、尤右之次第候故、古
來より作之申傳も無之、別ゐ上代之太刀ニゐヶ故、銹
付朽入たる躰ニゐ容易可抜様子ニゑ無之由唯右衛門申
出ヶ、

一天正十五年　太閤秀吉公より
龍伯様ニ於泰平寺(川内)御拜領被成ヶ鷹之巣之御脇指、長壹
尺五寸三部、三條宗近作御讓物之内ニゐ、御拵別紙之
通御座ヶ、然共右通　御家御讓物ニゐ大切之御道具ニ
ヶ得ハ、無御差圖ニハ繪形ニ書寫シ差上ケヶ様ニゑ難
仕、其上右御脇指之儀ハ、各ニゑ御存之前ヶ故、此間
差扣置ヶ得共、自然ハ御用儀歟可有之と申談、御拵書
迄を此節差越申事ヶ、

一三宅彌市郎様より佐久間九右衛門(盛村)ニ、上代之鎧とかく
ハ爲致全部ハ有之間敷ヶ間、不致全部ヶゐゑ可被差出
旨被仰ヶ間、上代鎧と相見得ヶハ、隨分致吟味可差越

旨致承知ゟ、右付ゐハ上代鎧三領長持貳竿ニ入付、御歩行兩人宰領申渡足輕等相添、十月十三日、中急ニゐ三道中差越ゟ間可相達と存ゟ、右之外ニゑ古代之鎧と相見得ゟ鎧有之ゟ得共、此程差越ゟ三領之鎧ニ相替不申、其上別ゐ不具有之、御用可罷成躰ニ無之故差登せ不申ゟ、

右ゑ新田宮・開聞宮太刀木形究ゐ此節之御用ニ可罷成共、難取覺候得共、先頃差越ゟ御太刀拵之樣子ニハ相替、古代作之太刀ニゐ御座ゟ故、右二振之太刀繪形并木形今日之便ニ差越ゟ條何分ゑ宜被達貴聞ゟ、尤右之外ニ御見合ニ可罷成と見及ゟ古代作太刀并小サ刀無之ゟ、此段ハ爲御存ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）十一月廿五日　　嶋津内記

嶋津内膳殿
種子嶋彈正殿
名越右膳殿

覺

一御太刀惣滅金拵

但金具之内冑金石突鍔其外所〻當分之樣子黑く相成滅金之樣子不相知所有之ゟ得共、本ハめつきにて御座ゟ由金具師申ゟ故、其通箔置ニ相調申ゟ、

一石突、毛彫摺消相知不申ゟ得共、冑金之通毛彫相調申ゟ、

一柄之内當分白木ニゐゟ、本ハ錦はり抔ニゐゑ御座ゟ哉、角〻ニふけ相殘有之候得共、何絹とも難見分ゟ故有合之絹を以張調申ゟ、

一柄頭冑金之内穴有之ゟ、當分其通相調申ゟ、

一唐花丸目貫之下ニ目釘穴有之ゟ、當分目貫迄ニゐ釘無之ゟ、

一柄木之内目貫跡之樣子ニ形付有之、目貫ハ無之ゟ故其通張絹之内切抜召置申ゟ、

一貳番目帶取金物より胴金之間縁金欠ゟゐ無之、

一帶取ニ相付ゟくさり、輪金を以くさり有之ゟ、輪金蠟付亦ハ切抜之分相知不申ゟ故、此節之輪金蠟付相調申ゟ、

一御太刀之身拜見御圖下り不申ゟ故、鉏之かつかう相知不申ゟ、

右開聞宮御太刀木形相調ゟ次第右之通御座ゟ、以上、

享保六年（朱カキ）十一月廿五日　　岩崎唯右衞門

右ノ書中初ケ条ノ処ニ朱カキ入レアリ左ノ如シ

「(朱)押札

開聞宮正之太刀、柄さやともニ金滅金ニ而ハ得共、別而年久敷ハ故金色然と相見得不申、間〻金めつきの色有之、黒み勝ニ相見得候通唯右衛門申出ハ、右通本ハ金めつきニて年久敷ハ故古ひハ而黒く相見得ハ故、此節木形之儀ハ本金めつきの訳を以箔琢ニ相調申たる事ハ、柄張調有之ハ絹ヒ、色立等古ひハ而不相知候得共、錦張と相見得ハ間、此節之木形も絹張ニ相調申ハ、

十一月廿五日」

覺

一金物惣様銅と相見得ハ、但やすり目有之ハ、

一鞘黒塗

一柄麻糸之様成物ニ〆左より右よりニ合せ巻有之ハ、柄木虫喰申ハ〆糸所〻に殘有之ハ得共、惣様麻糸ニ〆巻調申ハ、

一鉛形爲御見合作込申ハ、

一目貫無御座ハ、

一鍔革之ねり物黒ぬり

一太刀作長光長サ弐尺六寸

(の17)

一禁中様御寄進と承申ハ、

右ハ新田宮御太刀御戸丸木形相調ハ次第、如此御座ハ、以上、

享保六年(朱カキ)十一月廿五日　木村探元

覺

一御中脇指三条宗近作長壱尺五寸三部

一御鞘梨子地五部割下緒袋有

一御裏指絲頭くりかた折金小尻裏革赤銅葵之御紋彫對

但小柄裏金

一御弇地赤銅亀之色繪鋒筋違金鉦崎

一御目貫銀ニ〆露(ママ)之色繪

一御小刀埋忠

一御鵐目金

一御柄琴之糸巻

一御屋目釘赤銅

享保六年十一月廿一日　御納戸奉行

覺

(の18)

(の19)

一柄頭銀金之燒付と相見得申ル、
一さる手地赤銅鳩四ツ并結目銀と相見得候、
一柄麻糸之様成物ニゐ左より右よりニ合せ巻有之ル、
一目貫鳩銀ニ金之燒付少々相殘申ル、中釘之ぼう頭同前ニ銀に金之燒付相殘ル、
一縁地赤銅筋三ツ、銀ニ金之燒付（但上下之ロニ金之燒付）
一切羽上下四枚、銅ニ金之燒付、
一大切羽貳枚、地赤銅鳩之ほり物銀少々殘有之ル、縁廻り銀きせ有之ル、底ニはめ申ル薄キ金物銅ニ金之燒付、
一鍔地赤銅覆輪、銀ニ金之燒付と相見得申ル、
一がい口銅張上黒塗、但せつは付落ゐ無之ル、
一帶取貳ツ、地赤銅縁廻り之筋銀ニ金之燒付と相見得申ル、鳩ニ銀少々相殘有之ル、
一せめ金物并石突金物、地赤銅筋花形銀ニ金燒付有之ル、
一鉏銀之無地爲御見合作込申ル、
一太刀長サ貳尺五寸壹部、作正宗と申傳ル由承申ル、
一禁中様御寄進と承申ル、
一さや黒塗

右付新田宮御太刀鳩丸、木形相調申ル次第如斯御座ル、以上、

朱カキ享保六年十二月九日　　木村探元

（の20）

一水引新田宮御戸丸之太刀、顯娃開聞社ハ相込有之ル太刀、右貳振之太刀木形・繪形之儀ハ、先月廿五日御當地差立ル御使肥後小兵衛便差越ル間可相達と存ル、其節申越ル通、新田宮内陳ハ相込有之ル鳩丸之太刀之儀ハ、別ゐ手之組たる拵ル故、木形折角調方申渡ル得共、其砌不出來合ル間、追ゐ出來次第可差越旨申越置ル、然處此節漸出來ル付、右木形・繪形今日之御使澁谷喜左衛門ハ宰領申渡、中急ニゐ三道中差越之ル、右木形太刀目釘并鉏等之様子取離ル次第、喜左衛門ハ委申含差越ル間、御聞屆可被成ル、鳩丸之儀　禁中御寄進之由ニゐ委細之由緒不相知ル、作之儀ハ正宗と申傳ル、依之右兩社之太刀先比御記錄奉行ハ及申渡相糺ル得共、何様之儀及由緒不相知ル、右通申傳迄ニゐ別ゐ古代作と相見得ル、右太刀拵書別紙壹通木村探元差出ル付差越之ル、右太刀此節之御見合ニ可罷成儀及難計ル得共、右之外先達ゐ申越ル通、古代作ニゐ御見合ニ可罷成哉と存ル、太刀・小サ刀等無御座ル、此段ハ猶爲御

存ル、

右之段申越ル條可被達

貴聞儀ニ、宜被申上ル、以上、

享保六年十二月十一日　嶋津

嶋津内膳殿

種子嶋彈正殿

名越右膳殿

(の21)

一水引新田宮ニ相込有之ル御戸丸之太刀一振、顕娃開聞宮ニ相込有之ル太刀一振、木形并繪形肥後小兵衛宰領ニ而被差越、委細被申越旨得其意ル、

一新田宮内陳ニ込有之ル鳩丸之太刀、木形、繪形澁谷喜左衛門宰領ニ而被差越、段々被申越旨相達、兩條共達貴聞候、

一太閤秀吉公より御拜領之御脇指御讓物之事ル、ハ、無御差圖ニハ繪形ニ成難致ル間、御拵書迄被差越ル旨得其意、右之御用ハ有之間敷事ル間、御拵書ニ成被差出不及扣置ル、

一右三振之太刀、木形・繪形共別紙覺書相添、正月廿日佐久間九右衛門御城ニ致持參、三宅彌市郎様ニ懸御目ル、ハ、則差上御慰ニ成ル品御機嫌之由、彌市郎様より九右衛門迄御挨拶御座ル、左ル而太刀木形之儀別而御機嫌之趣有之ル、前々より御好被成儀有之ル處、無間違段々被差上、一段之儀有之由之御沙汰ニ而御座ル旨、彌市郎様より被　仰聞ル、其許より木形・繪形類別而入念委細相記被差越ル故、上之御機嫌ニ罷成別而御大幸之御事ル、此段爲御存ル、以上、

享保七年二月八日　嶋津内膳

嶋津内記殿

(の22)

一太刀号御戸丸長光作

一太刀号鳩丸正宗作之由

右二腰薩州水引郷八幡新田宮社内相納有之ル、何比寄進之由緒不詳ル、從　禁裏御寄進之由申傳ル、年久敷物と相見得ル、

一太刀作不相知

右一腰薩州顕娃郷牧(枚)聞宮社内ニ相納有之ル、何比寄進之由緒是又相知不申ル、年代久敷物と相見得申ル、

以上

(の23)

享保七年（朱カキ） 正月

右三振之太刀木形ニ寫右之通書付相添、寅正月廿日御留守居佐久門九右衛門（盛村） 御城ニ致持參、御腰物奉行三宅彌市郎（德密）樣懸御目ハヘハ、則被差上御慰ニ成ル品被差上御機嫌ル由、彌市郎樣ゟ九右衛門ニ御挨拶之趣有之、左ルゟ太刀木形之儀別ゟ御機嫌之趣有之ル、前〻より御好被成儀有之ル處、無間違段〻被差上一段之儀候由御沙汰之旨、彌市郎樣被仰聞候通江戸より申來ル、

右木形之太刀　公義御用付ゟ被差出ル、一巻之次第ハ一段相記追ゟ可相渡ル、右付ゟ未別ゟ御機嫌之譯ゟ候付、先右之件書付相渡ル間、御記錄所ニ可相記ル、以上、

享保七年寅三月　　嶋津内記

太刀一腰作不相知

右未薩州顆娃郷牧（枚）聞宮社内相納有之ル、何比寄進之由緒不相知、年代久敷物と相見得ル通書付相添、寅正月廿日御留守居佐久間九右衛門御城ニ致持參、御腰物奉行三宅彌市郎樣ニ懸御目ハヘハ、則被差上御慰ニ成ル品被差上御機嫌候由、彌市郎樣より九右衛門ニ御挨拶有之、左ルゟ太刀木形之儀別ゟ御機嫌之趣有之ル、前〻より御好被成儀有之ル處、無間違段〻被差上、一段之儀候由御沙汰之旨彌市郎樣被仰聞ル通江戸より申來ル、

右太刀之儀未、重ゟ御用之支無之樣ニと　公義ニ差上ル木形と同樣ニ木形ニ寫、白木箱ニ入付差上候譯、ふた之裏相記納置ル、右之通此度御用成たる儀ル間、向年爲見合此書附木形と一所可納置ル、以上、

享保七年寅三月　　嶋津内記

御納戸奉行

(の24)

一鎧一領

右國分正八幡ニ樺山權左衛門先祖安藝守幸久より致寄進ル由、（朱）「寅八月十日　一御本文之通寺社方取次家村彦兵衛江申渡相渡候樣　物頭嶋津弥市郎江申渡候事　取次　高橋七郎右衛門」

一同一領

右出水箱崎八幡ニ相納有之ル由、（朱）「寅七月廿六日　一御本文之通相渡候樣物頭調所藤内左衛門江申渡候事　取次　右同人」

一同一領

右樺山權左衛門致所持置ル、（朱）「寅七月廿六日　一御本文之通桃山權左衛門江申渡候事　取次　右同人」

右未　公義より古代作之鎧御用ニゟ被相紛ル上、先頃江戸ニ被差上

公義御見合罷成御用相濟ハ、此節右鎧被相返ハ間、御兵具所ゟ請取、如本相納置ハ筋寺社奉行ハ申渡、權左衞門ハ茂受取ハ樣可申渡ハ、右通御用之御見合ニ為爲罷成儀候條、以後大形無之樣可致格護置ハ、

但納方之儀茂御法之通可申渡ハ、

右可申渡ハ、左ハゐ右鎧御兵具所ハ致格護置ハ間、それ〳〵相渡ハ樣是又可申渡ハ、以上、

（朱）「享保七年」七月　　内記

嶋津筑後

中抑ハ

（の25）

太刀一腰

嶋津筑後致所持ハ、

右茂　公義より古代作之太刀等御用ニゐ被相糺ハ上、先頃江戸ハ被差上（朱）「御本文之通筑後中抑相良新五左衞門江申渡御納戸奉行米良九右衞門江相渡候樣申渡候」

公義御見合罷成御用相濟ハ、此節右太刀被相返ハ間、御納戸より請取候樣可申渡ハ、右通御用之御見合爲罷成儀ハ條、以後大形無之樣致格護、尤右之譯慥ニ可記置ハ、（八月十日　取次　高橋七郎右衞門）

右可申渡ハ、左ハゐ右太刀御納戸ハ致格護置ハ條、相渡ハ樣是又可申渡ハ、以上、

（朱）「享保七年」八月　　内記

御納戸奉行ハ

（の26）

一御太刀一腰

一御小サ刀一腰

右茂　公義より古代作之太刀・小サ刀等御用付ゐ、御納戸御腰物之内被相糺候上、先比江戸ハ被差上（朱）「御本文之通御納戸奉行米良九右衞門江申渡候」　公義御見合ニ罷成、御用為相濟事ハ、右御太刀・御小サ刀江戸より被差下、御納戸ハ為致格護置之由、右通御用之御見合ニ為罷成儀ハ條、如本可有格護ハ、尤右之譯茂慥可記置ハ、右可申渡ハ、以上、（八月十日　取次　高橋七郎右衞門）

（朱）「享保七年」八月　　内記

1347

継豊公御譜中

正文在文庫

一太刀（号御戸丸　長光作）

一太刀（号鳩丸　正宗作之由）

右二腰薩州水引郷八幡新田宮社内相納有之ハ、何比寄進之由緒不詳ハ、從　禁裏御寄進之由申傳ハ、年代久

敷物と相見得申ハ、

一太刀作不相知

右一腰薩州顕娃郷牧(枚)聞宮社内相納有之ハ、何比寄進之由緒相知不申ハ、年代久敷物と相見得申ハ、

右三振之太刀木形ニ寫、右之通書付相添寅正月廿日御留守居佐久間九右衛門御城ニ致持参、御腰物奉行三宅彌市郎様ニ掛御目ハ得ス、則被差上御慰ニ成ハ品被差上御機嫌ニハ由、彌市郎様より九右衛門ニ御挨拶有之、左ハ而太刀木形之儀別而御機嫌之趣有之ハ、前々より御好被成儀有之候處、無間違段々被差上一段之儀ハ由、御沙汰之旨彌市郎様被　仰聞ハ通江戸より申來ハ、

右木形之太刀

公義御用付而被差出ハ一巻之次第ス、一帳相記追而可相渡ハ、右付而ス別而御機嫌之譯ス候付、先右之件書付相渡ハ間、御記録所ニ可記置ハ、以上、

享保七年寅

三月　　嶋津内記